930.2
Sh27
2
930. 2-Sh27-2ウ
1200500759667

始

930.2
Sh27
2

志賀勝著

アメリカ文學史

髙桐書院刊

1007
153

はしがき

この文學史は一般の讀書人に常識を與へるほどの意味で書いた。アメリカ文學の精神或は性格がどのやうに成長し進展したか、その史的展開の中に立つおもな作家と作品はどのやうなものであるかを説明してみようとした。そしてアメリカ文學の大體の實體がつかめてもらへれば結構だと考へた。筆者がアメリカ文學のもつ何らかの獨自な本質の展開をあとづけてみようとするものであること、それがアメリカの文化史或は民族性の形成と密接に結合するものであることを信ずるものであること、さういふ立場は序説以下本文を讀まれるうちにおのづから了解されるだらうと思ふ。そしてさういふ立場は、いきほひ初期よりも現代の部に多くのページを與へる結果となつた。これもこの文學史の特色といへるかも知れない。

印刷事情の困難なために、英字をなるべく省かねばならなくなり、そのため引用文はほとんど取りやめ、また書目も研究參考書目だけとして作品原本に及ばず、またその範圍の中でもできるだけ簡略にすることにした。しかしこれでも初めにいつたこの文學史の目的からいへば充分であらうし、この時代にこれだけの印刷でも強行された高桐書院の熱意は賞讃されてよいものであらう。

ともかく筆者としてはアメリカと吾らとの關係がかくまで密接になつた今日、このやうな小著を通じてどもアメリカの文學と文化を理解し、吾らの知識と行動（殊に世界的な行動）の上に益する所があればと願ふのである。同時にそのやうな目的を離れ、アメリカ文學が文學としての價値をもち、それ自體として鑑賞と研究に堪へるものであること、そしてそれが吾らの各自の享受とともに、ひろく日本文學の趨勢の上にも意義ある影響を與へ得るものであることを信ずるのは勿論である。

筆者の淺學懶惰と、その上現下の資料不足のために、誤りや欠陷は多いことだと思ふ。なにとぞ叱正して頂きたい。かういふ筆者を助けて原稿の淨書や印刷の整理にあたつてくれられた大谷晃一瀧川元男の二君に深く感謝するものである。

一九四七年春

甲山の麓にて

志賀　勝

目次

はしがき

序説

第一章　獨立以前（一六〇〇―一八〇〇）

(A) 清教徒時代（一六〇〇―一七五〇）……二

一、植民地――ピューリタニズム……二

二、南部の文學……一六

三、ニュー・イングランドの文學……一八

四、エドワーヅ……二三

五、ウイリアムズとシューウォル……二六

(B) 革命時代（一七五〇―一八〇〇）……二九

一、國民的文學への發足――ヤンキイズム……三九
二、フランクリン……四二
三、ウールマン――クレーヴカール……四四
四、獨立戰爭の文學……四七
五、詩の方面……五三
六、中部植民地の文學……五五

第二章　獨立より南北戰爭まで（一八〇〇――一八六〇）
――ロマンティシズムの時代

(A)　ロマンティシズムの興起――新國民文學（一八〇〇――一八三〇）……六一
一、アメリカン・ロマンティシズム……六一
二、中部諸州の文學……六五
三、南部地方の文學……七三
四、ポー……七六

(B)　ロマンティシズムの隆盛（一八三〇――一八六〇）……八〇
一、ニュー・イングランドの文學……八〇
二、コンコードの人たち……八三
三、ホーソーン……八七
四、ボストンの人たち……九一
五、奴隷解放の文學……九七
六、メルヴィル……一〇〇
七、ホイットマン……一〇三

第三章　南北戰爭より世紀末まで（一八六〇――一八九〇）
――リアリズム發生時代（過渡期）

一、鍍金時代……一〇九

二、マーク・トウェーン……一二一
三、地方色の文學……一二四
四、ラニアーとディキンソン……一二八
五、ヘンリイ・アダムズ……一三一
六、ヘンリイ・ジェイムズ……一三四
七、リアリズムの擡頭……一三七
八、隨筆家など……一三一

第四章　世紀末より現代まで（一八九〇——一九四〇）——リアリズム確立時代（機械時代）

(A)　第一次大戰以前（一八九〇——一九一四）……一三七
一、リアリズムの成長——自然主義への方向……一三七
二、ガーランド——クレーン——ノリス……一三九
三、ロマンスの流れ……一四三
四、社會批判の文學……一四六
五、大衆文學……一五三
六、ドライサー……一五五
七、詩壇——一八九〇——一九一二の過渡期……一五八

(B)　第一次大戰以後（一九一四——一九四〇）……一六三
イ、小說の世界……一六三
(I)　二〇年代（一九一四——一九三〇）……一六三
一、リアリズムの變質……一六三
二、ルイス……一六五
三、アンダーソンなど——近代的な仲間……一六八
四、女流作家たち……一七三
五、キャザーなど……一七五
六、新しきロマンス……一八〇

七、左翼的文學……一八五
八、ヘミングウェイとフォークナー……一八八
(三) 三〇年代（一九三〇―一九四〇）……一九二
一、一九三〇年代の特徴……一九二
二、ウルフなど……一九四
三、ロマンスの作家……一九九
四、歴史小説……二〇二
四、詩の世界……二〇四
一、詩のルネサンス……二〇四
二、ロビンソン―フロスト……二〇六
三、リンジィ―マスターズ……二〇八
四、サンドバーグ―ジェファーズ……二一〇
五、新詩運動の人々―イマジズム……二一三
六、ベネ、マクリーシュなど……二一九
六、批評の世界……二二三

一、ハネカー―スピンガーン……二二三
二、新人本主義の人々その他……二二五
三、メンケンなど……二二九
四、『ネイション』の群―ブルックス……二三一
五、社會的批評の人々……二三四
六、文學研究の新動向……二三八
七、戯曲の世界……二三九
一、アメリカ演劇の回顧―起源より今世紀初まで―……二三九
二、新劇の發生……二四五
三、オニール……二四七
四、グラスペル―喜劇作家たち……二五一
五、ライス、グリーンなど……二五四
六、アンダーソン、シャーウッドなど……二五六
おくがき

アメリカ史年表
研究書目
索引
地圖

序説

アメリカは若い。イギリスの最初の植民が來てから三百五十年しか經たない。獨立が完成してから百五十年である。アメリカの文學も當然若からざるを得ない。けれどもアメリカは若くないといふ議論も成立つ。何故ならそれはイギリスの延長であり、從つて又古いヨーロッパの延長であるからである。アメリカへ渡つて來たイギリス人たちは大體中流下層か下流のものが多く、それより上の階級のものでも文學・藝術の流れを掬むものは少かつた。しかしそれでも彼らが當然にもつて來た文化といふものは、この新らしい大陸の荒野の中に繁殖せざるを得ない。そして十八世紀の中頃までには、植民地の社會がその生活と平和な組織を堅固にするにつれ、そこには本國イギリスに劣らない都會や田園が發達し、例へばニユー・ヨークの劇場では當時のイギリスの地方都市のどこにも見られないやうな演出目錄をもつ劇場が生れ、一七五七年には同市で植民地の畫家たちの最初の展覧會が催された。かうしてヨーロッパ或ひはイギリスの文化はそれが從來積み上げて來た傳統をあまり失ふことなく、大西洋岸の狭く長い平地の上に新らしく活潑な成長を見せようとする勢さへもつた。しかしこれに對して根本的な變動を與へたものは、その平地の西を限るアパレティア山脈を突破して、殊に十八世紀の末獨立完成のころから西方の三千哩の平野に向つて移民たちが流動を開始したことであり、それはアメリカをして完全に若い國として發展せしむる契機であつた。アメリカはこれから全くイギリス・ヨーロッパの傳統を離れ、自己自身の傳統を育成しようとする。

アメリカの社會も生活も全く新らしい。しかし文學・藝術はその性質上、政治や經濟などの現實的關聯の濃い面と異り、直ちに新らしい環境の中につくり出すことは困難であり、從つてアメリカの文學・藝術はその後も長い間イギリス・ヨーロッパの指導的な影響から免れることは出來なかつた。しかし又文學・藝術は他の文化の面と異り、それが眞實の價値をもたらうとする限り最も直接にその環境から生れようとするものであり、又その環境は、殊にそれが眞實に獨自な生活をもつものである場合、そこから本然に生れる文學・藝術をもたないでは已まぬものである。かうして新らしいアメリカ、新らしいアメリカの生活はついに新らしいアメリカの文學・藝術を生まざるを得ない。

アメリカの文學はアメリカの國土そのものの中には文學の傳統をもたなかつた。勿論先住民アメリカン・インディアンの間にはそれらの原始人にふさはしいやうな戀愛や狩獵・戰鬪等の民俗歌謠があつたことは證明されてゐる。けれどもそれはよりすぐれた文化人であるイギリス人たちの顧慮するところでなかつた。アメリカ文學はその精神においても、表現の言語文字においても、どこまでもイギリスの植民文學の立場から自己を發展させて行つた。その限りにおいてアメリカ文學の傳統は古く深いものがある。精神上の傳統として先づ最も明瞭に認識されるものは、初期植民がその理想としてたづさへて來たピューリタニズムである。それは絶對の支配力をもつ超越的な神に對する服從の生活を根柢とするものであるが、さう

いふ精神性の反面に強靱な實踐性をもち、勤勉で利益を追ひ、その利益を積むことさへ神の道に適ひ得ることだとする。かうしてこの精神は困難な植民地開拓の最初から產業革命の進行、資本主義の高度發達の段階に至るまでアメリカ人の精神を貫き、その生活を規制する力となることが出來た。吾々はアメリカ人の單純な純潔さ、單一で明瞭な意志、強く目的物を追はんとする敏活な速度、堅忍、公共の秩序の愛、さういふものにピューリタニズムの影響を見るのであり、それらは又アメリカ文學の隨所にあらはれてゐる特色に外ならぬのであるが、それを要約すれば常にそこにある一つの理想主義であり、且つその理想が上にいつたやうに現實の實際性と密接に結びついてゐるところにあらう。

アメリカを文化的傳統から斷ち切つて全く新らしい若いアメリカたらしめたものが西部開拓地への民族移動であるとするならば、その活動と環境から養はれて來た開拓地精神いはゆるフロンティア・マインドは最も重要視されなければならない。フロンティアとは邊疆の意であり、文化の最前線が不毛の荒野に進出して行く波打際を意味する。大西洋岸に形成されたイギリス的な農民社會の南北に長い列は、既に一個のフロンティアなのであるが、それがアパレティア山脈を越え、「民主主義の谷」と呼ばれるミシシッピ流域の廣大な平野に擴がり、西への前進を瞬時も休めることなく、十九世紀の半ばいはゆるゴールド・ラッシュによつてカリフォーニアに飛火し、そこから後退しつゝ、一八九〇年に至つてアメリカの自由土地を營

めつくしてしまふ。フロンティアはかくしてやうやく終熄するのであるが、植民地そもそもの初期からこのやうな生活において養はれて來たフロンティア・マインドの特色と威力には明確なものがある。すなはちそれは風土・氣候と鬪ひ、病氣や飢えやインディアンの抵抗やしばしば婦人たちを精神異常におとし入れたとさへいはれる身に食ひ入るやうな孤獨や殺伐の氣持と戰ひながら、自己の生活を確立しようとする努力の中に生れたものであり、そこには門地や教養や金錢さへものをいはず、たゞ値のあるものは獨立の意力とそれに伴ふ體力である。そしてこの獨立心は彼らの農業の生活が次第に確立するにつれて、農業自體が商工業と異り自足自給の性格をもつものであるだけ、一層他人の干渉を排する個人主義の特徴を強めていはゆる農業的個人主義（アグレリアン・インディヴィデュアリズム）なるものを形成する。しかも困難の多い開拓地生活はこれら各個人の共同と相互扶助を必要とする機會が多く、遊樂においてさへもすべてのものが進んで例外なく參加することが要求せられるやうになり、そこから自然に平等な民主精神が生れるやうになつた。この自由と平等、個人主義と民主主義の結合はフロンティア・マインドの根幹であつて、アメリカのデモクラシイ、殊にジェファーソン式のデモクラシイといふものは、この開拓民——農民の精神の上にはじめて完全な擴がりを見せるのである。フロンティア・マインドの氣分としての特色はそれが常に快活で樂天的であることであり、粗暴であるが力強く、無知淺薄であるが率直であり、藝術上の趣味は無か俗惡であり、宗教上にあつては

しばしば群衆心理的に狂氣染みた興奮を示す。しかも彼らが樂天的であるといふのも一面の見方であつて、絶えざる困難、寂寞と努力の生活は當然彼らに一種の暗鬱の氣分を與へてゐる。しかしこのやうな彼らではあるけれども、その性格を通じて動いてゐるものは明らかに強く健やかに生きようとする生命の力であり、それが「明瞭な運命（マニフェスト・デスティニィ）」といふ言葉であらはされる自分たち民族の無限な發展の希望・自信に刺戟されて、限りなく強く延び行かうとする。それはまことにアメリカ人を古いイギリス・ヨーロッパから切り離すものであるとともに、アメリカ文學をそれらの國の傳統から引き離し、アメリカ文學としての獨自な性格・特色を具へたものを生み出さないでは置かない。そしてフロンティアが大西洋岸の植民初期に既に形成されてゐたといふ意味において、フロンティア・マインドは既に初期アメリカの文學にあらはれてゐるのであるが、フロンティアの前進・成熟とそこにおける政治・經濟の獨自な發達は當然最も濃厚なフロンティア精神の具現としての文學を生むのである。そしてそれが最も明瞭な意味のアメリカ文學であり、そのことは前世紀後半から今日に至るまでのアメリカ文學の發達の中に明らかに看取せられるのである。

ピューリタニズムとフロンティア・マインドの次にアメリカの民族性を規制する精神として考へるべきものはリアリズムの精神或ひは近代的科學の精神といふことが出來よう。それはアメリカの資本主義の高度の發達に並行して發達して來た精神であり、産業における生産と消費の過程、又それを基礎とする家庭

や社會の生活に科學的な現實的な觀念と實行を行き渡らせようとするものである。そこには神の權威に屈して人間を堅く押しちゞめようとするピューリタニズムの陰鬱な決定論の束縛がないとともに、人間の立場を全く自由なものと見、自己の努力の成功を期待するフロンティア・マインドの放恣な樂天觀もない。そこには現實の困難、現實の抵抗を正直に凝視し、自然の環境と社會組織の人間に對する强大な決定力を認め、しかもさういふ現實を回避することなく、現實を征服し或ひはむしろ現實の力を利用して、そこに最も合理的・能率的な人間の生活を築かうとする。そしてこのことはアメリカ人が元來アングロサクソン民族としてもつ實際性、抽象や理論を避けて歸納的な實證的な立場の上に生活を立てようとする本性によく一致する。アメリカ人は人口の稀薄な無盡藏な資源をもつ新大陸に上陸した時から、實利を獲得しようとする衝動を一方的に强く促されて來たのであり、しかもその逐利性は自然の豐富な環境によつて充分に報ひられ、十八世紀の末、十九世紀のはじめ頃には彼らは既にイギリスやヨーロッパの人々の知らない生活の豐富さを味はつてゐたと考へられる。かくして「よき生活の愛(ラヴ・オヴ・ウェル・ビーイング)」或ひは「生の悅び(ジョイ・オヴ・ライフ)」の慾求はアメリカ人の個性の最も著しいものとなり、十九世紀から二十世紀に至るアメリカ產業と資本主義の充實發展に伴ひ、アメリカ人の智能と意力を、出來るだけそのやうな現實な幸福の獲得、いひかへれば最も人間らしい生き甲斐のある生活の實現にふりむけようとするやうになつた。こゝに生れたものが能率本位の產業經

營であり、吾々の住居や生活必需品の隅々にまで行き渡る科學的な便益化、明朗化であり、その能率化、企畫化は個人と社會の生活のあらゆる面と組織を規定するとともに、何時しか内面的な思想の側にまでその明らかなあらはれを見せるやうになる。ウィリアム・ジェイムズによつて樹立されたプラグマティズム(Pragmatism)の哲學もこれに外ならない。しかもこのやうな現實的科學的な思想は今少し廣くアメリカ人の宗教や政治の考へ方から、日常のオフィスや街頭の動作における心構へをも支配しようとしてゐるのであつて、アメリカの文化はこのやうな科學的な契機から一つの新らしい自己發展の段階に入らうとしてゐるのではないかとも觀察される。すなはちそれは古いヨーロッパやイギリスの文化から離れたものであるとともに、自分のうちのピューリタニズムやフロンティア・スピリットに推進されて來た文化とも異なるものであり、一面的な悲觀や樂觀でなく充分な現實の認識の上に最も確實な人間乃至人類の幸福を築いて行かうとする新らしいコースの上に移つてゐる。(そのことは恐らく第二次世界大戰におけるアメリカ人の戰爭方法と戰後の世界にかけてゐる彼らの理想の上にまで見ることが出來るであらう。)アメリカ人の文化乃至生活がこのやうなリアリズム或ひは科學主義の上に新らしい發達をなしはじめてゐることが事實とすれば、それは當然その文學の上にもあらはれて來るべきであり、實際我々はそれを殊に過去半世紀ほどの間のアメリカ文學の烈しい發展と變貌の中に見ることが出來るだらう。そこには例へば資本主義の發

逆のために壓迫される個人や、物質的な慾望のために窒息させられる人間の魂が問題とされても、それは一應悲觀的な決定論に墮ちながらそこから立ち上り、着實な努力と希望をもつて實際において充分な自由と有利な解決を獲得しつゝ、大衆も個人も大體において幸福で充足した生活を享受する方向に向つてゐる。そこに文學者の信念も又生活の味はひ方、趣味そして表現の特色もある。それは氣分においては堅實で合理的で一種の明晰な爽やかさであるといへよう。こゝに現代アメリカ文學の性格の重要な部分がつくられつゝあるのではないか。吾々はなほこの科學的なリアリズムの將來を見守らねばならない。

次にアメリカ文學の要素として地理的な背景を考へねばならぬが、それについては一般的にいつてアメリカの寒さと暑さはそこに來た植民たち、殊にイギリス人が從來一度も經驗しなかつた程度のものであり、その暑さと寒さ或ひは日光の豐富さと乾燥の激しさといふことなどはことごとく植民たちの性格や體質をも替へ、その文化や文學にも影響を與へたことをいつて置きたい。その上にアメリカの廣い國土はそれぞれの地方によつて風土・氣候・天產・交通等に甚だ異つた特色を與へ、それは例へばニュー・イングランドとヴァージニア地方、或ひはカリフォーニア地方をとつて考へる場合の如く、その生活と文化、從つて文學に驚くほど相異した特色を滲み出す。かうして吾々はアメリカ文學に殊に前世紀の末頃地方色の文學なる型を見るやうになるのであるが、それは現在に至つては地方主義の文學となり、單なる地方色の珍ら

しさでなく、各地方の歷史や地理や社會生活の特色を現實に把握するところに新らしい價値ある文學を發見しようとする運動となつた。そしてアメリカの國土の廣さと多樣性は充分にこの運動を發展させてゐるのである。かうして吾々が殊に現在のアメリカ文學を鑑賞しようとする時、それぞれの作品がどのやうな地方に屬する作家により、どのやうな地方を題材として書かれたものであるかといふことに特別の注意を拂ふ必要がある。地方主義はアメリカ生粹の土地・題材による文學をつくらうとする點において、愛國的・國民的ともいへるのであるが、それが地方の特色に執着する點においてはかへつて反國家的であり、アメリカそのものを超越した世界的な味はひをもつといへる。いづれにしてもアメリカの地理的要素はアメリカ文化の發達と文學範圍の全國的な擴がりによつて、複雜多樣で獨得の興味ある現象を生んでゐるのである。

次にアメリカの人種的要素について考へねばならぬ。アメリカ大陸は人種の坩堝だといはれる。世界のあらゆる人種が主として生活のため或ひは精神上の欲求によつてこの大陸に流れ込み、この巨大な社會的生活の中で一つのアメリカ人なるものに融合されつゝあるのであるが、その一面において各人種の特質は容易に消滅しないものがあり、それがアメリカの文化と社會の形成にそれぞれ重要なあらはれや矛盾を見せてゐる。アメリカ植民の初期は勿論イギリス人が中心であり、それにスコッチ・アイリッシュとドイツ

人が加はつた。十九世紀の中頃からはドイツ人とスカンディナヴィア人とアイルランド人が多く、一八八〇年頃から第一次大戰頃までにはスラヴ人と南歐人の大量流入があつた。そしてこれらの人種はそれ〴〵その人種の特性をもつとともにその移住した地方やそこで取つた職業によつて一層その特色を分離させることとなつた。しかもこれら移民の數はきはめて莫大であり、アメリカの總人口を急激に増加させるとともにアメリカ人の純潔さを絕えず攪亂する。例へばこれは大都會の特殊な例であるが、一九三〇年の調査によればニュー・ヨーク市七〇〇萬の人口中六五〇萬が白人であるが、その中五〇九萬が外國系で、イタリア人ばかりでも一〇〇萬人を占めてゐる。又同年の全國人口約一二〇〇〇萬人のうち、非アメリカ的白人人種が三八七〇萬すなはち全人口のほとんど三分の一を占めてゐる。アメリカ國內には五十數種の人種が住み、白人のみにても四十餘種ありといはれる。このやうな狀態においてアメリカ人が安定した一つのアメリカ人として着實に文化を累積、形成し、又その文化の中で純一な行動をつゞけることは不可能なことであり、かくてアメリカ人は常に「變化する」といはれる。例へば一九二〇年後のアメリカ文學は南北戰爭以前のアメリカ文學よりもかへつてフランス・ロシヤ・ドイツの文學に似てゐる。それは一八八〇年代以來の北歐及び南歐移民の大流入によると考へる論者がある。それはたしかにアメリカ文學の特色を衝いた觀察である。

吾々はこのやうにして絕えず混亂流動するアメリカ人とその文化・文學を考へねばならぬ。しかしそれとともに重要なことはそのやうな反面において一つの統一した「アメリカ人」なるものが形成されてゐることである。それはそのやうな多人種の血液の混合により、又氣候風土とそれに適應する生活方法の影響によつて、次第に本國のイギリス人とは異なる人種となつて來た。しかも思想や生活風習においてだけでなく、肉體的にまで異なる新らしい人種となつて來た。旣に十八世紀の半ば過ぎ當時百六七十萬の人口であつたアメリカ人は、彼ら自身が意識すると否とを問はず本國のイギリス人と甚しく相異する混成的一民族であつたと見る論者もある。すなはちそこに一つの「アメリカ人」が成長しつゝあつたのであり、それはその後絕えず變化し流動しつゝもその變化そのもののうちにかへつてアメリカ人としての特性を明瞭にあらはして、イギリス人と異なる從つて勿論世界のどの民族とも異なる一つの民族をつくつてゐるのである。そしてこのやうなアメリカ人の中から生れる文學がきはめて相異した人種的な要素を含みながら、そしてそれらが絕えず矛盾混亂そして融合流動しながら一つの明確に獨立した「アメリカ文學」なるものをつくり上げてゐることも疑ふことの出來ぬ事實であるといはなければならぬ。すなはち人種的要素はアメリカの文學において他の文學に見ることの出來ぬ複雜な意味をもつのである。

以上のやうな精神的要素と地理的人種的要素によつて構成されてゐるアメリカ文學の特色は、おのづか

ら明らかである。それ等要素の反映については旣に上にふれた如くであるが、殊にピューリタニズムの傳統を通して、イギリス文學の特色がこの文學に傳はり擴つてゐることは否定出來ない。けれども上に考へて來たやうにアメリカ文學はイギリス文學の傳統或ひはその支配から脫け出て、新らしい自己を成長させて來たことに大きな意味をもつのであり、そのやうなアメリカ文學を展望する時、吾々は當然イギリス文學と異る、或ひはすべての古き文學と異る獨自の特色をアメリカ文學に見ねばならない。そのアメリカ文學の味はひ、すなはちアメリカ文學としての美的價値は一つの言葉をもつてあらはせば、「粗野性」といふべきでないかと筆者は考へる。粗野は一面においては素朴・原始性を意味し、他面においては新鮮・現代性を意味する　それは力と豐富と單純の美であり、完成・洗練されたものでなく、未完成の生命の美である。それは精神的美を無視しないけれども肉感的な美をはゞからず尊重するものであり、その肉感性といふものもしばしば單純に肉體的な、或る場合スポーツ的な筋肉的な美である。このやうなアメリカ文學はその文字の表現の面においては事實に執着し、それを現實的に再現しようとする細叙主義をとり、象徵主義に反對する。象徵美の缺乏すなはち餘情美・餘白美の缺乏はこの文學の著しい特色であるが、しかしそれは反面において冗漫ではあるが、豐富な美の味をかもし出す。又均正・節度の美の缺乏は混亂してゐるが活力のみなぎる美を意味し、濕潤な幽玄美の缺乏は乾燥であるが明晰な美の存在を示す。このやうにすべて

の文學の場合と同じくアメリカ文學の缺點は直ちに又その長所であり、その特徵が著しいものであるだけ、その缺點・長所の印象も深いものとなる。そしてすべてこのやうな缺點・長所を具へて生き、動き、成長しつゝあるところにアメリカ文學の本體があり、つまりは粗野性たる語で要約せられる未完成の生命の美があるのである。そしてそれは結局民族の若々しさ、文學の若々しさと結びついたものである。そしてこのやうな美を充分に味はひ得ること、或ひは理解をもつて愛し得ることは吾々がアメリカ文學を完全に鑑賞し、批判し得る鍵だと筆者は考へる。このやうな美に理解と愛をもたない限り、アメリカ文學の存在の歷史的な眺望できへも不可能である。アメリカ文學をイギリス文學の分派と考へたり、イギリス文學の美の樣式や或ひはイギリス文學史の同時代との單純な比較によつて、アメリカ文學を評價しようとするやうな態度に陷る。吾々は勿論アメリカ文學が受けてゐる傳統の價値を輕視するものでなく、その傳統が現在にまで脈を引いてゐることを否定するものでもない。たゞ吾々はアメリカ文學を出來るだけそのあるがまゝの姿において把握したいと思ふものであり、それには一つの獨立して成長し、現になほ成長しつゝあるアメリカ文學なるものを尊重するのである。そしてその美の樣式については、例へばこゝに粗野性といふ美を認識することによつて、それが歷史的に時代から時代、作品から作品への連繫をつくりつゝアメリカ文學の個性として發達しつゝあることを認めたいのである。すべてこのやうなことはこれをアメリカ文學の

表現である英語について見ても明らかなことで、土着の方言と外來語とそして理由もわからない變形や結合や省略の自由さによつて刻々に目まぐるしくしかし生き生きと變化成長してゐるアメリカ語なるものを見ても、それとイギリス文學との距離は明らかであらう。事實アメリカの作家・詩人はこのやうなアメリカ語の驅使と自由な表現と構成の創意によつて旣にアメリカとしての文章をもち、或る場合イギリスやヨーロッパの文學者に影響を投げかけようとしてゐるのである。

アメリカ文學を上のやうに考へて來て吾々はそれがアメリカ文化の發達、殊にその將來と密接に結びついたものであることを感じる。アメリカ文學の獨自性はアメリカ文化の獨自性でなければならぬ。アメリカ文化がそのデモクラシィと資本主義とそして新らしい科學主義を含みながら、これからどのやうに成長し又世界の上に擴がつて行くかにつれて、アメリカ文學はその獨自な性格を一層明瞭にして行くであらう。どの國の文學でもさうなのであるが、アメリカ文學ほどその環境である社會の現實に、文化の本體に食ひ入つてゐるものは少い。それほど現實的・事實的であるところにアメリカ文學の（從來の文學美の觀念と相容れない）一種の卑俗性があるとともに、そこに又この文學のもつ新鮮な意義があり、文學の美の觀念と文學の社會的な機能において從來にないものを引き出すとともに、それが將來にどのやうな展開を示すかについて、吾々の關心をひくのである。これまでアメリカ文學史の研究が文化史の研究と結びつけら

れようとする特殊な傾向も、このやうな意味から是認せられるといへる。ともかくもアメリカ文學はアメリカ文化と同じく現在の知性への大きな課題であり、吾々はあらゆる方面から出來るだけの方法をつくして、この文學の眞實な姿を把握することにつとむべきであらう。

第一章　獨立以前（一六〇〇―一八〇〇）

第一章　獨立以前（一六〇〇—一八〇〇）

(A)　清教徒時代（一六〇〇—一七五〇）

一、植民地——ピューリタニズム

イギリス人が北アメリカへはじめて植民として渡來したのは一六〇七年であり、それは大西洋岸の南部今のヴァージニアのジェイムズタウン（Jamestown）であつた。次の記憶すべき植民は北部のマサチューセッツのプリマス（Plymouth）で、一六二〇年のことであつた。南部にはじめ渡來した人々はイギリスで生活や失業苦に惱んだ下層社會の勤勞者や犯罪者であり、彼らはその地方には「イギリスで見る銅よりも澤山な金がある」といふ噂にひきよせられ、その地に逃亡して新らしい生活の機會を摑まうとしたのである。しかしそれは勿論僞りの傳說に過ぎなかつたが、黃金の代りに煙草といふ植物が豐かに茂る土地であることを彼らは發見した。そしてイギリスの清教徒革命（一六四二—四九）の結果、多數の廷臣・貴族の子弟その他上流及び中流の人々がこの地方に移住して來たときには、廣い沃野が次第に整理され、そこにその天惠の植物が無限な收穫を巴はせて生々と伸びつゝある景があつた。かうして彼ら上流者は下層社會や奴隸を使

つ―この土地に大規模な農園を經營することを思ひ立つた。その結果吾々がヴァージニアに見るやうになつたものは煙草を輸出するに便利なやうな川口にまで伸び擴がつた農園で、各農園の間は殆んど獨立で直接に本國イギリスと連絡した。したがつて村といふものや町といふものも容易に組織されず、敎會の統制も當然稀薄（或は不可能）であつた。このやうな農園組織は、そののち棉花がこの地方に栽培され、多數の奴隷の輸入とともにますます盛んになつて、富の中心がヴァージニアから更に南方カロライナに移るやうになるまで、逐年繁華な發達をみせ、南部一帶に一種の封建的な貴族文化を現出することとなつた。彼ら地主は宏壯な邸宅に住ひ、華美な衣服をまとひ、王者の如く奴婢にかしづかれ、遊興としては競馬や鬪鷄に熱中した。しかし勿論このやうな地方にも小規模な農家がないわけでなく、殊に貧困な白人たちはそのやうな貴族の壓迫を逃れて、西方の高地地方に移り、そこで野蠻な、しかし質實勤勉な生活を營んで、みづから意識することなく、アメリカ人の西方進出のさきがけとなる貴重な役割を果してゐた。

次に北部のプリマスに渡來したのは、メイフラワア (Mayflower) 號に乘つたいはゆるピルグリム・ファーザーズ (Pilgrim Fathers) たち百二名の一團であるが、一六二〇―四〇年の間に淸敎徒の大移住が行はれ、マサチューセッツ灣植民地が形成されるやうになつた。これらの移民は普通世上で考へられてゐるやうに純粹に宗敎的な動機をもつたものでなく、そのことはメイフラワア號の船客のなかで、かつて信仰の自由の

ためにオランダに逃避し、そこからアメリカに渡來してきた正統の分子は三分の一にすぎなかつたといふ事實によつても證明されてゐる。しかし宗敎的動機が最强であつたことは疑ふべきでなく、殊にこれら移民の中樞となつたものはイギリス中產階級の鄕士 (Yoeman) 出のものが多く、ケンブリッヂその他で大學敎育をうけ、その敎養と信仰において充分に精神的な資格をもつものであつた。彼らはイギリス國敎會の因襲的な信仰の俗惡とその壓制に反抗し、この新らしい天地に獨立した信仰と經濟の生活を求めたのであり、その信仰の中心をなすものはカルヴィン (John C. Calvin, 1509―64) の唱道した神中心の嚴格な信條であつた。しかも彼らは半ば貴族的な敎養ある中產階級として、一般民衆の勝手な意見や集團的行動に危惧をもつものであり、その嚴格な信條を行政の面にまでひろげ、いはゆる聖書的社會（神政國家（シオクラシー））を建設しようとした。そしてそれは彼らの强い意志と巧妙な實踐的才智によつて驚くべきほど完全にしとげられた。彼らはこのやうに一面は精神的敎養的な紳士社會の貴族性に接觸し、他の面は實際的功利的なブルヂョア階級の世俗智に接するものであり、彼らの行き方はその階級的位置から當然に結果されたものといへるが、この後者の商人的性質の發展は、のちにいたつてアメリカ特有のヤンキイズム (Yankeeism) を生むにいたるのである。

この淸敎徒たちの居住した地方は、南のヴァージニアと異り、海岸からあまり遠くない距離にアパレテ

イデの山脈がたかまり、しかもその間の土地も地味は瘠せ、岩石は多く、丈深い森林や沼地でおほはれてゐたりした。その上冬半年の寒さは彼らイギリス人が本國で經驗したこともない酷烈なものであつた。このやうな環境のなかでは當然集約的な自作農の經濟が行はれなければならぬ。移住民たちはそれぞれ小面積の土地を分けあたへられ、綿密な注意と勤勉さもつてそれを耕作して行つた。さらにその生活費を補ふために漁業・造船・紡織の方面にも發展しようとつとめた。かうして吾々はいはゆるニュー・イングランドの狹く限られた一郷に集團的な農家の村或ひは町の出現をみるのであり、しかもそれを少數の指導者の嚴格な宗教的信條がむしろ專制的といつてよいほどの形態に統治してゐた。住民たる資格は教會の會員であることを第一とせられ、教會の出席は嚴格な罰則をもつて强要せられ、しかもそれら住民の政治を實行する役員（知事その他）の地位は、中心の十名ないし二十名位の指導者に獨占された。彼らがかゝげるそのカルヴィニズムの信條といふものは、「人間はアダムの原罪以來とうてい救はれない惡の性質をもつものであり、日々の微細な行動にいたるまで自己の意志を許されず、ことごとく絕對超越・全能の神の支配のなかにある「意志束縛の信條」。そのやうな個人の靈魂を救ふことも神には何の約束も責任もなく、たゞ自分の選ぶものを救へばよい「選擇或は豫定」。この選ばれた少數者（聖徒）と、救ふべからざる多數の民衆（罪人）との對比の中に、神政政治は少數者支配の正當な論據を與へられてゐると考へられた。そしてこ

の聖徒が常に神の窮極の保護恩恵を蒙つてゐるものだとの自覺は、彼ら清教徒に植民地建設の困難に耐へその政治を强行する勇氣を與へた「聖徒の堅忍」。このやうな强烈な信條の實行は、その緊張と人間性の壓迫によつて陰鬱な空氣をかもしながらも、植民地の困難な事業が結束と獨裁的政治を必要とする理由もあつて、前後に類例もない特殊な社會形態を形成しつゝ、それが植民のはじめ以來百五十年の長きにわたつて維持されたのである。

なほ吾々は南部と北部にイギリス人が植民してゐる間に、その中間の豐富な地帶がオランダ人によつて開發され、今のニュー・ヨークを中心に商業的な色彩の濃い社會がつくられてゐたことを注意しなければならぬ。このニュー・ヨークすなはちニュー・アムステルダムがオランダ人に建設されたのは、一六二三年であつたが、イギリス・オランダの戰爭の結果、一六六四年それはイギリス人の手中に入つた。そこは商業地であり、貿易交通によつて當然異人種にも寬容なコスモポリタンの性格をもつてゐた。

いま一つペンシルヴァニアの植民地は、クェーカーの使徒ウィリアム・ペン（William Penn. 1644—1718）によつて一六八二年その中心地フィラデルフィアが建設されたものであり、その建設の精神は高貴な宗教的人類的な理想にもとづき、清教徒たちに見られぬ無私で自由な美點をもつてゐた。從つてニュー・イングランド植民地の排他方針と反對に、あらゆる民族や宗派の迫害されたものや、不幸なものを快く迎へる

態度をとつた。かうしてこの植民地は政治的にも宗教的にも自由の地として、ドイツ・スコットランド・アイルランド・フランス等多くの國々からの移民が、さまざまな風變りな宗派とともに渡來することとなつた。そしてさういふ空氣の中から、當然明るい文化的な精神が、他の地方よりも早く生れてきた。

二、南部の文學

以上のやうな植民地の開發時代に文學の名に値する文字を求めることは勿論無理である。そこに書きのこされたものは、個人の經驗の記錄・日記の類や宗教的・政治的團體の發達を記した歷史年代記の類に過ぎない。それらは又時としてこの未開地に移民を呼びよせようとする廣告・宣傳の性質をもつものであつた。南部から出た旅行記、ジョン・スミス (John Smith, ? 1580-1631) の *A True Relation of Such Occurrences and Accidents of Note as Hath Happened in Virginia* (1608) はアメリカの最初の書物だといふ名譽をになつてゐる。スミスはイギリスのリンカンシアの一村落に生れ、少年のころ家出して海に走り、船長として多難な冒險的な生涯を送つたのであるが、彼の書きものには空想的な虛僞がまざつてゐるといふ

批評はありながら、その繪畫的で興味深い書きぶりは、愛讀を誘ふに充分であり、殊にヴァージニアへの移住や、それに引きつゞくニュー・イングランドの冒險を書き記した部分は、當代の研究に重要な價値をもつてゐる。スミス船長は結局イギリス人であり、アメリカでの冒險ののちにはイギリスに歸つて、老後を養ふこととなるが、同様にイギリスの詩人ジョージ・サンディス (George Sandys, 1578-1644) はオヴィド (Ovid) の飜譯をこの地方に滯在中に完成した。しかしそれがどのやうにすぐれた飜譯であつても、アメリカ人の文學とよぶことは不可能であつて、そのやうな點で南部の文學で注意すべきものを集げるとすれば、ウィリアム・バード (William Byrd, 1674-1744) の書物であらう。彼は富裕な大農園の主人であるが、一七二九年ヴァージニアとノース・カロライナの境界設定のための測量團に加はり、その經驗を *The History of the Dividing Line* (一八四一年發表) と題する稿本に書きのこした。それは山地地方の自然や野人の生活を皮肉な機智とユーモアをもつて生々と描寫してゐる。彼はヴァージニアに生れながら、イギリス・オランダ・フランスに學び、植民地の代表として政治上に重要な働きをしたが、ジェイムズ河畔に有名なウェストーヴァー (Westover) の莊園を營んで貴族的生活を樂み、當時アメリカのどこにも見られない立派な圖書室をつくつて、その知性的趣味の豐かさを示してゐた。

なほ作者不明といふべき Eben. Cook, Gent. の *The Sot-Weed Factor; or a Voyage into Maryland* (1708)

なるものがある。これはイギリスからきたタバコ商人の新植民地における觀察經驗を諷刺的に書いた詩である。

三、ニュー・イングランドの文學

南部の農園生活からくる氣分には、一種のだらけた淺薄なものがあり、文化の自由や豐富さをもつやうであつて、その興味は競馬や鬪鷄のやうなものに走り、精神的な緊張や內省といふやうなものはいづくにも發見することはできなかつた。それに對して北部のニュー・イングランドの生活はよし陰鬱であつても絕えざる自己內省や、聖書の熱讀や、敎會の憲法やさういふものが精神の緊張と鍛錬をうながしてゐた。文學を生む下地は、かうして北部においては南部におけるよりはるかに濃厚であつたといはなければならぬ。そしてたしかにそこに書きのこされたもののなかに吾々はそのやうな精神的なひらめきをみるのであるが、たゞそれらの書きものの多くは、宗敎上の論文や論爭のパンフレットは勿論のこと、日記・歷史のたぐひまでゐあまりに宗敎的であり、あまりに冷く、暗い歪みをしめしてゐて、純粹な文學の味はひを感ぜしむるものをほとんどもたない。

まづ歷史としてはウイリアム・ブラッドフォード (William Bradford, 1589 (90)–1657) の *History of Plymouth* (一六五〇年頃完成、一八五六年發表) があるが、彼はメイフラワーの一行の一人であり、プリマス植民地の第二代の知事となつた。これと並べて考へられるものに、ジョン・ウインスロープ (John Winthrop, 1587 (8)–1649) の日記、いはゆる *History of New England* がある。彼はマサチューセッツ灣植民地の知事であり、名門の出でケンブリッヂに學びながら、チャールス一世の壓制に反抗してイギリスを逃れた。その歷史は渡米の航海から移住後のさまざまな出來事を平凡な事實までこまごまと書きとめてゐるが、さういふなかにも神の意志や審判が人間の運命の上に、どのやうに微妙にあらはれるものかといふことが眞劍に書きとめられ、當時の人がどのやうに信仰の絕對力を信じてゐたかを物語つてゐる。

このやうな宗敎的性格をもつものとして最も注意すべきものは、當時のニュー・イングランドの牧師の代表といふべきいはゆるマザー王朝の人々の書きのこしたものである。Mather Dynasty とはリチャード・マザー (Richard Mather, 1596–1669) インクリース・マザー (Increase Mather, 1639–1723) コトン・マザー (Cotton Mather, 1663–1728) サミュエル・マザー (Samuel Mather, 1706–1785) の四代にわたる非凡な强靱な家系である。

リチャードは牧師で、英國々敎會に背き、ひそかにボストンに逃れてきたのであるが、その學問と權勢

窓によつて間もなく重要な存在となつた。その子インクリースはダブリンで神學を學び王政復古によつてボストンに歸り、爾後六十年間聖壇にたち、二十年近く（一六八五—一七〇一）ハーヴァード大學の總長をつとめ、また植民地代表として本國政府と折衝し、巨大な保守的勢力として八十五歳まで生きた。しかもその間に百六十冊の書物と冊子を書いた。その子のコトンは、その學問と著述の上では父を凌ぐとさへいふことができる。彼は數簡國の國語に通じ、三百八十二冊の著書をそれらさまざまな國語をもつて書いた。そして父と同じくボストンの北教會の牧師たること四十年を越え、その學問的名聲はヨーロッパにまで聞えた。しかしそのやうな學問とそしてあらゆる人を威壓する風彩・態度にもかゝはらず、彼の知性は非常に狭くかたより、人間的な感情のうるはひをもたず、たゞその父祖から受けついだ固陋な信仰によつて自己と他人の生活を一様に律しようとした。そしてその間に時勢の自然な變化によつて、ニュー・イングランドの牧師社會が世俗の權力に次第に服從しつゝある眞相に氣づかなかつた。そしてさういふ點から失敗や失望を經驗するにつれて、ますます反動的な態度を固めて行つた。彼の代表的著作は *Magnalia Christi Americana, or The Ecclesiastical History of New England* (1702) であるが、彼はそのなかでも傳統のクリスト教の眞髓を說いて、現代の青年の墮落に警告を與へようとしてゐる。彼のいま一つの有名な書物は *The Wonders of the Invisible World* (1692) であるが、そこには惡魔の實在が說明され、いはゆる妖術(ウイッチクラフト)

のおそるべき例が記錄せられてゐる。當時ニュー・イングランドの人々がその歪んだ信仰の結果、このやうな迷信を信ずるやうになり、その結果滑稽なしかし悲慘な妖術師狩りの現象をまきおこし、それがセーレム (Salem) において最高潮に達したことは一つの深刻な歷史的事實であるが、コトン・マザーの勢力とその著述がこのやうな異常な現象に影響するところが深かつたことは疑ふことはできない。

なほ當時の散文では、ナサニエル・ウォード (Nathaniel Ward, ? 1578–1652) の *The Simple Cobbler of Aggawam in America* (1647) が注意される。ウォードはマザーたちに劣らぬ峻嚴な神政主義者で、この書は本國の思想的政治的混亂を憂ひて絕對統制の必要を主張したものであるが、文章として手のこんな美文體であるところに彼の周圍には珍らしい才筆を示してゐる。

更にニュー・イングランドの教會で多年にわたつて用ひられた讚美歌の書物に *Bay Psalm Book* (1640) と呼ぶものがある。それはリチャード・マザーとジョン・エリオット (John Eliot, 1604–90)（インディヤンに宣教し、「インディヤンの使徒(アポスル)」と呼ばれた人）が主として編輯し、ヘブライ語の原典から飜譯したものであるが、吾々はそれを見ても當時の宗教家がどのやうに詩的感情に缺乏し、高き信仰を歌ふに如何に粗雜で乾燥した字句と、不自然な音律を用ひてゐるかに驚くのであるが、しかもこの書物が獨立戰爭の直前までニュー・イングランド全地方を通じて廣く用ひられ、樂器の伴奏もなく、いくつかの古くさい音譜

でうたはれてゐたのである。

即ニュー・イングランドにおけるいさゝかな詩のあらはれと見るべきものはアンヌ・ブラドストリート(Anne Bradstreet, ?1612–72)の書きのこしたものである。彼女は知事トマス・ダドレイの娘で、夫も亦知事であつた。十六歳で結婚、十八歳のときイギリスを離れ、この荒々しい植民地に住み、絶えず不健康に惱まされ、又八人の子供をもつ家庭のつとめにわづらはされながら、讀書と思索と執筆の業をやめることはなかつた。彼女の詩集は一六五〇年ロンドンで *The Tenth Muse, Lately Sprung Up in America* なる大きな表題で、彼女の知らぬうちに出版された。その作品の主なるものには、數千行にわたる *The Four Monarchies* を始め *Four Elements* や *Four Seasons* を述べた詩があるが、彼女のよき要素のあらはれてゐるのは、そのやうな努力一途の模倣的な長詩でなく、詩集第二版に追加された *Contemplations* の如きであり、そこには氣どらない精神的態度が純眞な自然の描寫とむすび合つて、ところどころにすぐれた詩の效果を示してゐる。それはニュー・イングランドの荒野に咲いたわづかに白い野花とも見られるのである。

このやうな野花に比較して、いかめしく、怖ろしいものはマイケル・ウイグルスワース(Michael Wigglesworth, 1631–1705)の *The Day of Doom* (1662)である。それは最後の審判の日において、いまだ罪をも知らず快樂に耽つてゐる人々の上にどのやうに神の刑罰が下るかを述べたもので、あらゆる懇願も效果なく、

嬰兒さへも地獄に送られる。しかも彼ら罪びとは死の希望をもつことさへゆるされず、永遠にその肉體の苦痛を忍ばねばならぬ。「晝も夜も彼らの責苦の煙は立ち上る」のである。彼の千五百行の長詩はこのやうな罪人の苦しみを飽くことなく、むしろ一種の快感をもつかの如く敍述するのであるが、しかも彼は虛弱な體質でありながら老衰ののちまで說教を怠らず隣人に對する愛を失ふことがなかつた。むしろそのやうな性格であるだけ神の憤りに對するおそれを深く感じたものとも考へられる。彼はイギリスに生れ、ハーヴァードを卒業し、モールデン(Malden)の町の牧師となり、死に至るまで五十年間つとめ、かたはら醫師として奉仕したのである。

四、エドワーヅ

ウイグルスワースの人物及びその詩から直ちに聯想されるのはジョナサン・エドワーヅ(Jonathan Edwards, 1703–1758)である。彼はニュー・イングランドの精神の最高峯ともいふべきで、或ひはむしろアメリカ思想界の最初の偉大な代表者とも考へられる。コネチィカット州のイースト・ウインザー(East Windsor)に生れ、イエール大學に學んだのち、祖父を助けてマサチューセッツ、ノーサンプトン(North-

ampton) の教會に働き一七二九年正牧師となつた。そしてその冷嚴な説教の威力によつて次第に名聲をたかめ、つひに一つの信仰復興——いはゆる Great Awakening をまき起した。エドワーヅの説くところは神の無限な偉大さと人間の微小さであり、常に神を畏れて正しく道德的な生活を嚴格に貫くべきことをくりかへし單純にしかし深刻に説くのであつた。エドワーヅの自信はその干渉の態度をますます强くして行つて、教會員の私生活を批判し、青年少女が背德的な書物を讀むことを責め、その書物にはサミュエル・リチャードソンの小説 Samuel Richardson : *Pamela* さへ含められてゐた。そして聖餐式にあづかる者には眞實の回心の經驗・その告白が必要であるとまで徹底するにいたつて、彼に對する反感はついに爆發し、教會の幹部は彼を聖壇から追放するといふほとんど前例のない處置をとつた。一七五〇年エドワーヅは西部マサチューセツのストックブリヂ (Stockbridge) に行き、インディアンに説教しつゝその哲學的著述、殊に自由意志論を書きつゞつた。七年ののちニュー・ジャージィ大學（今のプリンストン）の總長に招かれ、就任後間もなく天然痘にかゝり、一七五八年のはじめに死去した。

エドワーヅは非常に早熟な天才であつたが、そのはじめから彼の示したものはこまやかで神祕的な感受の力と、明徹で飽くところのない論理の力であつた。かうして彼は自然の天候や植物や又人性の美しさを純粹に感じることができるとともに、それらを超えて峻嚴にそれらを支配する神の存在に對して明瞭な直

覺をもつのであつた。彼が幼時から持つたこの神祕的な體驗、神に溶け入る忘我の悦びは、彼の手記の中に美しく潤ひある筆を以て書きとめられてゐるが、しかもかういふ彼は、その生來の緻密な論理力をもつて、神の秩序の世界を嚴格明瞭に把握しないではやまない。そしてその結果はカルヴィニズムの極點ともいふべき絶對な不寬容の態度にまで上りつめて行つた。吾々はこゝに感性と知性のたぐひ少い結合を見るのであるが、それは當時のアメリカの精神界の最大な代表として、のちに説くフランクリンの世俗的な智慧（ヤンキイズム）の代表者たる位置と對立する。しかもニュー・イングランド神政社會の根底であるカルヴィニズムは、その特殊な社會形態とともに日に日に崩壞のきざしをみせてゐたのであつて、エドワーヅはこのやうな過ぎゆく時代を支持すべくあらはれた最後の偉大な鬪士といへるのである。彼の多くの説教のうち、殊に有名なものは "Sinners in the Hands of an Angry God." 1741 であり、そこには神によつて地獄の火の上にかざされた人間の姿が、「蜘蛛か或ひはいまはしい虫」のやうだと説れてゐる。「神は人間を火の中に投げ入れるほか、何の値もなきものと見る」のである。又エドワーヅの哲學的著述 *On the Freedom of Will* (1754) は彼の論理的天才を最も明瞭に示したもので、その論旨は今日の哲學では賛成することが困難であるとしても、その論理の嚴正さとそれを裏付ける信仰のはげしさはなほ讀者を一度とらへた以上容易に離さないだけの力を具へてゐる。彼は一七二七年、十七歳のセアラ・ピアポイント

(Sarah Pierrepoint)――ニウー・ヘーヴン (New Haven) の牧師の娘――と結婚したが、それより既に四年前この美しく清らかな少女について記した彼の文は、屢々ダンテのベアトリーチェの記述に比せられるもので、彼の純な詩情を示すものとして、文學史の上では殊に注意されてよいものであらう。

五、ウィリアムズとシューウォル

清教徒時代の概觀を終るにあたり、なほ觸れねばならぬ二つの名がある。ロウジア・ウィリアムズとサミュエル・シューウォルである。

ウィリアムズ (Roger Williams, ? 1603–1683) はケンブリッヂ大學に學び、牧師となつて「大移動」(Great Migration) の移民に加はり渡米したのであるが、セイレムで傳道を開始するや、その說く信條がピューリタンたちの忌むところとなり、同地を追放された。彼はロード・アイランド (Rhode Island) に走り、そこに彼の理想に基く、全く新たな植民地を建設した。そのやうな經過に於て、彼はハートフォード植民地の創設者組合派（コングレゲーショナリスト）のトマス・フッカー (Thomas Hooker, 1586–1647) に類似するが、彼の思想は一層急進的であつた。即ち彼は宗派の別を超え信仰の自由を徹底的に信ずるものであり、その植民地には凡ゆる

信者不信者を快く迎へ入れ、そこで行はれる政治も、全く無階級主義の自由平等の精神に立つものであつた。そして注意すべきは、彼のこのやうな思想が、彼の神祕家（ミスティック）としての特性からきたものであることで、彼は直接靈の中に神の光を感ずることによつて、人間の尊重・個人の平等の信念に達したのである。ニューイングランドに渡來した信仰者には、不寛容な支配的政治的なピューリタンに對して、信仰の自由を自他ともに完全に分有しようと願ふ一團がある。これは純粹な分離派（セパラティスト）であつて、ピルグリム・ファーザーズの流れを受けるものと云へる。ウィリアムズもこれに屬する顯著な一人である。彼はボストンの牧師ジョン・コトン (John Cotton, 1585–1652) と、マサチューセッツの異分子迫害の問題につき論爭したが、彼の駁論 *The Bloudy Tenent of Persecution* (1644) は、極めて痛烈なものであり、彼の純粹な自由思想を充分に說きつくしてゐる。

つぎにシューウォル (Samuel Sewall, 1652–1730) は、市民として注意すべき存在であり、マザー一家全盛のボストンにあつて、その商才と結婚により當時第一の富者となり、裁判官として圓滑な技能を示し、顯要な存在となつた。彼の書きのこした日記は、一六七三年から一七二九年に及び、その間、日々の家庭或は世間の出來事を仔細に飲食のことに至るまで書きとめてゐる。それは當時のボストンの現實生活の記錄として興味深いものであり、コトン・マザーら清教徒たちの、深刻陰鬱な內省の日記とは極端な對照をな

す。その對照は又彼ら人間の對照であり、シューウォルはハーヴァード大學に學びながら知性的な奥行もなく、當時の神政社會に順應して巧みに世渡りした常識家に過ぎないが、しかも富める一個の市民として、彼は自然に清教徒たちに屈服しない立場に押しあげられてゐるのであり、コトン・マザーと公けの席で激論した記録さへもその日記に發見する。卽ち彼は、聖職者と商人、ピューリタンとヤンキーの交代期に生きた顯著な人物であり、アメリカ社會の變遷を標示すると見られるのである。彼がセイレムの妖術迫害に裁判官として關與したことに責任を感じ教會の會衆の前に立つて懺悔したこと、また早くも奴隷反對のトラクトを書いたことは、彼の誠實な人格を示すものといへよう。

(B) 革命時代（一七五〇——一八〇〇）

一、國民的文學への發足——ヤンキイズム

ニュー・イングランドにおけるピューリタニズムは、同地方に商業的な活動がはじまり、富める商人階級が出現するやうになつて、次第にその勢力を失ふやうになつた。壓制的な神政政治なるものは、不利な風土とインディアンの脅威の中にあつて、荒野を耕さねばならない農民を、結束し力づける戰鬪の原理としてむしろその環境にとつては必要適切なものであつたとも考へられる。けれども新らしいブルヂョアー階級の物質的活動の成功は、そのやうな禁欲的な勤勉・滅私・團結といふ如き態度を不必要なものとし、ピューリタニズムの統制力を弱めたのであるが、個人がその努力によつて自己の生活を擴げ、又豐富にし得るといふ體驗は、彼らの從來の暗鬱な生活に光明をもたらし、不自然・不合理な宗教信念の抑壓を解消して行つた。そしてその宗教は精神よりも形式において守られ、信仰そのものよりも實行（經濟的且つ倫理的）に重點を置くやうになつた。彼ら新らしい經濟人の活動は商業貿易にあるとともに、多數の船をチ

ャーターして海運の利益を占め、又捕鯨船その他の漁船を建造して、遠い外洋にまで海の幸をあさつた。彼らのその活動はその敏活で拔け目なく、又意志強くその目的を達しないでは止まぬ競爭心において、イギリス人やフランス人を壓倒するものがあり、一例として造船の技術の如きもそれら先輩國民を凌ぎ、彼らの從來つくり得なかつた快速船をもつくり出すにいたつた。このやうな特性はすなはちヤンキイズムと呼ばれるものであり、彼らの將來の獨特な活動と、國民としての發展が、このやうな特性の基礎の上に成就されてくるのである。

このやうなアメリカ的なブルヂョア階級の成立は、彼らをして次第に本國の干渉をいとはしめるやうになり、自治制をしいてその經濟的活動を自由に行ふことを要求せしめるやうになつた。イギリスはその重商主義の政策によつて植民地からできるだけ多くの利益を搾取しようとしたのであり、航海法の如きはアメリカの輸出品が必ずイギリスの港を經由すべきことをさへ要求した。そしてアメリカにおけるイギリス植民地が擴大するにしたがひ、その防備・經營の費用を捻出するためについに植民地から租稅を徵收することとなつたが、イギリス議會に議員をおくる權利を與へられることなく、たゞ納稅の義務を負擔することはイギリス人の傳統精神としても忍び得ぬことであつた。かくてその商賣の取引を阻害されざる限り、本國との平和な關係を維持しようとしてゐた商人階級さへも、本國との離叛を決心するやうになつたが、

南部地方の農作地の紳士的地主階級、西方の奥地に獨力で開墾を營んでゐる開拓民はその精神や境遇の上から當然その運動に合流した。一七六五年、印紙條令が實施され、民衆の反撃を招いて翌年撤廢されたが、一七七〇年にはボストン駐屯軍による「ボストン虐殺（マサカー）」の不祥事が生じ、一七七三年には茶稅に對する不滿からいはゆる「ボストン茶黨（ティー・パーティ）」の暴動となり、一七七五年夏にはボストン西方のレクシントン (Lexington) 及びコンコード (Concord) に獨立戰爭の最初の銃聲がひゞくこととなつた。かくて一七七六年七月四日には『獨立宣言』が發表され、その後戰局の困難と複雜な外交關係に苦しみながら、しかもつひに戰爭の目的を果して、一七八三年には獨立承認の假條約が締結された。そして引きつゞいて一七八七年には合衆國憲法の制定となり、一七八九年ジョージ・ワシントン (George Washington, 1732–99) が第一代大統領として就任した。このアメリカの獨立は更に一八一二年のイギリスとの第二の戰爭を經過してまつたく強固なものとなり、アメリカの國民全部が一體となつたとの自覺が確立し、中央政府の權力が、さまざまな人種や階級を抱擁する南部・北部の各地方に浸透するやうになる。それと同時にこれまで狹い區分の中にあつたアメリカの各地の文學は次第に全體的な自覺と活動をもつやうになり、このアメリカの國家的形成の重要時にあたつて國民生活の全面に觸れ、文學として能ふ限りの貢獻をしようとするやうになつた。かくして吾々は次第に一つの國民文學としてのアメリカ文學の存在を明瞭に意識することとなるの

である。

二、フランクリン

この時代において政治の方面でも文學の方面でも國民の第一の代表者と見るべきものはベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706–1790) である。彼はボストンの蠟燭製造人の家に生れ、十七人の兄弟の末弟であつたが、十歳で學校敎育をうち切り、店の仕事を手傳はされた。しかし彼は仕事よりも書物を好み、手に入る限りの本を讀んだ。それはバニヤンやデフォーの物語類であり、更にアディソンの評論を文章練習のためにも熟讀し、又ロック (John Locke, 1632–1704) の *Human Understanding* を讀んだ。フランクリンが舊弊な神中心のニュー・イングランドに生れながら、當時のイギリスすなはち「理性時代」のイギリスの思想に親しみ、その生活態度に共鳴したことは重要な點であつて、彼の進歩的な合理的な性格を決定し、從つて又彼のアメリカへの大きな貢獻を決定したものに外ならない。かゝる少年フランクリンは一七二三年家を逃れてフィラデルフィアに走り、つゞいてロンドンに行つて二年間を暮し、イギリスの生活と思想の影響を一層深く身に受け、一七二六年フィラデルフィアに歸つて新聞 (*Pennsylvania Ga-*

zette) を經營し、その事業に成功するとともに、公共の精神と精力と才智を縱横に發揮することによつて、年ごとにアメリカ社會の重要な人物となつて行つた。すなはち彼は一七四二年フィラデルフィアにアメリカ最初の圖書館を開き、又四三年にはアメリカ哲學協會を組織し、又ペンシルヴァニア大學の創立にも參與した。一方彼の科學的才能はフランクリン式ストーヴの發明となり、又有名な稻妻の實驗となつた。一七五三年ポストマスター・ヂェネラルに任ぜられ、遞信事務に大きな改良を加へ、一七五七年から五年間ペンシルヴァニア代表者としてロンドンに滯在、イギリスと植民地との險悪な關係を解決することに努力し、開戰後一七七六年には大使としてフランスに渡り、巧みにフランスの援助を獲得して獨立戰爭を成功に導いた。滯佛九年ののち一七八五年から三年間はペンシルヴァニア州の知事をつとめ、一七八七年には憲法制定會議に參加し、一七九〇年八十四の長壽をもつて、彼がその自敍傳で「始から終までもう一度同じ生涯をくり返してみたいものだ」といつてゐるその類ひなく變化に富んだしかも幸福な生涯ををはつたのである。

彼の書きものとしては、この *Autobiography*, (1791&1817) と *Poor Richard's Almanac*, (1732–57) があげられる。自敍傳は一七五七年彼の第二のイギリス訪問の年まで未完成に終つてゐるが、注目すべきはその文體が平易・簡明で如何にも著者の人格をあらはしてゐることであり、しかもその中に出てくる人物は、

たくまずして生き生きした性格描寫をあたへられてゐる。吾々はこのやうな文章の中に新らしくアメリカに形成されつゝあつた理性的な實踐的な精神のよきあらはれを見るのである。『リチャードの暦』は彼の處世訓をのせることによつて非常な評判を得たのであるが、その機智と寸鐵殺人的な語句の巧妙さは注目するに足る。例へば"A ploughman on his legs is higher than an gentleman on his knees."「立つてゐる耕作者は跪いてゐる紳士よりも高い」"It is hard for an empty bag to stand upright."「からの袋はまつすぐに立てぬ」といふ如きであり、"Time is money."「時は金なり」なども入つてゐる。たゞ吾々はこのやうな格言からも彼の人生論・幸福論があまりに物質的であることを思はざるを得ない。しかもそのやうに非精神的であつてもそれに比例して彼は當時のアメリカにもつとも有用な又自然な產物であつたのであり、文學者としても、文學は勿論彼として一つの餘技にすぎぬものでありながら、その文學史上に占める位置は決して微小なものでなく、その文體と思想に於て、新しいヤンキイズムの時代に應ずる獨特な價値をもつて出てきたものと考へ得られるのである。

三、ウールマン――クレーヴカール

世俗的實踐的道德的なフランクリンに對して反對の極點に立つものはジョン・ウールマン（John Woolman, 1720–72）である。彼は又同じ精神的でも論理と知性の極限に走らうとするエドワーヅにも對蹠する。何故なら彼はたゞ一人の謙遜な神秘主義者であり、神からの直接な愛の中に浸り、そこに自己の內心の完全な幸福を發見するとともに、他人や社會の問題についてもその立場から純粹に透徹した行動をとらうとするものであるからである。彼はニュー・ジャージイ州のノーサムプトン（Northampton）に生れ、農場や商店につとめ又裁縫師となり、二十一歲のときクエーカー教徒の集まりで自分の信仰を告白し、その後は大部分を植民地の巡歷布教に暮し、インディアンにまで傳道した。彼は商店員であつたときから良心的に奴隷賣買の習慣に反對したが、奴隷廢止は彼の一生の熱願であつた。一七七二年イギリスに旅行し同年十月ヨークで客死した。彼の書きもの主なものは *Journal* (1775) であるが、それはほとんど無學な彼がその純眞な精神の動くまゝにその感想と生涯を飾ることなく謙遜に記錄したもので、そこに獨特の氣品と深い印象力を具へてゐる。ホイッチアーはこの『日記』を「內的生活の古典」と呼んだが、チャールズ・ラムは「ウールマンの文章を暗誦し、初期クェーカー教徒を愛せよ」とまでいつてゐる。彼はその『日記』の中で「眞の宗教は內的生活に存する。その生活の中に心は造物主たる神を愛し敬し、眞の正義と善をあらゆる人間のみならず禽獸にまでも行ふことを知るにいたる。」としるしてゐる。ウールマンは無私謙遜

であつたが、明らかな惡を見るときは純眞に從つて强烈にそれを排撃することを躊躇しなかつた。かうして彼は奴隷問題のみならず、戰爭や私慾の原因としての土地私有や動物虐待或ひはインディアンにラム酒を賣込む非人道性を警告した。かういふ彼の一見クェーカー敎徒の寂靜主義と反する積極的な社會的主張の中に、吾々は後世のアメリカの急進的な改革精神の一つの原型ともいふべきものを發見するのである。

クレーヴカール (Hector St. John Crèvecoeur, 1735-1813) はアメリカ人ではない。彼はフランスのノルマンディからイギリスを經て、一七六〇年頃アメリカに渡來した貴族出の青年で、大陸内地を廣く旅行したのちニュー・ヨーク州 (Orange Country) に農園を求め、フロンティア人としての生活をはじめた。そして十六七年間も平和な勤勞と滿足の日々を樂しんだのであつたが、獨立戰爭が起るや彼は獨立派と王黨派の双方から嫌疑をかけられ、ニュー・ヨークでイギリス人の牢獄に監禁され、一七八一年やうやく母國フランスへ逃れついた。しかし戰後アメリカに歸つて見ると、妻は死に、家族は四散し、家は燒かれてゐた。その後しばらくニュー・ヨークでフランス領事をつとめたのち、フランスへ歸つて一八一三年死去した。彼の書きものは *Letters from an American Farmer* (1782) である。彼はそこにアメリカのフロンティア生活の意味をきはめて明瞭に、從來の誰もなし得なかつたところにまで把握してゐる。彼はヨーロッパの文化の流れが必然な勢で西進すること、そしてヨーロッパ人の血の混合がアメリカの風土・自然の中で一つ

の新らしい種族——「アメリカ人」となつてゆくことを說いてゐる。その豐富で廣漠たる原野は移住民の勤勉に應じて富と獨立をあたへる力をもつものであり、筆者はそこに無限の希望をもつてゐる。それは重農主義的精神の典型的なものといつてもよい。このやうにアメリカの土を愛し又農業生活を愛した彼はその生活の日々の小さな出來事にまで深い興味をはらひ、この數通の手紙の中で蛇・蜂・雀などを語つた部分は、その生き生きした描寫やフランス人らしいユーモアによつて今なほ吾々の興味をとらへるものがある。更にこの手紙全體に流れてゐる精神についてみても、それは結局フランス人のものであり、自然の愛や人道主義的な傾向においてフランス人の血と敎養をまぎれなくしめしてゐる。そこに吾々はフランスの哲學がアメリカのフロンティアの自由な空氣の中に生き生きと自然な展開を見せてゐる興味ある現象を見るのである。

四、獨立戰爭の文學

アメリカの獨立戰爭においても、あらゆる革命の場合の如く、實戰に先立つて行はれたものはプロパガンダの戰爭であつた。ビラやパンフレットや講話や或ひは今少し秩序立つた評論の類が、印刷機からたゝ

き出されて全土の町村にふりまかれた。それらは勿論一時的な價値しかもたぬものであるが、しかもその中からなほ後世に記憶さるべき人物や言論が出てきたことも否めない。

先づ獨立運動のもつとも過激な指導者としてサミュエル・アダムズ (Samuel Adams, 1722–1803) がある。彼は天成の煽動者であり、新聞・雜誌・講演・手紙等あらゆる手段を疲れを知らぬ精力をもつて驅使した。そしてアメリカ人の反英感情を知事に對する反抗からその知事を任命せる王に對する反逆にまで高めようとし、しかもつひにそれに成功した。そして群衆心理を利用して植民地の一部で行はれた不正をとらへて、全土の民衆を激昂させる手腕を發揮した。たゞ彼は實踐家であると共に不屈な理想主義者だつた。そしてさういふ彼にもつとも影響を與へたものはジョン・ロックの中產階級的な政治哲學であり、その自然權の說であつた。

このやうな獨立運動の氣勢をその昂揚の極點にまで煽り上げたものはトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737–1809) である。彼はクェーカー宗のイギリス人で讀書勉强の外はさしたる教育もなく、商賣に失敗したのち、ロンドンでフランクリンに近づき、その紹介狀を携へて一七七四年フィラデルフィアに渡つて來た。そして翌年 *Pennsylvania Magazine* の主筆となつたが、その翌年一七七六年一月民心激昂の白熱した危機をとらへて *Common Sense* と題するパンフレットを發行、三ケ月のうちに十二萬部を賣上げ、イ

ギリス・フランスにまで多數に輸出された。ペインはそこでイギリス・アメリカ間の複雜せる問題を簡單に處理して、アメリカの獨立を憲法問題などを離れ、何人にも理解のできる民衆の經濟的必要の立場から主張した。彼のこのやうな宣傳の效果は六ケ月後獨立の宣言となつたことにもあらはれてゐる。彼は又戰爭中には *The American Crisis* (1776–1783) と題するパンフレットを連續發行したが、その明晰な思想と力强い論法は簡潔流暢な筆致と相まつてよく民心を鼓舞する役割を果した。戰後一七八七年彼はヨーロッパに歸り、フランス革命に加はり、フランスに歸化し、しかも投獄され危うく斷頭臺に送られようとまでしたが、最後はアメリカに歸つて死んだ。彼の主著 *Rights of Man* (1791–92) はバーク (Edmond B. Burk) の *Reflections on the French Revolution* (1790) を反駁して、徹底した革命的思想を展開したものである。なほ彼は *Agrarian Justice* (1796) では大地主の土地獨占の弊害を論じ、*The Age of Reason* (1793) では理神論的な信仰を宣べたが、それが僧侶や聖書の權威をも否定するやうに思はれたため、殊にニュー・イングランドでは正統派信仰の人々から無神論者として蛇蝎の如く嫌はれるやうになり、アメリカの獨立に貢獻した偉大な功績者として皮肉な運命をうけねばならぬこととなつた。

『獨立宣言』(Declaration of Independence) の起草者は第三代の大統領となつたトマス・ジェファソン (Thomas Jefferson, 1743–1826) である。彼はヴァージニア州 (Albemarle County) の家彫もまばらなフロ

ンティア」に生れ、幼時から開拓地の影響を身にうけてゐた。彼は農夫を社會の基盤であらゆる富の生產者だとし、商人や財政家を社會の寄生物とみなすやうになり、又ロック及びフランスのルソー・モンテスキュー等の思想に接して人道主義的な自由主義・民主主義の精神をますます深めるやうになつた。そして個人の安全幸福こそはあらゆる政治的社會的行動の最高の目的たるべきものであることを主張した。『獨立宣言』の精神はロックの政治論からくるものであるが、殊にその最初の部分「あらゆる人間は平等につくられてゐる。彼らはそのつくり主によつて一定不可讓の權利を與へられてゐる。中にも生命・自由・そして幸福追求の權利。……」といふやうな言葉にその理想が力強く要約されてゐる。卽ちこのやうな自然法（自然權）の前提によつて「人民は如何なる政體といへども上の目的を破壞するものとなる時はこれを改廢し新たなる政治を創設する權利（卽ち革命權）を有する」のである。

ジェファソンはアメリカの最も偉大な民主主義者としてその人格と行動の後世にまで影響した範圍は測り知ることもできぬ。いはゆるジェファソニアン・デモクラシィは、保守的な憲法制定によつて一應の勝利を得た反動派（フェデラリスト）を、一八〇〇年までに征服し、西部フロンティアに延びて、ジャクソンやリンカーンの興起を促す。文學に關していへば、ロマンティシストはジェファソンらの自由主義者に完全に共鳴する。なぜならジェファソニアン・デモクラシィとアメリカン・ロマンティシズムとは共に、

人間の本質的平等の信念に立つものであり、卽ち共にアメリカ革命の正統な子供に外ならぬのである。

ジェファソンと階級的にも思想的にも絕えず對立したものはアレグザンダー・ハミルトン（Alexander Hamilton, 1757–1804）である。彼は西インド諸島に移住したスコットランド人を父とし、フランスの新教徒（Huguenot）を母とする一文なしの貧民であつたが、その才能によつて次第に政治的社會的に進出し、フェデラリスト黨なる有力な政治機關をつくり、ワシントンの下で大藏大臣にまでなつた。彼の政治思想は單一な中央政府の樹立と强化にあり、個人や各州の權利はむしろ無視されてよきものとする。次にその中央政府の權力は特定の有產階級すなはち大地主や富める商人或ひは專門職業家の手に握らるべきものとする。すなはち彼は一つの貴族主義者だが、貴族たる根本の資格は先づ富だとするのである。かくて當然彼は少數の上流階級を擁護し、一般民衆を恐怖し排撃する。そしてジェファソンの如き民主的な重農主義はとうてい信頼することはできない。ハミルトンのこのやうな思想はアダム・スミスやホッブスと關聯するところがあると考へられるが、それよりも多く彼自身の性格と當時のアメリカの實狀によつて決定されたものといへよう。そして彼のその產業的或ひは商業的アメリカを絕對勢力たらしめようとする理想はのち長くアメリカの政治及び社會の形成を規定する强力な原理として働くこととなつた。彼はワシントン大統領就任後のいはゆる危機（一七八三—八九）にあたつて、同志ジョン・ジェイ（John Jay）及びマデ

イソン (Madison) とともに、筆をふるつて、新憲法案擁護のために烈しい論爭をたゝかはしたが、後彼らの論文八十五篇が集められて *The Federalist* なる書物となつた。それは今日なほアメリカの政治哲學研究の上に古典的な價値をもつものである。

なほハミルトンと同列の保守的政治家にジョン・アダムズ (John Adams, 1735–1826) がある。彼は國家の政治は、門地と才能をもつ「生れながらの貴族階級」によつて行はるべしと主張する單純な貴族主義者であつた。そして一七九六年第二代の大統領となつて、反動的な二三の法律を作つた後、民心を失つて引退したが、彼の主要なる著作は、憲法擁護論 *A Defence of Constitution* と民主主義排擊の *Discourses on Davila* であり、いづれも彼の立場と主張を明瞭に現はしたものである。

憲法制定は、ハミルトンら中央集權派と各州分權の民主主義者ないし重農派の鬪爭であり、結局前者の勝利となつて新憲法の成立を見た。そして彼らの「富・門地・才能」による政治が推進されたが、重農派の反抗は次第に勢力を得、一八〇〇年に至つてジェファソン的民主主義はフェデラリスト黨を完全に政界から締め出した。しかし、ジェファソン＝ハミルトンの對立は、アメリカの政治及び思想を貫く二潮流として、今日にまで重大な影響を繼續してゐるのである。

五、詩の方面

獨立革命時代に、狹い意味（或は純粹な意味）で文學と呼ぶことのできる作品は殆んどなかつたと言つてよい。たゞそれが、例へば詩の形を具へてゐる故に擧げるなら、フランシス・ホプキンソン (Francis Hopkinson, 1737–91) が英軍の武勇を諷刺した *The Battle of Kegs* (1778) や、ジョン・トラムブル (John Trumbull, 1750–1831) の敍事詩 *M'Fingal* (1775)——王黨員が植民地で受けた樣々な苦難を諧謔的に述べた戲作——を擧げることができよう。それらに對して、王黨側の忠實な鬪士に牧師ジョナサン・オデル (Jonathan Odell, 1737–1818) があり、*The Congratulation, Feu de Joie, The American Times* 等の詩で、革命側の指導者（例へばペイン）や群集を辛辣な諷刺にかけてゐる。

前出のトラムブルもその一人であるが、"Connecticut Wits" 或は "Hartford Wits" と呼ぶ一團のインテリ詩人がある。彼らはハートフォード、或はイェール大學の在るニュー・ヘーヴンを中心とし、ピューリタン的信仰と教養に據つて、自由奔放な民主主義の流れに拮抗しようとした。その首領はイェール大學の總長ティモシイ・ドワイト (Timothy Dwight, 1752–1817) で、ジョナサン・エドワーヅの孫に當るが、

America (1772), *The Triumph of Infidelity* (1780–1810), *The Conquest of Canaan* (1785) 等の詩の外、トラクト、旅行記等、多數の作品を書きのこしたが、その反動的な思想と重苦しい非詩人的な表現は、結局「負くべき戰」を戰ふ外なかつた。唯、彼の詩に新しく國家的結成をしたアメリカの前途に誇と希望を感ずる愛國心が流露してゐることは時代的な特色であつて、同じ *Wits* 群のジョエル・バーロー (Joel Barlow, 1754–1812) の敍事詩 *The Vision of Columbus* (1785)、またそれを擴大した *Columbiad* (1807) にも同樣な精神が現れてゐる。またこのバーローに *The Hasty Pudding* (1796) と題するニュー・イングランドの實生活を歌つたユーモラスな詩があり、それが眞實にアメリカ的な最初の詩だと考へられることも、時代の自然な反映だと言へよう。また同じ群のデイヴィド・ハムフリス (David Humphreys) も *The Glory of America* (1783) なる愛國詩を書いてゐる。

けれども、かういふ文學鬪爭の混亂の中にあつて、最も記憶さるべき詩人はフィリップ・フレノー (Philip Freneau, 1752–1832) であらう。彼はプリンストンに學び、革命戰爭中は愛國派として、痛烈な諷刺攻擊の詩文を以て、ペインやサミュエル・アダムズの活動を助け、獨立達成後は、フランスの急進的革命思想に共鳴しつゝ、ジェファソンらの民主主義派を助けて、フェデラリスト陣營と果敢な筆戰をたゝかはした。彼のそれらの大量の詩文は、勿論一時的の價しかもたぬものであるが、珍重すべきは、その緊張多忙な生活の中から數篇の珠玉の如き詩を書きのこしたことで、彼が天性ロマンティクな情感をもつ詩人であることを示すものである。それは *The Wild Honey Suckle*, *The Indian Burying Ground*, *On a Honey Bee* 等で、吾々はそこにアメリカの風土自然がアメリカ詩の素材として始めて充分に用ひられてゐる姿を發見する。彼が獨立戰爭中のアメリカ軍の勇戰に取材した初期の短詩 *The Battle of Eutaw Springs* の如きは、ウォルター・スコットの賞揚するところで、彼は自己の作品 *Marmion* の中でその一部の辭句を模倣してゐるほどである。

なほ、フレノーに聯關して、彼がプリンストン卒業當時、*The Rising Glory of America* (1771) なる詩（オード）を合作した級友ヒュー・ヘンリイ・ブラッケンリヂ (Hugh Henry Brackenridge, 1748–1816) は、熱心な民主主義者であり、フロンティア人を對象とした諷刺的な小說 *Modern Civalry* (1792, '3, '7) を書いて、文學の題材に西部深林地方（バックウッヅ）を取入れる先驅をなした。

六、中部植民地の文學

アメリカ獨立の達成・國民的意識の確立期を終るに當り、これまで觸れる機會のなかつた中部植民地の

文學を瞥見したい。この地方にはニュー・イングランドに見るやうな明確强烈な思想と人物を見ることはできない。しかしその自由で溫和な空氣の中に、それだけ明るい文化の氣分が漂うてゐることを見のがせない。初期に出た詩人として目ぼしいものにトマス・ゴドフリィ (Thomas Godfrey, 1736–1763) がある。その作品はチョーサアやスペンサアの模倣であるが、それだけ彼がニュー・イングランドの嚴めしい詩人達に比べてイギリス詩を廣く讀みよく味つてゐることを示してゐる。そしてその時代を考へると、作品自體も遙かに水準をぬいたものである。彼の記憶さるべき業績は、無韻詩の悲劇 *The Prince of Parthia* によつてアメリカ最初の戲曲を提供したことである。(然しこれもシェイクスピアの明らかな模倣である。) 少し時代が降つて、これもアメリカ最初のロマンス作家と見るべきチャールズ・ブロックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown, 1771–1810) がフィラデルフィアから出る。彼はイギリスのウィリアム・ゴドウイン及びその夫人メリイ・ウォルストンクラフトの急進的な社會思想に共鳴するところが深く、その著作にもその影響を顯著に現してゐる。彼が最初に世に問うたロマンスは *Wieland, or The Transformation* (1798) であるが、それは惡漢が腹話術を利用して惡を働くといふプロットで、陰慘の氣のこもつたもので彼として一つの傑作であると言へる。このやうな病的な怪奇さは、彼の多病な體質にもよるものだが、また當時のロマンスなるものの一般的な性格でもあつた。彼はその系統の力作を數篇書きのこして早く世を

去つたが、こゝに注意すべき點は、彼が詩におけるバーローや又フレノーの如く、アメリカ的な題材を作品に用ひたことで、彼の最後の作でゴドウィンの *Caleb Williams* の脚色に倣つた *Arthur Mervyn* (1799–1800) には一七九三年のフィラデルフィアの黄色熱流行の慘狀が取扱はれ、*Edgar Huntly* (1799) には、ペンシルヴァニアの未開山地の寂寥やインディアンの脅威が鮮明に描き出され、そこにフロンティアが初めて小說の中に活用されてゐる。かういふ彼は「アメリカ小說の父」とさへ言はれ、フィラデルフィアの文化的空氣の影響をうけてこの病弱な奇才にアメリカのロマンティシズムの芽生えが現はれてゐることを見る。また彼及びフレノー、その他上に見てきた當時のアメリカ文學の動向よりして、それがイギリスの模範に追從する植民地氣質を捨てきれないまゝに、アメリカ生粹の題材をとりあげ、何ほどかアメリカ的にならんとする努力を示し始めてゐることは、當時の國家的情勢とも關聯して、注意すべき現象と言はねばならぬ。

第二章　獨立より南北戰爭まで（一八〇〇―一八六〇）

――ロマンティシズムの時代

(A) ロマンティシズムの興起――新國民文學（一八〇〇――一八三〇）

一、アメリカン・ロマンティシズム

吾々がこの章で考へようとする部分は、一八一二―一四年の再度の英米戰爭から南北戰爭（一八六一―六五）に至る約半世紀の間である。アメリカは國家の組織としても國民の自覺としても、この間に全く活潑な成長期に入る。憲法制定（一七八七）當時のいはゆる「十三州」にヴァーモント・ケンタッキイ・テネシイの三州の加へられたのは前世紀の末であり、今世紀に入ると共に、一八〇一年にはルイジアナが、一八〇二年にはオハイオが併合され、更に一八一六年以後六年間にはインディアナ州ら六州が加つた。領土の擴大は國民の誇を高め、植民地的な「州」の偏見を弱めて國家的意識を強くした。この變動或は成長の先づ著しく現はれてきたのは經濟の面で、東部のニュー・イングランドには、多數の移民の輸入と共に都市中心の生產工業が興り、舊式の農耕漁撈を壓倒して一種の產業革命が行はれ、南部では棉花栽培の隆盛が從來の煙草や藍の靜態の農業を打破して、奴隷の容赦なき使用によつて棉花地帶の無限の進展を夢むや

うになつた。また西部內陸にあつては、獨立平等の氣風が益々强化され、盛んな移民の流入は土地思惑の熱を煽り、小さな金儲けを蔑視し、西方の地平線を望みながら、各自が獨力を以て自由にその理想國を建設せんとするヴィジョンをもつやうになつた。すべては物質的な獲利慾の强い目覺めであり、しかもアメリカの土地の廣さと豐かさは、さういふ野心に答へるに充分であつた。

けれども、吾々にとつて重要なのは、さういふ經濟的な慾望の展開を裏づける彼らの思想の變動である。それは要約すると、舊來の保守的な、用心深い、勤勞一圖の心構へから、冒險と思惑をふくんだ積極的な精神に移つたことであり、陰鬱な人生觀から樂天的な人生觀への移行だと見られる。なぜなら人間は絕對の神に支配されるものでなく、自己の努力により自己の運命を切り開いて行くことができるものだと信ずることができるやうになつたからである。それは環境の變化と自己の魂の目覺めが應じ合つた必然な展開である。

このやうな、おのづからなアメリカ精神の覺醒と成長を、アメリカのロマンティシズムと呼ぶ。その特徵として考へられるものは、先づ上にいつた人間性の自覺――個人の魂の尊重、人間の性の善なること、人間の進步完成する可能性を信ずることであらう。次ぎには、人間を包み人間を導き人間を靈感せしめるものとしての「自然」の認識である。人は常に自然に從ひ自然に學ばなければならぬ。自然は神の意志の

具現であつて、人は自然を通じて始めて神と完全に交通することができる。かくて人は社會的な地位や形式を離れ、敬虔な一個の野人として自然に接すべきであり、ロマンティシズムに於ては、當然かゝる「野人」「平民」が尊敬され、また眞理を把握する道具として、理性や知識よりも、想像と感情殊に直覺が重視される。

上のやうな特性をもつロマンティシズムとして、それが文藝となつて現はれる時は、その特色も當然にそれとして特殊の樣相を示すものでなければならぬ。アメリカの浪漫文學は、その傳統或は社會生活の關係から、イギリスやドイツのそれのやうな明瞭な色調をもつことはできぬが、それでも、神祕・怪奇性、異國趣味、歷史的懷古など、驚異をよろこぶ浪漫的性質は濃厚に、それぞれの作家、又それぞれの地方によつて現はされてゐる。そしてそのやうな文學が、これまで例へばイギリス詩人ポープから學んだやうな、固定した形式的な表現から脫却して、一層自由で奔放な表現を以て、その新鮮な感情や想像をのべようとしたことも當然といはなければならぬ。

かくして吾々は、アメリカ國民とその思想の新しい飛躍成長を示すロマンティシズムの時期に、これまでにない活潑自由でまた豐富な文學の開花を見る。そして次ぎに考へるやうに、このロマンティシズムの時期が、大體一八三〇年を境界として、その以前はロマンティシズムの興起（或は新國民文學發生）の時

代、その以後はロマンティシズムの隆盛（或はニュー・イングランド文學）の時代として區劃され得るのである。

なほ注意すべきことは、これらの文學は大體東部一帶にその範圍を限られるのであるが、ロマンティシズムの精神は又西部の政治的社會的思想の主潮に外ならぬのであり、そこには文字に書かれずとも、ロマンティシズムそのものが生活されてゐたといへるのである。即ちそれはジェファソンの平等主義民主主義を基調として、彼の鄕土ヴァージニア地方から西部へ、西部から東部の反產業主義分子（たとへばトランセンデンタリスト達）へと連絡する。このロマンティシズムの大圈の一つの產物として、リンカーン (Abraham Lincoln, 1809–1865) が考へられよう。彼はその精神行動においてロマンティシズムの生活者であつたばかりでなく、有名な Gettysburg の式辭や書簡の類にまで現はれてゐる素朴で明快で、しかもしばしば朗らかなユーモアをふくんだ獨得な文體は、西部的文學の一つの典型ともいへるのである。吾々はかうしてロマンティシズム文學の興隆の波頭を遠い西部にまで認めることができるのである。

このやうにロマンティシズムの巨大な動きをみる時、吾々は結局それがアメリカ革命の新しい地盤の上に發生したものであることを感ずる。ロマンティシズムの根本信念とする人間の平等・人間の進步の信念は、獨立宣言の標語に外ならない。そしてその精神は革命によつてもたらされた社會的變革によつてはじめて十分な發動をみることとなつた。吾々はそこにアメリカ革命が、政治的軍事的以外にもつ精神的革新の意義の大きなことを認める。アメリカン・ロマンティシズムはアメリカ革命によつて生れたといひ得るのである。

二、中部諸州の文學

ワシントン・アーヴィング (Washington Irving, 1783–1859) はニュー・ヨークの市民である。彼の父はスコットランド人の舟乘りでイギリス人の娘と結婚し、ニュー・ヨークの町で商賣人になつた。當時のニュー・ヨークは、以前のオランダ人の生活がまだ獨立戰爭の戰災のいえぬ町に漂つてゐて、文學や學問などよりも商業の氣風が壓倒的であつた。アーヴィングはこのやうな町で法律を學びながら、健康が不充分であるため國內をあちこち旅行したのち、ヨーロッパにまで漫遊した。二年間彼地の文物に接したのち一八〇六年本國に歸ると、彼は兄ウィリアムや親戚ポールディング (J. K. Paulding, 1778–1860) とともに月二回發行の雜誌サルマガンディ (*Salmagundi.* 寄せ鍋－雜錄の意) を發行し、市內の日々の生活や出來事を輕快に描寫し諷刺した隨筆類を發表した。ついで彼は Diedrich Knickerbocker の筆名のもとに *History of*

New York (1809) を書き上げた。これはオランダ人統治の最後までの同市の建設史を滑稽に取扱つたもので、しかもオランダ先發隊がインディアンの土地を詐取する場面の如き深刻な皮肉が込められてゐる。その活潑な文體にはアーヴィング獨特のユーモアが新鮮に溢れて居り、それは彼の作品の最もすぐれたものであるとともに、暗くいぢけたピューリタン時代の文學から本當に純粹な文學の世界に出ようとした當時のアメリカを示す最初の作品と言ふことができる。

一八一五年彼はイギリスに渡つて兄の經營する商會の支配をしたが、翌年商會が失敗するとともにはじめて生計のために執筆することとなり、その最初の結果が *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* (1819-20) となつてあらはれた。それはイギリスとアメリカの生活のさまざまな面のスケッチであり、時としては回想記或は短篇の物語となつてゐる。その筆致は「ニュー・ヨーク史」とちがつた溫雅な十八世紀風のエッセイであつて、*Westminster Abbey*, *The Country Church* などはアディソンその他の名隨筆家に迫らうとしてゐる。また *Rip Van Winkle* と *The Legend of Sleepy Hollow* は、アメリカ中部の奥地にオランダ時代から傳へられた傳説にもとづいた作で、アメリカ土着の物語がはじめて文學に取上げられたものといふことが出來、その主人公のほゝ笑ましい印象と共にいつまでも親しまれる作品である。アーヴィングの文學者としての位置はこのスケッチ・ブックの成功によつて確定した。彼はそれにつゞいて同系の著作

イギリスの地主を描いた *Bracebridge Hall* (1822) を發表した。又彼は滯歐中スペインの公使館に勤務したが、その間の收獲として *The Life of Columbus* (1827), *The Conquest of Granada* (1829), *The Alhambra* (1832) がある。殊にアルハンブラ物語は古い史實に取材しながら、ロマンティックな想像を思ふまゝに働かせた彼獨特の傑作である。

かくて一八三二年アメリカに歸ると、彼はそこに十七年間の不在の間に本國の世相が如何に變化したか、殊に西部フロンティアに向つて流れ込んで行く無限の人の波に驚いたのであるが、當時毛皮商として巨大な事業を經營してゐた Astor Fur Company の宣傳の仕事に關係するやうになり、ロッキイ山地まで旅行し、殺風景な眞實を潤色した氣味はあるが、*A Tour of the Prairies* (1835), *Astoria* (1836), *The Rocky Mountains* (1837) など、生き〳〵した記錄を書きのこした。その後彼はハドソン河畔の古雅なオランダ人の家を買ひ入れ、"Sunnyside" と名づけて隱棲の地とし、一八四二年から四六年までスペイン公使となつた以外は、その餘生を全くこゝで送つた。しかしその間にも彼の筆は休むことなく、*The Life of Goldsmith* (1849), *The Life of Washington* (1855-9) など興趣ふかき傳記を書いた。

アーヴィングは思想家でもなく、學者でもない。たゞ外部の印象を生き生きと受け取る人である。しかも彼は當時のアメリカの社會におこつてゐた思想の爭ひや勞資の問題等には無關心であり、現在よりもむ

しろ過去の生活について鋭い機智に富んだ解說を試みようとした。そして現在の周圍に對しては、誰人とも笑顏をもつて親しく陽氣に交らうとした。しかしこのやうな物足らぬ反面に、彼の人間及び藝術の獨自の價値もあると考へられる。

ジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper, 1789–1851）は、ニュー・ジャージィ州のバーリントン（Burlington）に生れたが、父はイギリス名門出のクェーカーで判事をつとめ、ニュー・ヨーク州のフロンティアに當時比肩するものなき大農園クーパースタウンを建設した。そこに養はれたクーパーは、さういふ父の保守的な方針によつて、ヅワイトを總長とする反民主主義のイェール大學に入れられたが、中途で放校、商船の乘組員として訓練をうけ海軍軍人となり三ケ年を暮したが、ニュー・ヨークの王黨派の舊家の娘と結婚し、彼女の希望に從つて故鄕の莊園に歸つた。そして十年の地主生活の後、創作の筆をとつたが、その出世作は獨立戰爭における一間諜の、國のために「蔭の人間」として一生を犧牲にするヒロイックな物語 *The Spy* (1821) である。この作の評判は未曾有であり、批評家も大衆もこゝに始めてアメリカ文學としての獨立した傑作を受けとつたことを感じた。

その後クーパーは健筆を走らし、一生の作品は三十九冊にのぼるが、その中で彼を代表するものは *Leatherstocking Tales* 五篇である。それを作品の取扱つた年代の順にならべると、*The Deerslayer* (1841), *The Last of the Mohicans* (1826), *The Pathfinder* (1840), *The Pioneers* (1823), *The Prairie* (1827) となる。「革靴下（レザー・ストッキング）」とは主人公の開拓者 Natty Bumppo のあだ名であり、彼は鹿狩りの名手であり又敏活な戰士であるが、五篇の小說は彼の一生、戀愛と戰爭と冒險の生涯を八十歲の晩年に至るまで描き出した連作で、クーパーはこれを「五幕の劇」と呼んでゐる。それはまことに劇的な、浪漫味あふるゝ雄渾な傑作であり、アメリカ小說の最初の高峯と言はねばならぬ。そこには主人公の忠實な伴侶としてインディアン Chingachgook 及びその子 Uncas（卽ちモヒカン族の最後の酋長）が出てくる。そしてこのロマンスを一層多彩なものにする。その背景にはクーパーが少年時代を過したフロンティアの深林地帶が生動してゐる。しかし唯、このやうな主人公やインディアンは勿論理想化されたものであり、フロンティアの生活も、その現實を離れてスリリングな興味を刺戟するものとして扱はれてゐる。そして開拓者の勤勞から釀しだされる民主的な精神、そこに見らるべきフロンティアの大きな意義について、クーパーは一顧しようとしない。それはどこまでも地主たる彼の階級から生れる文學であつた。

彼の文學は、以上の如く『間牒（ザ・スパイ）』のやうな「歷史文學」、フロンティアの「森の文學」、そして「海の文學」に類別される。後者の典型としては *The Pilot* (1823) が擧げられる。從來英語文學に海の文學は多いが、自己の直接經驗にもとづいて潮の香の溢れるやうな文學を提供したのは、クーパーに始まると言つて

もよいであらう。自身その歴史小説によつて「アメリカのスコット」と呼ばれる彼は、スコットの『海賊』(*The Pirate*, 1821) の如きは陸上生活者の作品だと豪語したといふ。

「彼は一八二六年家族を連れてヨーロッパに渡り一八三三年まで滯在した。そして社會革命の沸騰、人權の烈しい論議に強く印象されたが、アメリカに歸來して、彼は東部の資本家工場主にも同情をもてず、西部の開拓民、また彼らの懐抱するジェファソン式ジャクソン式な民主思想には反感を感ずるばかりで、(當時の大統領 Andrew Jackson, 在任 1829-37) 彼は自己が時勢から全く孤立した位置にあることを發見した。かうして彼は自己の周圍に向つて敵意ある批評を投げかけ、絶えざる論爭となり訴訟沙汰とまでなり、この大作家は奇妙な葛藤と憤懣の中に不幸な晩年を閉ぢることとなつた。彼が歸國後アメリカ殊にその營利的な人間を諷刺した物語に *The Monikins* があり、多數派專制の民主主義を痛烈に攻撃した論文に *Home as Found* がある。

ウィリアム・カレン・ブライアント (William Cullen Bryant, 1794-1878) は、マサチューセッツ州西部の靜かな田舍町 (Cummington) に生れた。彼の父方も母方もその祖先はメイフラワー號の渡來者であつて、彼の血にはピューリタンの傳統が濃く傳はつてゐるばかりでなく、彼の生地のあたりにはまだニュー・イングランドの氣風が山野の間にのこつてゐて、勤勉で純朴な生活が行はれてゐた。彼は貧しい家庭の事情で

學校 (Williams College) も一年で退學し、法律を勉強したが、一八一一年まだ十八歳にもならぬ弱年で『死の觀想』(*Thanatopsis*) を書いた。それは純粹で高貴な思想を盛つた、そして清純で嚴肅な表現に作者のピューリタン的な風格をはつきりと現はした短詩で、一八一七年發表されるや批評家の驚異となつた。彼はついで翌年、同樣な特色をもつた *To a Waterfowl* なる佳作を發表した。彼がその幼時から田園で親んだ自然 (しかもアメリカの自然) をその詩にとり入れてゐることも後續者に影響を與へた重要な特色で *To the Fringed Gentian* (1832), *Robert of Lincoln* (1855) などはそれに屬する。自然は又彼にとつて神の世界で、屢々獨り山林に入り、瞑想し、自己を淸めるのであつた。(例へば *A Forest Hymn*, 1825) たゞこのやうな彼が、そのあまりに強いピューリタン的性質の故に、どの詩にあつても何程かの敎訓を入れないでは濟まされないのは、小さからぬ缺點であつて、彼の詩は初期の上記二つの短詩の示してゐる以上、目に立つ進展はなさなかつたと言へよう。

實際に於て、一八二五年ニュー・ヨークに出た後は、彼の生涯は眞摯で有能なジャーナリストとして送られた。即ち彼は同市 *The Evening Post* の主筆となつて、半世紀以上もその椅子にあり、一つの尊敬すべき存在として當時の混亂多事な社會に重要な働きをした。彼の思想の地盤は自由主義であり、勞働者農民の味方となつて、商人保護の關稅政策に反對し、また奴隷廢止問題ではリンカーンの側に走つた。一

八六五年この殉國者の遺骸をニュー・ヨークの街頭で見送つて、彼は「おゝ、打つこと遲く許すこと速かなるもの、優しく惠み深く正しきもの！」(Oh, slow to smite and swift to spare, / Gentle and merciful and just!) なる言葉を以て始まる沈痛な短詩を書いた。

ニュー・ヨーク市に於けるブライアントの存在は、オランダ以來の町の氣分から言へば、異種的なものと言つてよい。なぜなら、さういふ彼は嚴肅な理想的なニュー・イングランド精神の移入であり、それによつて貴重な貢獻をしたものであつたからである。同樣な移入は他の幾人かの顯著な人物に見られるが、その一人はホレース・グリーリィ (Horace Greeley, 1811-72) である。彼はニュー・ハムプシアの生れで、二十歲の時ニュー・ヨークに來り、一八四一年 *New York Tribune* を創刊、自己の貧の體驗から勞働者農民の味方となつて、徹底した民主政策を主張し、その勢力はひろく西部地方にまでひろがつた。彼は當時國內の各所で實行に移されてゐたフーリエ (Charles Fourier, 1772-1837) の新しき村運動の熱心な支持者であり、奴隸廢止の急先鋒であつた。ブルック・ファームの首領ジョージ・リプレイ (George Ripley) や、トランセンデンタリストのマーガレット・フラー女史も、一時は彼の編輯局で活動した。卽ち彼らもニュー・イングランド人でこの地方に貢獻した人物の中に入るわけである。

三、南部地方の文學

南部はその氣候風土と社會形態の故に、純粹な文學を生むことが甚だ遲かつた。その溫暖で日光の豐かな世界は、元來北國人たるイギリス人にふさはぬものであり、ニュー・イングランドの峻嚴な環境が彼らを困苦せしめつゝその知性感情をます〳〵純粹に引き締めたに反して、南部では彼らの精神は一種の放漫狀態に入つたとも考へられる。彼らが意を用ひるものは、遊樂と社交であり、實務としては農園の經營や法律政治であり、文學を思ふことがあるとすれば、娛樂或は裝飾の意味しかなかつた。その上にこの封建社會にあつては、一般民衆に敎育の普及せぬこと、都市が少く從つて文化的活動や印刷出版の事業が興らぬこと、さういふ原因が結び合つて、文學の發生をます〳〵遲らせた。

南部は、ボルティモア (Baltimore) を代表とするヴァージニア、チャールストン (Charleston) を代表とするサウス・カロライナ、ニュー・オーリアンズ (New Orleans) を代表とする西南地方に三區分されよう。ヴァージニアに出た初めの注目される作家は、ジョン・ペンヅルトン・ケネディ (John Pendleton Kennedy. 1795-1870) である。彼は *Swallow Barn, a Story of Rural Life in Virginia* (1832) で農園貴族の生

活を描き、*Horse-Shoe Robinson, a Tale of the Tory Ascendency* (1835) で獨立戰爭における南部の一フロンティア人（實在の人物）の間諜としての超人的な働きを、興味深いロマンスに書きあげた。彼にはなほ同地方の植民時代を取扱つた *Rob of the Bowl* (1838) なるロマンスがあるが、かういふ彼にとつても文學は結局餘技であり、三度國會議員となり海軍大臣の椅子にまでつくやうになつた彼の經歷は、南部人の文學に對する態度を示すものと言へよう。なほヴァージニアの當時の文學で摘記すべきものに、ウィリアム・アレグザンダー・カラザズ (William Alexander Caruthers, ? 1800—? 1850) の *The Kentuckian in New York* (1834), *The Cavaliers of Virginia* (1834), *The Knights of the Horse-Shoe* (1834)、またジョン・エステン・クック (John Esten Cooke, 1830–86) の *The Virginia Comedians* (1854) がある。

つぎにサウス・カロライナに移ると、ウィリアム・ギルモア・シムズ (William Gilmore Simms, 1806–70) がある。彼は南部で文學を專業とした最初の人間といふことができる。幼時に母と死別し、父は倒産し、グラマー・スクールの教育しか受けなかつた彼は、封建的な紳士階級からの蔑視と、南部本來の文學に對する無理解と、二重の障害に向つて一生鬪爭せねばならなかつた。そのために彼は北部を度々訪れてブライアントその他の文人とひろく交りを求め、彼の作品は南部よりも北部に於て歡迎され出版されるやうな結果となつた。彼は詩を試みて成功せず、一八三三年最初のロマンス *Martin Faber* を發表、以後驚くべ

き健筆をふるつて小說だけでも三十餘冊の作品を書きあげた。中でも *The Yemassee* (1835) はサウス・カロライナ植民時代のインディアンの蜂起を扱つたものであり、*The Partisan* (1835) は獨立戰爭に於ける南部人の活動を主題した七部の連作の第一部をなす歷史ロマンスである。總じて彼のロマンスは、醜惡深刻な現實をも隱さず描き出すところに特色があり、例へば同じインディアンを扱つても、その眞實味の魅力はクーパーにまさり、近代的であるとも言へる。彼は冷淡な南部に對しても文學的な働きかけは休止せず、文壇の中心となつて後進の奬勵につとめた。

このやうなシムズの門下から出たものに、ポール・ハミルトン・ヘイン (Paul Hamilton Hayne, 1830–1886)、ヘンリイ・ティムロド (Henry Timrod, 1829–1867) の二詩人がある。彼らは二人とも、シムズと異り、チャールストンの上流の家に生れ、チャールストン・カレッヂに學び、協同して雜誌 *Russell's Magazine* (1857–1860) を編輯した。そして同樣に抒情詩の製作に熱中したが、その獨創性と南部の風物を生き〳〵と詩の音樂の中に捕へ得た天才に於て、ティムロドはヘインにまさつてゐると考へられる。（例へば *Spring*, *The Cotton Boll* など。）唯彼は病弱であり、南北戰爭中南部のために宣傳の詩人として活動したことは彼の肉體を破壞し、三十八歲で死去した。ヘインはそれよりも生きのびたが、戰時の活動は同樣に彼を一生病者たらしめ、チャールストンの砲擊は彼の邸宅と壯大な書庫を燒き盡した。シムズもまたこの

敗戰によつて、全く窮迫の生活に落ちこんだ。かくして彼らの努力により、やうやく芽生えかゝつた南部の文學は、不幸な戰爭のために無慘に枯れ凋まねばならぬこととなつた。

最後に、更に南方に移つて南西部地方を見ると、そこには一層ひどい文學の荒野がある。たゞ、オーガスタス・ボールドウィン・ロングストリート (Augustus Baldwin Longstreet, 1790-1870) の *Georgia Scenes* (1835) は同地方獨特のフロンティアを、記實的な現實味と粗野奔放なユーモアを以て扱つた佳作であり、アメリカのフロンティア文學の歷史に記錄さるべきものであらう。しかしそれさへ、この、後に三大學の總長を歷任した紳士ロングストリートは、自分の故鄕についてこのやうな露骨な作を書いたことを、若げのあやまちの如く耻ぢてゐたといふ。

四、ポー

エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) は南部の文學としても別格に取扱はれねばならぬ。否、彼はアメリカの文學としても別格であり、一つの異種——たゞし極めてすぐれた、天才としての異種と見るべきであらう。彼の父はアイルランド系の旅役者であり、母はイギリス系の女優であり、しかも彼女は大西洋上の船の中で女優の母から生れ、幼少から舞臺に立ちその外の世界を知らなかつた。ポーはこの兩親の興行の旅先でボストンで生れたが、三歲にも滿たぬうちに母は死に、ついで父も死に、幸ひにリッチモンドのスコットランド系のタバコの豪商ジョン・アランに引きとられ、一八一五年にはイギリスに伴はれ、五年間初等の敎育を受けた。そしてリッチモンドに歸つて後、一八二六年にはヴァージニア大學に入ることができたが、賭博して借金を造り、養父の怒に觸れて退學、その店の手傳をさせられたが、逃げだしてボストンに行き、兵隊となつて飯を喰つてゐたが、探し出されて West Point (陸軍士官學校) に入れられた。しかし、そこでも嚴しい規則の守れよう筈はなく放校處分となり(一八三一)、養父とも義絕してしまつた。彼はボストン逃亡時代に出版屋を說き落して *Tamerlane and Other Poems* (1827) を出し、また一八二九年には *Al Aaraaf* を、一八三一年には第三詩集たる *Poems* を出してゐたが、其後は筆一本の力で自活の計を立てねばならなかつた。そしてその活動は當然ジャーナリスト (雜誌記者) の道に向ふこととなつた。そして前出のケネディの推薦によつて、リッチモンドの *Southern Literary Messenger* の編輯者となり(一八三五)、續いてフィラデルフィアに移つて數種の雜誌に働き、一八四四年後はニューヨークに定住、幾度か自分で雜誌發行を企て、暫くは *Broadway Journal* を主宰した。しかしそのやうな努力にも拘らず、その間の彼は貧困と不健康と飲酒の中に暮したので、十四歲の花嫁として一八三六年結

婚した從妹ヴァージニアが、そのやうな貧に耐えながら冷たいベッドの上で死んだ(一八四七)後は、絶望と憂鬱のどん底に陷り、幾つかの戀愛事件をひき起し、一八四九年南部に旅行中、ボルティモアで急死した。

彼の作品は、詩と短篇小說と評論に分れる。そしてどれもが、ジャーナリストとしての彼の實生活の影響を受けて居り、讀者の前受けや文壇の時事に關係してゐる所が深いのであるが、しかもそれにも拘らず、彼の天才はそこに不朽なものを創りだしてゐる。彼にはその血統や境遇や體質から、絶えず病的な劣等感（インフィリオリティ・コムプレックス）といふべきものが附きまとひ、その感傷性と意志の弱さ、道德的思想の缺乏といふ如き點で、殊にニュー・イングランドの文人たちとは極端な對比を示してゐる。しかしその、アメリカとしては全く異種的な本質の故に、彼の藝術は却つて貴重な特性と價値をこの國の文學に提供してゐると言ふことができる。

彼の藝術の理想は教訓や實用を離れた純粹の美であり、詩にあつてはそれが特に音樂の效果を以て現はされる(詩は美の音律的創造である)。そしてその音韻と形式の苦心は時として餘りに人工的な缺點となるまで精巧を極める。また彼はこの美を憂鬱と結びつけてそこに美のトーンの深刻な強調を求めようとする。〔從つて美人の死が好個の主題となる。――論文 *The Philosophy of Composition* (1846) の所說。〕そして美

の感動の緊張した持續を求める所から、よき詩は必ず短き詩であるべく、「長き詩」とは言葉そのものの矛盾だとする。〔論文 *The Poetic Principle* (1850) の主張。〕彼が小說に於て短篇の形式を愛用したのもこの趣旨に通ずる所があり、ある單一な獨特な效果を達すべく、それを中心として愼重な構想と技巧を用ふべきものとした。その短篇には、美的な又怪奇な想像をめぐらしたものと、一方には理智の分析力を精密に活用したものとがある。前の種類には *The Fall of the House of Usher*, *The Masque of the Red Death* の如きがあり、後の種類には *The Gold Bug*, *The Descent into the Maelstrom*, 或は探偵小說風な *The Murders in the Rue Morgue* 等がある。そして詩に於ては *The Raven* を最も有名とし、*To Helen*, *The City in the Sea*, *The Haunted Palace*, *Annabel Lee* などみな美と憂鬱と妙音の佳品である。評論では前に觸れた二論文は彼の藝術觀を示す最も重要なもので、そこにも吾々の見るものは彼の異常な美の信念と理知の分析力だが、その外彼がジャーナリストとして書き飛ばしたロングフェローやホーソーンたちの書評の類にも注意すべき文學論が含まれてゐる。

ポーはこのやうな異種の文人として、その認識は本國よりもヨーロッパに始まり、ボードレールは散文を、マラルメは詩を譯し、フランス象徵派に大きな作用を及ぼすこととなつたが、イギリスではスティーヴンソンの海賊小說や殊にコナン・ドイルのシャーロック・ホームズ物に明瞭な影響を見せてゐる。

(B) ロマンティシズムの隆盛（一八三〇――一八六〇）

一、ニュー・イングランドの文學

新しき時代と共に芽生えかゝつたアメリカの文學の中心は、フィラデルフィアからニュー・ヨークへ、そこからボストンへと移つて行つたやうに見える。そしてこのニュー・イングランドの文學は一八三〇年頃から七〇年頃までの期間に目覺ましい開花をした。

ニュー・イングランドをそれまで支配した精神は、人間性の惡・墮落を信ずるカルヴィニズムの信條と、しかもそれに並んで、人間を逐利的な利己的な動物なりと認定するフェデラリズムの思想であつたのだが、この時代に至つて、その二面の中間に新しい自由の自覺が生れてきた。卽ちそれは神の絕對力に對して人間の個人的な權威を主張し、物質・金錢の魅力に對して精神・靈の尊貴を強調するものである。この反抗精神としての新宗敎がユニテリアニズム（Unitarianism）であり、一八一五年頃に結成され、ニュー・イングランドの地位と敎養ある階級に迅速にひろがつて行つた。またこれと結び合つたものに、ドイツ哲學

から、イギリスのコールリヂやカーライルを通じて輸入されたトランセンデンタリズムの思想があり、それは人間或は自然に於ける神の遍在と、それに對する直覺的な認識を強調する。かうしてニュー・イングランドには、從來の因襲思想の束縛を破棄する自由主義の精神が顯著になつていつたのだが、それがフランス風の人道主義の思想を含んでゐることも重要な點であり、それは社會改造の實踐的な試み、たとへばトランセンデンタリストのブルック・ファーム（Brook Farm）の新しき村の如きものとして現はれた。

かういふ反抗・解放の運動が、政治的でなくむしろ知性的なものとして現はれたことも、このニュー・イングランドの特色で、それは知識と敎養を求める動きとなり、舊來の宗敎によつて陰氣に硬ばつた精神と感覺に潤ひと光が射して來、卽ちルネサンスと呼び得る文藝の開花がこの一廓に見られるやうになつた。そしてその知性人たちは、書物により、それよりも多く直接かの地に旅行することにより、ヨーロッパの文化を豐かに受け入れようとする態度をとつた。それは一種の「文明開化」的な熱情であり、また當時のニュー・イングランドの大きな特色といはねばならぬ。

かうしてニュー・イングランド人は、長い間精神的な壓迫、そこから來る歪曲にみづから惱みながらも、然しさういふ過程のうちに、彼らの知性は眞摯に活潑に働きつゞけてゐたといふことが證される。卽ちさういふ知性が、今展開の機運に接して自由思想として開花したものがこのルネサンスであり、それは單純

な反作用でなく、その根柢は却つて古い傳統自體のうちにあるのである。たゞ、かういふルネサンスである故に、このニュー・イングランドの文學は、その根本の性格は道徳的であり、感覺の細やかさとか本能の享樂とか、そのやうな柔軟な、いはゆる藝術的な性格は持たない。そして清純で温和で、しかも嚴しい意志に貫かれてゐる作家の人格と生涯が、その書かれたものの何れにも滲透してゐる。そこにニュー・イングランド文學の價値の制限があると共に、獨自さもあると言へるのである。

二、コンコードの人たち

ニュー・イングランドのトランセンデンタリズム (Transcendentalism) は一八三六年、エマソンらが結成したトランセンデンタル・クラブといふ團體から、その名が生れたものである。特にドイツの超絶哲學を意味するものではないが、カントやシェリングの學説に直接或ひは間接に通ずるところがあり、それに東洋の思想が加はつて、全て感覺の世界を超越した内的な直觀を尊重する一つの理想主義を意味することとなつた。この運動に屬する主な人には、アモス・ブロンソン・オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799–1888) があり、徹底した精神主義の兒童教育を實踐し、又彼らの機關雜誌 *The Dial* (1840–44) 主筆となつ

た女性マーガレット・フラー (Margaret Fuller, 1810–50) はヨーロッパ文學に通じ、文藝批評家として又社會運動家として目覺しい活動を示した。又シオドア・パーカー (Theodore Parker, 1810–60) は博學なそして進歩的な神學者であり、かつてチアニング (William Ellery Channing, 1780–1842) がなしたユニテリアニズム革新の事業を一段と徹底させ、又奴隷廢止のために死に至るまで奮鬪した。しかしこの精神運動の一番大きな中心となつたものは、エマソンだといはねばならぬ。

ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803–1882) は、ボストンの第二教會（ユニテリアン）の牧師を父とし、一八二一年ハーヴァードを卒業、同校の神學校に學んだ後、一八二九年第二教會の牧師となつたが、一八三二年聖餐式を眞實神聖た氣持をもつて執行することが出來ぬことを告白して、教會を辭し、貧と病と妻の死と幾重の苦難を受け、同年十二月ヨーロッパ旅行に出發、各地を遍歷、殊にカーライルに會つて終生の友情を結んだ。翌年十月歸米、父祖の地コンコードに住居を定め、第二の結婚をした。その後の彼の生活は極めて單調で、一八四七年と一八七二年にヨーロッパに旅行した外は、終生コンコードを離れず、講演と著述に專心した。

一八三六年發表の『自然論』(*Nature*) は、彼の最初の論文といふべきものであり、しかも彼の生涯の思想を既に鮮明に要約してゐる。卽ち彼は自然を神の象徵と見、吾々が常に物質を超えて精神的なものを把

握すべき心構へを持つべきことを説く。更に一八三七年ハーヴァードの Phi Beta Kappa Society において行つた "The American Scholar" と題する講演は「他國の學問に仕へてきた吾々の長い年期奉公」をやめ獨立した創造的活動に入るべき時期に入つたことを、アメリカの學徒に警告したもので、オリヴァー・ウェンデル・ホームズの如きはこれを「吾らの知性の獨立宣言」とまで呼んだ。

エマソンのその後の思想は二巻の論文集 (*Essays*. 1841. 1844) に收められてゐるが、殊に第一巻中の *Self-Reliance*, *Compensation*, *The Over-Soul* 等の論文は、その根本思想を示したものである。「大靈」とは萬物にあまねく流動してゐる生命であり、しかもこの汎神論的宇宙の中に、善と惡、損と益は互に微妙な均衡と關係を保つてゐる。それが「報償」の理である。そして吾らはこのやうな世界に生きながら「あらゆる幻の霧を超えて」大靈を直覺し、その大靈を受けてゐる自己を信頼して、強く生くべきである。かくて「自恃」の信念が生れる。彼はこのやうな思想を、時として文脈を無視したやうな警句風のきびきびした文體で讀者に印銘した。

なほ彼の著述の主なものには、プラトー以下六人の偉人を論評した講演 *Representative Men* (1850) イギリスの文化と國民の特色を緻密公平に觀察した好著 *English Traits* (1856) があり、晩年の論文としては、*The Conduct of Life* (1860), *Society and Solitude* (1870) がある。

エマソンは若い頃から詩人にならうとする希望をもつてゐたが、詩人としては成功したとはいへない。詩においても彼は靈感に動かされる自發性を尊重するのだが、實際に於ては、彼の詩は「心」よりも「頭」で書かれた分子が多く、殊に音樂の美の乏しいことは明らかな缺點である。しかしなほ數篇のよき詩をのこし、殊に短詩には彼の深い知慧が印象的に表現されたものがある。その自然の觀察にもとづいた作には *The Humble-Bee*, *The Snow Storm* があり、宇宙觀や人生觀を示してゐるものには、*Uriel*, *The Problem*, 又東洋思想の影響をうけた *Brahma* 等がある。又獨立戰爭の最初の銃聲を歌つた *The Concord Hymn* は最も有名なものである。

エマソンは詩人でもなく、哲學者でもなく、一個の思想的な指導者ともいふべきであらう。しかも彼の思想の一番大きな缺點は、彼が人生の現實に直面せず、その惡や不幸の存在に心を傷めやうとしなかつたことである。そしてその人生の矛盾が大靈の力によつて調和されることをあまりに信じ過ぎたことである。しかしこのやうな樂天性は長いカルヴィニズムの悲觀性への反作用として、當然に期待さるべきものであり、彼がその誠實な自發的な魂の動くまゝに、この樂天思想を主張し、しかもその思想を自己の生涯において、勇氣をもつて貫いたことは、彼を當時の最も重要な尊敬すべき存在としたことは否定出來ない。彼は常にこの誠實と勇氣をもつて進歩的であり、アメリカの思想文學の獨立を促進し、その友人と後輩に大

きな影響を與へた。

エマソンの影響を一番直接に受けたものはヘンリイ・デイヴィド・ソーロー (Henry David Thoreau, 1817–1862) である。彼はコンコードの貧しい農家に生れたが、一八三三年ハーヴァードに入學することが出來、一八三七年卒業した。その後しばらく小學教師をした後は、家業の鉛筆製造や土地測定の仕事などで生計を立てたが、彼は元來禁慾主義者で、菜食禁酒そして一生獨身であつた。ハーヴァード卒業の年、はじめてエマソンに近づき、一八四一年から四三年までエマソンの家に住み込み、家事の手傳ひなどをした。

そして、かの雜誌 *The Dial* が發行されるや、自己の詩文や古典の飜譯を發表した。彼は古典の愛讀者であつたが、然し一番親しんだものは「自然」であり、コンコード周圍の動植物について驚くべき精密な觀察を積み、彼らと一つの生活に融け入つてゐた。一八四五年三月、彼はコンコードの南方約一哩半のウオルデン湖の岸に自ら小屋をつくり、同年七月から四七年九月まで耕作と讀書の簡易極まる生活を送つた。これは人間がどこまで經濟的に束縛のない自由の生活を送ることが出來るかの實驗であり、「生の本質的な事實にのみ接し」ようとする試みであつた。彼はその生活を單純で澄み切つた文體をもつて *Walden, or Life in the Woods* (1854) に記錄した。

この書の外には彼の生前の出版としては、*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) があるばかりで、それは一八三九年の末兄のジョンと連れ立つた舟旅の紀行である。死後の出版には數冊の紀行と、スケッチ、エッセイの類がある。

彼の思想の一番鋭い特色は、その個人主義であり、しかも逃避的でなく、その信念を實踐する勇氣をもつてゐた。たとへば、ウォルデン生活の間のことであるが、政府がメキシコ戰爭に贊成し、奴隷制度を維持する如き態度を取つてゐることに憤慨し、人頭稅を納めることを拒絕し、そのため投獄されまでした。その經驗から書いたものが *Civil Disobedience* (1849) である。そしてそこに主張されてゐる、惡しき政治に對する個人の權威の尊重は、半世紀の後インドのマハトマ・ガンディにまで深い感銘を與へた。

ソーローはその生前において、友人の間の外殆んど知られなかつたが、死後に至つて彼の存在は次第に顯著となり、その思想と人格の影響が次第に強く擴がることとなつた。彼は當時のアメリカに侮蔑反抗しつゝも、最も眞實なアメリカ人であり、自分の弟子を早く死なせたエマソンは、「ソーロー以上に眞正なアメリカ人は存在しなかつた」と哀悼してゐる。

三、ホーソーン

ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804-1864）はマサチューセッツ州の古き港町セイレム（Salem）で生れたが、その生涯はコンコードと密接に關係する。彼の家系は嚴格なピューリタンで、父は船長であつたが四歲の時死んだ。彼は一八二一年メイン州ブルンスウィック（Brunswick）のボードン・カレッヂ（Bowdoin College）に入學、一八二五年卒業後は、故鄕に歸り、十年餘も讀書と創作に沒頭したが、その間に自費出版した小說 *Fanshawe* (1828) は何の反響もなく、一八三七年になつて出した短篇集 *Twice-Told Tales* 第一卷も大學の舊友ロングフェローの聲援を受けただけであつた。けれども一八三八年には終生のよき妻 Sophia Peabody と婚約し、三九年にはボストン稅關の官吏となり、四一年免職となると、ブルック・ファームの新らしき村に參加した。そして村の現實に失望して脫退し、翌四二年貧困のうちにソファイアと結婚式を擧げコンコードの「古き牧師館」（エマソンが『自然論』を書いた家）に新らしい家庭をもつこととなつた。かうして彼は當然エマソンやソーローと交るやうになつたが、一八四六年短篇集 *Mosses from an Old Manse* を出し、同年故鄕セイレムの稅關に就職したが、四九年又退職させられた。かうして貧乏のどん底に沈みながら、書き上げたのが *The Scarlet Letter* で、一八五〇年出版、意外の評判を得、その後引きつゞき熱心に創作の仕事に沒頭するやうになつた。一八五二年彼は再びコンコードに歸つたが、やはり大學の舊友ピヤース（F. Pierce）の大統領當選によつて、リヴァプールの領事に

なることが出來、一八五三年から五七年まで勤務、その後しばらくイタリアとイギリスに滯在して、一八六〇年コンコードに歸つた。その後の彼は次第に老衰し、南北戰爭の精神的打擊も深く、一八六四年五月ピヤースに附き添はれて保養の旅に出、ニュー・ハンプシャのプリマスの宿屋で永眠した。

ホーソーンの文學は『緋文字』をもつて代表されるが、これは不幸な結婚をした女主人公とカルヴィン派の學德高き青年牧師との戀愛、それに對する淸敎徒社會の冷酷な刑罰とそしてその罪に苦しみ遂に群衆の前に告白して自己を沒落さする段階にまで立ち至りながら、牧師も女主人公もそれによつて却つて一つの淨化・勝利を得るに至る徑路を描く。この作品はアメリカ思想の根底をなすピューリタニズムに根ざした最も深い作品であり、自らピューリタンの血を享けるこの寡默忠實な作家によつて罪と罰の主題が極めて獨自な色調の中に解答されてゐるのを見る。

彼の長篇にはこれに引きつゞき、セイレムの町にある古き淸敎徒の住家にまつはる呪ひを扱つた *The House of Seven Gables* (1851)、ブルック・ファームの經驗にもとづき、その村の數名の男女の愛と葛藤を描いた *The Blithedale Romance* (1852)、次にローマを舞臺として、異常なイタリアの一青年とその戀人との奇怪な戀愛と殺人事件を描き、それに二人のアメリカの男女を配した神祕なロマンス *The Marble Faun* (1859) があり、この四冊をもつて彼の長篇は終るが、そのいづれも讀みごたへのある眞摯な作品であり、

大家としての彼の力量を充分に示したものである。

ホーソーンは又短篇作家として一家をなして居り、その中には歴史的な背景を使つたものと、道德的な教訓を含めたものと、又神祕的な心理解剖によつた作品等が類別される。その短篇集には前出の外に、*Twice-Told Tales, 2nd Series*(1842), *The Snow Image and Other Tales* (1851)、また少年の讀物として *Biographical Stories* (1842), *A Wonder Book* (1852), *Tanglewood Tales* (1853) がある。

「ホーソーンは極めて內氣な瞑想家であり、人間の靈の交渉や變化について深い注意を注ぎ、それを忠實な藝術家として出來る限り整頓した形式に表現することを努力した。そして當時の激しい思想の動きや社會的政治的な運動については、いつも微溫的な態度をとつた。彼の藝術はあまりに形式的な美を求めようとし、又しばしば道德的な教訓を含めようとするために、人物にも生きた人間としての性格的な深みがなく、又淺薄な寓喩を用ひようとするやうな缺點はあるが、しかし當時のアメリカにおいてこれほどまで文學としての眞實性と藝術的色調をもつた作品を書き得た彼は一つの古典的作家としていつまでも尊敬されるであらう。」

四、ボストンの人たち

ボストンには近郊ケンブリッヂにハーヴァード大學（Harvard. 一六三六創立）があるが、このアメリカ最古の大學を中心に、學問藝術の營みが目覺しく活潑になつて來たのが當時のボストンの樣相である。傑れた學者がヨーロッパから呼び寄せられるとともに、若い有能な學徒がかの地に學び、これまでアメリカにない純粹な學問とそして學問の研究態度を輸入した。そして新しいボストンの文學は、かういふ學問と教養を背景にして、古い精神的な貴族的な街の空氣（いはゆる Genteel Tradition）の中に鮮やかに浮き出てきたのである。

かういふ仲間（時として Boston Brahmins と呼ばれる）の中で、最初に考へらるべきものはヘンリィ・ワズワス・ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow, 1807–1882）である。たゞ彼の生れは北の方メイン州の港町ポートランド（Portland）で、父は地位高き辯護士であつたが、その家系は父方も母方もニュー・イングランドの建設時代の古い家族にまで溯ることが出來る。十三歳の時、ポートランドの『ギャゼット』紙に最初の詩を發表したが、ボードン大學を一八二五年卒業、十九歳でヨーロッパに三ケ年留學

し、歸國して母校の教授となつたが、一八三四年ハーヴァードの近代語及び近代文學擔當として招かれ、そのため一八三五年再びヨーロッパに留學し、ハイデルベルヒの大學に學び、殊にドイツのロマンティシズムの文學に親しんだ。一八三六年の十二月からハーヴァードに講座を開き、一八五四年まで教授の職をつゞけ、その後は詩作に專心した。

彼の最初の著作は第一回の外遊の印象記 *Outre-Mer : a Pilgrimage beyond the Sea* (1835) であり、最初の詩集は *Voices of the Night* (1839) である。その中に *Hymn to the Night*, *A Psalm of Life* など今日なほ人々に愛誦せられる作品が含まれてゐる。彼は最初の外遊の旅先で夫人を失ひ(一八三五)、第二の夫人もストーヴの火の過失で燒死した(一八六二)。この重なる不幸は彼の悲しみと孤獨の思を深くしたが、しかし彼はさういふ中から靜かに前途の光明を望み、文學と學問の仕事を雄々しくつゞけて行つた。さういふ心境は最後の詩集 *Ultima Thule* (1880) と遺稿 *In the Harbor* に美しくあらはれてゐるが、彼がダンテの神曲の傑れた翻譯を完成(一八六五—六七)したのも、かういふ苦惱を征服しようとする努力の結果であつた。

彼の詩の特長としては明るく滑かな言葉と音樂をもち、何人にも味はれ易いとともに、その内容も單純で何人も感じ得るやうな喜びや悲しみや或ひは勇氣を歌ひ、健全な道德的な敎へや通俗な民間說話の味を

もつてゐる。かうして彼の詩は、(彼の人物が敬愛されると共に)アメリカの國民文學として認められるやうになり、ひろくヨーロッパや東洋の諸國にまで流布した。たゞかういふ彼の作品の特長が、人間の深刻な葛藤や運命の姿を把へることなく、深い感情や思想の裏付けをもたないことは止むを得ぬ缺點といはなければならぬ。彼の短詩で民衆に愛誦されるものには前出のほか *The Village Blacksmith* (1839), *Excelsior* (1841), *The Arrow and the Song* (1845) 等、殊に抒情詩としては *The Day Is Done* (1844), *My Lost Youth* (1855) 等があり、古きアメリカの寧園氣の中に描かれた物語詩には *Evangeline* (1847), *The Song of Hiawatha* (1855) 又史實によつた物語詩に *The Courtship of Miles Standish* (1858) がある。又 *Tales of a Wayside Inn* (1863-72-74) はチョーサーの *Canterbury Tales* の形式をもつた、三部連作の輕快な長詩である。彼はたほ神曲のほか、その非凡な語學の才によつて、ヨーロッパのさまざまな國々の傑れた文學を翻譯或ひは翻案して、この國の文化によき貢獻をなした。

ロングフェローのあとを繼いでハーヴァードの近代語及近代文學の教授となつたのは、ジェイムズ・ラッセル・ローエル (James Russell Lowell, 1819-1891) である。彼の父はボストンのユニテリアンの教會の牧師であつたが、その血統はニュー・イングランドの建設時代の古き家柄に屬し、代々牧師や裁判官など顯要な人物を出して來た。彼は一八三八年ハーヴァードを卒業したが、當時重大な社會問題となりかゝ

つてゐた奴隷廢止運動に共鳴し、廢止論者たることが世間の嘲笑と不評判を招く時期にあつて、敢然この正義のために鬪つた。テキサス州への奴隷輸入に憤慨した *The Present Crisis* の如きは北部一帶の讀者に烈しい感銘を與へたものであるが、殊に一八四六年 *The Boston Courier* 發表しはじめた *Biglow Papers* は奴隷地帶の擴大を意味するメキシコ戰爭に刺戟された一種の諷刺詩で、その愛國的人道的な精神と、生き生きした機智と滑稽と、そしてそのこれまで類のない自由なアメリカの方言の驅使によつて、ローエルのみならずアメリカの文學中の重要な作品に算へることが出來る。(この詩の第二部は一八六二—六六年、アトランティク・マンスリィ誌に發表された。)

ローエルには又詩人としての柔らかな想像や自然に對する細かな觀察や愛が充分にあり、それは *To the Dandelion*, *The First Snow Fall* の如き短詩や、愛妻(女詩人Maria White)に捧げた愛の歌 *My Love* (1840)や、宗教的な物語詩 *The Vision of Sir Launfal* などにあらはれてゐる。彼はその一八四〇年に愛妻と知り、四四年に結婚した。その後の六年間が、彼の詩人としての最も豐富な期間で、五三年妻の死んだ後は、彼の詩人として、又社會運動家としての情熱は急に減退していつた。さういふ彼につゞけられた適切な仕事は文學の解説者或ひは批評家としての仕事であり、その廣い教養と詩人たるセンスとそして生き生きした文體をもつて、エリザベス朝や中世の文學或ひは最近の詩人・思想家について紹介・論評を行つた。そ

の批評集には *Among My Books* (1870, 76), *My Study Windows* (1871) がある。彼は又一八五七年 *Atlantic Monthly* の創刊とともに主筆として招かれ(一八六一年まで)、その後更に *North American Review* の編輯委員となり(一八六四—七二)、ジャーナリストとして有能な活動をした。又これは詩の形であるが、一八四八年に發表した *A Fable for Critics* は、エマソンはじめ當時のアメリカの文學者を鋭い機智とユーモアをもつて批判した興味ある作品である。

彼はハーヴァードの教授たること二十年の後一八七七年スペインの公使となり、つゞいて一八八〇年イギリスの公使となり、その人物と學識によつて充分な成功を收めた後、ケンブリッヂの祖先の家に閑居して、時折に批評感想を發表しつゝ幸福な晩年を終つた。

このボストン(ハーヴァード)の人たちのうち、一番あとまで生き殘つたのはオリヴァー・ウェンデル・ホームズ (Oliver Wendell Holmes, 1809-94) である。彼の父は系統正しい牧師で歴史家であり、母の家系はかの女詩人アンヌ・ブラッドストリートにまで遡る名門である。彼はハーヴァードで法律を學んで、一八三〇年卒業したが、後醫學に轉向しヨーロッパに留學し、一八三六年ボストンで開業、又一八四七年にはハーヴァードから招かれ、解剖學衞生學の教授として一八八二年まで勤續した。

彼は一八三〇年なほ一法學生である頃、Constitution 號(一八一二年の戰爭で武勳を立てた軍艦)の廢艦

計畫を聞いて憤慨し *Old Ironside* と題する詩をボストンの新聞に投じ、全國的な反響を呼んだが、一八三六年第一詩集を出版、その中には *The Last Leaf* (1832) など有名な詩が含まれてゐる。その後の詩の中では造化の神祕を歌つた *The Chambered Nautilus* (1858) が有名であるが、彼の詩人としての才能は大きなものといへないのであり、輕妙なユーモアを含めた風俗詩的なものにその愛すべき天分が見られる。

けれども彼の眞實の才能が五十歳近くなつてあらはれて來た。すなはち一八五七年アトランティック・マンスリィが創刊されるや、ローエルのすゝめによつて彼は *The Autocrat of the Breakfast Table* なる隨筆を發表しはじめた。それは或る下宿屋の食卓で一人の中心人物を圍んでの座談を記しとめた形式のものであるが、その人物の機智はさまざまな下宿人に接することによつて、豐富多樣な展開を見せる。これはホームズの學問や人物に最も適した形式であつて、彼はこの作品の成功に促され、引きつゞき同樣な性質をもつた *The Professor at the Breakfast Table* (1860) など數篇を發表した。そのいづれも彼の活潑な知性の動きと、人間的な智惠と愛を含んだよき讀み物である。

彼は更に小說の世界にまで筆を試み、*Elsie Venner* (1861), *The Guardian Angel* (1867), *A Mortal Antipathy* (1885) の三冊を書いた。それはいづれも醫者である彼らしい作品といへるのであつて、例へばその第一作に見る如く、人間の先天的な肉體的特徵が彼の道德的缺陷の原因となるといふやうな主題が扱はれてゐる。しかし彼の散文家としての長所は自由に無秩序に談話する如く書く點にあり、確實なプロットをもつ小說家としては成功しなかつたといつてよいであらう。彼はその溫和で明朗な人物又學識の故にボストンの重要な存在となり、公私の會合・宴席に招かれて、その折々の適切な自作詩を朗讀するのであつたが、この樣な場合に彼の本領が最もよく發揮されたといふことが出來るだらう。

五、奴隸解放の文學

ニュー・イングランドの華々しいルネサンスの中で特殊な色調をもつものはジョン・グリーンリーフ・ホイティア (John Greenleaf Whittier, 1807-1892) である。彼はピューリタンでなくて、代々のクェーカーであり、又殆んど敎育を受けずその上都市に接することなく田園の耕作の中に生立つた(マサチューセッツ州 Haverhill)。その敎養も信仰もエマソンやロングフェロー、ローエルの群とは全く異つたものである。かうしてこの田舍の少年は庶民と自然の詩人として成長することになり、同樣の境遇をもつイギリスの詩人バーンズの詩集を愛讀した。一八二六年彼のその詩の一部が、奴隸解放運動の指導者ウィリアム・ロイド・ギャリソン (Wiliam Lloyd Garrison, 1805-1879) によつて、彼の機關雜誌に發表された。ホイティアはそ

の時十九歲であつたが、これを機緣として彼は奴隸問題のために一生を捧げることとなつた。彼はジャーナリストとしてボストンやフィラデルフィアなど各地に轉住しつゝ、筆と舌をもつてその主義のために鬪つた。ダニエル・ウェブスター (Daniel Webster, 1782-1852) が一八五〇年逃亡奴隸法に賛成演説をなした時、痛烈な諷刺詩を書いて *Ichabod* (「榮光消えたり」の義) と題した。彼はクェーカー教徒獨特の靜寂な心をもちながら、しかもその中から正義を求める念は强く烈しく迸り出るものがあつた。彼はまた南北戰爭の終つた時、*Laus Deo* を書いて、奴隸解放の勝利を歡喜の叫びを以て歌つた。

彼の奴隸問題に關する詩は少なからぬ分量に達するが、その詩の性質として永續的な純粹な價値をもつものは少い。彼の詩のすぐれたものは主として田園の生活或ひは田園の自然に關するものであり、又彼のもつ靜かで澄み切つた宗教的信念を歌つたものである。田園詩の中には *The Barefoot Boy, Telling the Bees* 等があり、又彼を代表するといへる長詩 *Snow Bound* (1866) がある。これはニュー・イングランドの百姓家が雪に包まれてゐる明け暮を描いたもので、そこに生活する人々の小さな群が確實なそして緻密な筆をもつて、生き生きと素朴に描き上げられてゐる。又彼の信仰は *Trust, The Eternal Goodness* 等にあらはれてゐるが、そこには神を畏れるカルヴィニズムの暗くいかめしい色調と全く異る穩かに明るく、神をより賴む心が純粹にあらはれてゐる。又彼には輕妙なバラド風の傑れた詩があり、例へば *Maud*

Muller, Skipper Ireson's Ride 等を擧げることが出來る。

なほ奴隸問題に關聯して當然附記せらるべきものは *Uncle Tom's Cabin* (1852) であるが、その作者ハリエット・ビーチャ・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896) は嚴格なカルヴィニストの血筋から生れたものであつた。父 (Lyman Beecher) も弟 (Henry Ward Beecher) も夫 (Calvin Stowe) も皆正統的なピューリタニズムの擁護者であつた。ハリエットは一八三六年西部に移住した時、神學の教授ドクター・ストウと結婚したのであるが、その當時ケンタッキー州の奴隸の生活を直接觀察する機會をもつた。そして一八五〇年、夫がメイン州のボードン・カレッヂに就任するとともに、その地に移つた。その一八五〇年は逃亡奴隸法の實施された年であり、そのことに憤慨して彼女はこの小說を書き綴り、一八五二年發表した。そして非常な世評を呼び、從來のあらゆる廢止論者の運動に勝るほどの效果を擧げた。

この小說は正邪の觀念があまりに激しいために、性格の描寫も單純であり、表現も粗雜であるが、そこに又それが容易に大衆に受け入れられた理由もあるのであり、アメリカとして最初の社會主義的な小說を吾々はもつのである。そして社會的不正が純粹なピューリタン精神を刺戟した場合に、どのやうな文學が生れるかの實例を示されるのである。このことはその後のアメリカ文學を觀察する際にも參考となるであらう。なほこの作者は後、ニュー・イングランドのピューリタンの生活を題材とした小說 *The Minister's*

Wooing (1859)、*Old-Town Folks* (1869) を書いた。

中部地方のニューヨークはこの時期において、不思議にもアメリカ文學として最も偉大な文學者を二人までも出した。それはメルヴィルとホイットマンであるが、彼らはその生地の區別を超え、獨立せる大きな存在としてこゝに取り扱はれなければならぬ。

六、メルヴィル

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) はニューヨークの貿易商の家に生れたが、父方はスコットランド系、母方はオランダ系で、アメリカ渡來後も名譽ある人物を出してゐる。父は破産して一八三二年死んだのでメルヴィルも普通教育を中途で止め、一八三七年リヴァプール行の貨物船の水夫となり、一八四〇年には捕鯨船に乘組んで、太平洋から南洋諸島にまで行つた。そして船長と衝突し脱船して南洋の島に逃込み、その後ロマンティックな冒險をくゞつて、一八四四年アメリカ軍艦の水兵となつてボストンに歸還した。この間の經驗を書き記したものが *Typee* (1846『食人種』)、*Omoo* (1847『放浪』) *White Jacket* (1850) である。なほ一八四九年には同じく南洋の體驗にもとづいた幻想的な物語 *Mardi* （島の名）

と、最初のリヴァプール行の冒險を追想した *Redburn* を出版した。

一八四七年には結婚し、四九年にはロンドンに行き、五〇年末からマサチューセッツの山地ピッツフィールドの農園に移り *Moby Dick* の稿をすゝめ、同じ地方レノックスに引き籠つて長篇『七破風の家』にとりかゝつてゐたホーソーンに接する機會をもつことが出來た。旣に彼は『緋文字』に感激し賞讃の論文をも發表してゐたのであつた。ホーソーンはこの後進の天才に終生好意を示した。

モーヴィ・ディック、或ひは『白鯨』は一八五一年出版された。白鯨とは頭部に八呎の白きアザをもつ年經た大鯨で、この物語の主人公船長エイハブは、かつてこの怪物に片足を嚙み取られ、今その復讐心に燃えて、彼を追跡してゐる。そして幾多の苦難ののち船はついに白鯨に行きあたるが、却つて彼に翻弄され船長は銛の綱に引かれて海中に沈み、船も白鯨の一擊に碎かれてしまふ。それは自然を征服しようとする人間の高慢さを諷刺したものと見ることも出來、或ひは永遠の惡の魂と戰ふ人間のはかないしかし眞劍な努力を象徵するものと見ることも出來る。ともかくもこの物語はその構成と表現の中に古典的な敍事詩に見るやうな莊重な威嚴を含み、讀者の心に深く印象するものをもつてゐる。

白鯨はメルヴィルが精根を注いだ力作であつたが、その價値を認めたものは殆んどなく、メルヴィルは次第に陰鬱な幻滅の氣持に沈んで行つた。そして次の作 *Pierre, or the Ambiguities* (1852) では彼自身を思

はせるやうな一青年の病的な戀愛生活と自殺の生涯を露骨に取り扱ひ、世間の不評を一層深めるに終つた。そしてその後三十年間二三の作品は發表したが彼の名は全く讀書界から忘れられた。

彼は又この間に戰爭詩集 *Battle Pieces and Aspects of War* (1866) を發表し、一八七六年には聖地巡禮(一八五六年)の印象にもとづいて連作的な長詩 *Clarel* を發表、なほ *John Marr and Other Sailors* (1888,) *Timoleon* (1891) の二詩集を加へたが、何の反響も呼ばなかつた。詩においても彼には常に憂鬱な人生觀がつきまとひ、それが作品を重苦しくしてゐるが、その一部分や短詩の中にはすぐれた味はひをもつたものがある。

彼は一八六六年の暮ニューヨークの稅關吏となり、八六年まで勤めた。そして九一年の秋死んだ時には、世間は勿論文壇さへ注意を拂はなかつたが、今世紀となり生誕百年が記念される頃から、彼の名は急激に高まり、殊に『白鯨』は世界的な傑作として、『神曲』や『リア王』にまで比せられるやうになつた。ともかくもこの不遇な文學者に、獨創的な深い天才が宿つてゐることは否定できぬことであり、そのペシミズムがホイットマンのオプティミズムと大きな對比をつくつてゐることも興味がある。そして彼のさういふ色調には、やはりニュー・イングランド淸教精神の傳統が深く流れてゐることが感ぜられるのである。

七、ホイットマン

ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman, 1819–1892) はアメリカのロマンティシズムの最後の頂點をなすものであり、しかも彼はその未來に向つても大きな生きた影響を與へてゐる。彼に到つてアメリカ文學ははじめて充分な獨立した資格をもつことが出來、アメリカの風土と人間がまぎれのない表現をもつことになつたといへるのである。彼の家はニューヨーク州ロング・アイランドに代々住んでゐた百姓であつて、その點からも彼はアメリカの土の產物といへるのであるが、彼の父は大工となり、その仕事のために彼が四歲の時、島の西の端にあるブルックリンに移轉した。父方はイギリスのピューリタンであり、母方はオランダのクェーカーであつた。彼は十一歲まで小學校に通つただけで、あとは印刷職工をしたり、ロング・アイランドで小學教員や記者生活をしたりしたが、一八四一年またニューヨークに出て、記者の仕事のかたはら短篇小說を新聞雜誌に發表した。一八四八年ニュー・オーリアンズに創刊される新聞 (*Daily Crescent*) の主筆に招かれ、同地に三ケ月滯在の後、何か不幸な戀愛事件も原因となつて再びニューヨークに歸つた。その後は父の大工の手傳をしたり、新聞の寄稿などで生活したが、その間に彼の詩想はやう

やく肥え、一八五五年小冊子ながら詩集 *Leaves of Grass* を出版した。南北戰爭となるやワシントンに出、傷病兵慰問のためにつくし、愛國的な詩集 *Drum-Taps* を書き、その活動で健康を失ふまでに至つた。しかも六五年に『草の葉』の內容のために內務省の職を罷免され、のち司法省に入つたが、七三年中風症で倒れ、その後はニュー・ジャージィ州のカムデン (Camden) に隱棲し、數度の旅行のほかは少數の崇拜者の訪問をうけるだけで、全く單調な乏しい生活の中に世を終つた。

『草の葉』の初版はわづか十二篇の詩を收めた粗末な詩集であつたが、ホイットマンは終生その增補修正をつゞけ、一八九二年いはゆる「臨終版」として第九版をのこした。この詩集は彼の生命そのものの結晶であり、自ら「この書に觸れる者は人間に觸れる」といつてゐる。先づ注意すべきはこの詩の形式であり、それは韻や行の長さを無視し、生きた自然のリズムをどこまでも自由に表現しようとする。そして彼の一つの辭として卑俗な言葉や、あやしげな外國語古典語などを用ひ、又その對象をカタログ式な羅列をもつて繰返し表現しようとする。それは無傷な形式とはいへないがしかも獨特な迫力をもつものであり、彼の精神が彼の環境の形象(イメージ)とともに豐かに生き動き流れてゐることが感ぜられる。

かういふ詩によつて彼は何よりもアメリカの自然とそしてそこに生きる人間の生活についての理想を歌ふ。彼の社會生活と政治の理想は民主主義である。しかも民主主義の根柢をなすものは充分な自己尊重の

自覺をもつた個性と個性との眞實な結合――「同志愛(コムレードシップ)」でなければならぬ。更に又このやうな個性は神祕的な生命の流れによつて宇宙に連ろものであり、個性そのものが宇宙だともいへる。かくして吾々の生命は勿論不滅であり、死さへも幸福である。またさういふ人間は靈のみならず肉においても神聖であるべきであり、女性も男性と同樣に尊重すべきものである。かうして彼は肉體の愛から同性の戀愛をまではゞかるところなく讃へる。彼は最も眞實にアメリカ的なデモクラシィの詩人であり、それがその愛の精神によつて人類的な普遍の宗教心にまで昂揚したと見ることが出來よう。それらを貫いてゐるものはきはめて旺盛な樂天的な氣分であり、彼は人間の善を信じその發展の力を信じ、それがアメリカにおいては西部開拓地の草原に波動して行く民衆の生命に共感されてゐる。すなはちエマソンの思想はホイットマンに至つて最も直接な生きた精神・表現となつてあらはれてゐるのであり、『草の葉』が世に出た時、一般世間や文壇から前例なきほどの激しい惡評をうけたが、たゞ一人「私は君を偉大な生涯の門出に迎へる」とまで書きおくつたのはエマソンであつた。その後に成長した『草の葉』は、尨大な複雜な內容となり、その中から特にすぐれた詩を取り出すことはむつかしいが、自己の生涯や心理を反省しつゝ宗教觀や自然觀を歌つた *Starting from Paumanok*, *Song of Myself* の類ひ、異性の愛と同性の愛の意味を深くほりさげた *Children of Adam* 及び *Calamus* の二つの詩群、又リンカーンに對する敬愛と悲しみの心を歌つた *Memories of*

President Lincoln と題する一群の詩の如きは殊に注目さるべきであらう。彼の詩はその形式とともに無限に流動するやうな長詩が多いが、短詩にも鋭く心をうつやうな傑れた作品がある。

彼には散文の作品も相當に多い。散文集の主なものには *Specimen Days and Collect* (1882), *November Boughs* (1888) があり、又『草の葉』の序文は彼の文學論をうかがふものとして重要である。又 *Democratic Vistas* (1871) は南北戰爭後の混亂腐敗せるアメリカに對して彼の民主主義の理想を述べ、民主主義に立つ文學の在り方を說いた重要な論文である。なほ彼の臨終まで十九ケ年を奉仕した崇拜者ホレス・トラウベル (Horace Traubel, 1858–1919) が記錄した *With Walt Whitman in Camden* (vol. I, 1906; vol. II, 1908; vol. III, 1914) は、彼の人物と思想をうかゞふための貴重な文獻である。

第三章　南北戰爭より世紀末まで（一八六〇—一八九〇）

——リアリズム發生時代（過渡期）

第三章　南北戰爭より世紀末まで（一八六〇—一八九〇）

一、鍍金時代

エマソンらのいはゆるトランセンデンタリズムの運動は、當時勃興しつゝあつた東部地方の産業社會及びその精神の中で一つの笑ひ草となつたともいへる。それはあまりに人間の實際を離れ、その利己的物質的本性を忘れたものであるからである。しかしそれにも拘らず、それが舊來のピューリタニズムのペシミズムを征服し、明るいオプティミズムを立てたことは、民衆の一般的氣分に合するものがあり、殊に西部開拓地の希望に連絡する點に大きな强みをもつてゐたからである。しかし南北戰爭からこの世紀の後半を終る間に、そのやうな樂天主義は次第にその空虛な主觀性を露はす結果となり、嚴しい現實の前に消滅するほかないこととなつた。アメリカ人固有の樂天主義は亡びたわけではないが、それは理想的或ひは想像的地盤を捨てゝ、實際的科學的地盤の上に自己を築かうとする態度に移つてきた。

南北戰爭はアメリカの再發見だといはれる。それは南部の農業主義に對する北部の産業主義の勝利であり、南部は經濟的にも社會的にも崩壞するのであるが、同時に北部自體も、その産業革命の進行によつて勞働者の團結や勞資の鬪爭の問題等新しい社會的現實に直面することとなつた。同時にその東部の金融資

本が西部に進出することによつて、フロンティアも農業中心の特色を失ひ、その獨立的ないはゆる農業的(アグレリアン)・個人主義(インディヴィデュアリズム)の精神を失ひ、農業方法の科學化、經濟市場との密接な結合によつて近代產業の性格を濃厚に帶びるやうになつた。そして自由土地の減少・消滅は一層この傾向を決定的なものとした。かうしてアメリカの財力は西部に向つて移行し、自己の力を增大すると共に、殊に西部特有の金銀鑛地方における成功者の富は西部のみならず逆に東部にまで勢力を伸ばさうとするやうになつた。かうして南北戰爭後のアメリカには激しい黃金中心の社會が現出する。そして政治と實業の腐敗と下劣な成金趣味が橫行する。この一八六五年から一八九〇年に至る四分の一世紀をマーク・トウェーンとウォーナー合作の小說の表題によつて鍍金時代と呼ぶのである。(*The Gilded Age*, 1873)

けれどもこのやうな混雜粗野な又物質的な社會狀態の中に南北戰爭後の新らしいアメリカの國家的統制が刻々に實現しつゝあつたことを吾々は見逃してはいけない。そして從來の地方割據主義(セクショナリズム)の代りに國家主義(ナショナリズム)の强化が行はれ、そこから又ヨーロッパに對する極端な崇拜の態度が薄れて來るやうになつた。そこには粗雜ながらも新しい反抗精神の目覺めがある。一八三〇年代にエマソンらのロマンティシズムが從來のピューリタニズムに反逆したやうに、この物質的科學的な精神はロマンティシズムの幻に反抗する。そして一種のリアリズムといふべきものが文學の世界にもあらはれる。作家がボストンのブラーミンたちのや

うな教養あるセクトの世界に限られた時代は去り、國民の廣い生活の中から自己の體驗をもつて生き生きとあらはれて來る作家が見られるやうになつた。そして例へば小說においては、空想的な殊に滑稽な笑ひに滿されたやうな形式の蔭に新らしいアメリカの生きた生活の現實が表現されるやうになつた。ホイットマンが一八七〇年代に入つて新らたにその價値を認識され民衆全體の聲をあらはす眞實の詩人として敬重されるに至つたことも偶然でない。ソーローも亦同樣である。かうして一見野蠻亂雜な鍍金時代はそれなりに自己を記念すべき文學を生み出して居り、それは殊に散文の世界において著しい發展を見せるのである。鍍金時代はその富を逐ふ熱情においてはなほロマンティシズムの名殘を見せながら、その追求の對象が富であり物質である所から、必然的にリアリズムの柵內にはいつて行く。かうして吾々は文學においてもアメリカン・リアリズムの前期としてこの時代を見ようとするのである。

二、マーク・トウェーン

マーク・トウェーン (Mark Twain, 本名 Samuel Langhorne Clemens, 1835–1910) はこの新らしい時代の作家の代表的なものである。彼の父はヴァージニア出の開拓者で富をかくした土地を夢想して幾度となく

住地を變へ、ミズーリ州のフロリダ (Florida) に住んだ時に、五番目の子供である彼が生れた。そして四歳の時、家族はミシシッピ河畔のハンニバル (Hannibal) に移り、彼は十八歳までの最も大切な成長時代をこの荒涼たる開拓村で送ることとなつた。たゞ一つさういふ彼に絶えず異常な感化を及したものは無限な夢とロマンスを生むミシシッピの大河であつた。十二歳の時、父がどん底の貧乏で死んだために、學校をひいて田舎新聞の小僧となり、やがて東部に放浪してニュー・ヨークやフィラデルフィアで植字工となつて働き、ブラジルまで富の冒險を試みようとしたが、結局河畔の故郷に歸り、幼少の時からの理想人物であつたミシシッピ汽船のパイロットとなり、四年間熱心に勤務し、河流のあらゆる難所を暗記するまでになつた。南北戰爭後はネヴァダの開拓地の銀山へ行き、そこから又カリフォーニアへ移つたが、一獲千金の夢に破れ、いつか記者生活の道に入つた。その間にアーティマス・ウォード (Artemus Ward, 1834-69) やブレット・ハートに接して小説作法を學ぶ機會をもつた。そして一八六五年 *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* なる滑稽な小品を發表、一躍有名になり、一八六七年にはヨーロッパとパレスティナに漫遊することができたが、その旅行記が *The Innocents Abroad,* (1869) であり、從來のアメリカ人と異り、舊世界の傳統的文化を新大陸人の目をもつて忌憚なく觀察批判してゐる。次いで西部開拓地の生活に取材した *Roughing It* (1872) を書き、一八七三年にはウォーナーとの共著により *The Gilded Age* を

書いた。そこには七十年代のアメリカの實業と政治の腐敗が痛烈な諷刺をもつて批判されてゐる。このやうなユーモアやサタイヤの文學のほかに、彼が書いたものは、少青年時代の生活にもとづく明るく又涙ぐましいロマンティックな物語で、中でも *The Adventures of Huckleberry Finn* (1885) は彼の天才が最も豐かにあらはれてゐる傑作である。*The Adventures of Tom Sawyer* (1876), *Life on the Mississippi* (1883) などもこの類の中に算へられる。又つぎに一つの部類として歷史に取材した滑稽諷刺のロマンスがあり、*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889) などが擧げられるが、オルレアンの少女を禮讃した *Personal Recollections of Joan of Arc* (1896) は彼としても異色ある作品である。

　このやうな歷史ロマンスで常に彼が示したものは、中世的な封建制や騎士道に對する反感であり、そこに彼の民主的な平民思想があらはれてゐるわけであるが、彼自身は一八七〇年、ニュー・ヨークの富豪の娘と結婚し、東部地方の「お上品な傳統」の空氣に浸り却つて鍍金時代の子らしく富と出世を求むる本能を發揮するやうになつた。かうして彼は文壇及び講壇の人氣者として、地位も收入も高まるとともに、西部的な自由な野生的精神からは次第に遠のいて來る。それはすなはち産業革命の進行による西部フロンティアの消滅を象徴するものに外ならぬのだが、自ら完全に周圍の狀態に同化することのできぬ彼は、さういふ周圍と自己に對して次第に憂鬱な嫌惡とペシミズムに陷入つて行つた。そのやうな中から書きのこさ

れたものが *What Is Man ?* (1905 私版)、及び未定稿 *The Mysterious Stranger* (1916) で、そこには神の攝理の代りにたゞ機械的な法則を見る虛無的な厭世觀乃至厭人觀が濃厚にあらはれてゐる。これは科學時代機械時代の反映としてアメリカにあらはれた最初の深刻なペシミズムの書として注意さるべきものであらう。

彼は出版の失敗から巨萬の借財をつくつたが、それをも償却し旺盛な精力をもつてよく働きよく遊び、一九〇八年にはオックスフォード大學から文學博士の學位を授けられ、名譽と富のうちに世を終つたが、このやうな鍍金時代の成功者が、その生涯の蔭に深い矛盾と苦悶をもつてゐたことは、殊にこの時代の過渡的な性質を示すものとして興味ある事實といへよう。

三、地方色の文學

なほ吾々は次にマーク・トウェーンのやうな內省の要素を殆んどもたないで、この騷しい過渡的な時代に自身全く過渡的な存在として浮んでゐたやうな作家を見る。中でもフランシス・ブレット・ハート (Francis Bret Harte, 1836–1902) はカリフォーニアの作家として殊にその地方色の作家として成功した。彼はニューヨーク州のオルバニィの生れで、十五歲の時カリフォーニアに移り三十二歲まで主としてサン・フランシスコに過ごした。そしていはゆるゴールド・ラッシュの渦卷の中にある西部海岸地方の特色ある環境と人間 (殊に移民鑛夫ら) に接して、そこから彼の文學をつくり出した。彼の出世作は自ら主筆であつた *The Overland Monthly* 誌に發表した *The Luck of Roaring Camp* (1868) であり、彼の名聲はたちまち東部地方にまで擴がり、一八七一年にはカリフォーニアを去つて成功兒として東部地方に歸つて行つた。しかし彼のその後の生活は決して華やかなものでなく、一八七八年にはドイツの小さな領事の職を得たが、そのまゝ歸國することなく世に忘れられた形になつて沒してしまつた。

ブレット・ハートの作品に最も著しい影響を與へたのはディッケンズであり、彼は小說の氣分や情緖といふものよりもスピードのある展開やメロドラマ的なシチュエイションを重視した。そしてそこには西部獨特の笑ひと方言風習が支配する。かうして彼はポーの作品にはじめられたやうな藝術的な短篇小說の型を破つて、アメリカ獨特の一つの型を提供した。彼の小說及び詩がもつてゐる地方色はいはゆる“Pike”たちの方言風習であつて、パイクとは、ミシシッピ流域殊にミズーリ州の Pike County 地方からカリフォーニアに移住した貧民を呼ぶ名稱であるが、ハートは彼らの殊に方言の特色を發見し、それを文學の上に活用流行せしめた功績者である。(最初の利用者は前出のロングストリート)

西部地方色を活用した詩人にワーキン・ミラー (“Joaquin” Miller 本名 Cincinnatus Hiner [又は Heine]

Miller, 1839–1913) がある。彼は自ら記すところによると、インディアナとオハイオの境界線に彼ら家族の幌馬車が來かゝつた時その中で生れた。かうして彼は西部地方を兩親とともに轉々しながら、一八五二年には遠くオレゴンにまで移つて行く。一八六八年とその翌年に詩集を出したが、世人の注意を惹くに至らず、ロンドンに渡り自費出版で *Pacific Poems* (1870) を出し、かの地の詩人たちから非常な賞讃をうけた。かくて彼はアメリカに歸り、最後にはカリフォーニアのオークランドに定住したが、その間にヨーロッパやアメリカの各地を巡歴し、或ひは丸太小屋の原始生活や若い詩人たちのためのギリシャ風のアカデミー建設や、種々ロマンティックな試みをした。彼の詩そのものもバイロン的な誇張と華やかさをもつたもので、古き開拓地精神の名殘をたゞロマンティックに歌つた感じがある。短詩 *Columbus* (1896) がその作品では殊に有名である。

エドワード・ローランド・シル (Edward Rowland Sill, 1841–1887) は東部のコネティカト州の生れで、ピューリタンの血筋であるが、一八六一年イェール大學卒業後健康が弱いため西部に移り、カリフォーニアで數年暮し、ハーヴァード神學校に學び、その後は主に學校教師としてオハイオやカリフォーニアで孤獨な生活を送つた。一八七四—八二年はカリフォーニア大學英文科の教授であつた。彼の詩は同じ西部的環境の中にありながら、ミラーなどとは反對に內省的であり、しばしばピューリタン的な嚴肅さをもつてゐ

る。しかしその健康と同じくこの鍍金時代に強く反撥するやうな積極性はもたない。その詩の殊にすぐれたものには短詩 *Opportunity, The Fool's Prayer, Solitude* などがある。

ジェイムズ・ホイットコーム・ライリイ (James Whitcomb Riley, 1849–1916) はインディアナに生れ、青年時代には旅役者となり、のち新聞記者となり一八八三年 *The Ole Swimmin' Hole* と題する詩集を出版した。それは方言を自由に驅使した連作詩であつたが、非常な好評を得、彼は引きつゞき同樣の詩を發表し、その方言の魅力と單純で感傷的な主題の扱ひ方によつて、殆んど前例なきほどの人氣詩人となつた。*When the Frost Is on the Punkin, The Raggedy Man, Little Orphant Annie* の如きはアメリカの民族詩といつてもよいほどの愛誦を獲ち得てゐる。

最後に一人の重要な地方色詩人はアーウィン・ラッセル (Irwin Russell, 1853–1879) である。彼はミシシッピ州ポート・ギブソンに生れ、法律を學んだが、虛弱な身體をもちながら放浪の生活を送つて、ニューオーリアンズの安下宿で客死する。彼が特殊の關心を向けたものはニグロであり、その風俗や信仰や無智や純情を題材とし、それを彼らの方言をもつて忠實巧妙に表現した。しかも彼は當時の他の地方色詩人の如く徒らにロマンティックに流れることなく、そのリアリズムの性格において新らしい時を豫報する立場に立つてゐる。彼はニグロの文學的價値を認めた最初の詩人といへるのであり、二十六歳で死んだ彼の

遺したものは一巻の小さな詩集（一八八八年出版）に過ぎないが、そのもつ意味は大きいのである。

なほ、この時代に出た詩人の中で記すべき名前には次ぎの如きものがあらう。James Bayard Taylor (1825–1878), Richard Henry Stoddard (1825–1903), Edmund Clarence Stedman (1833–1908), Thomas Bailey Aldrich (1836–1907)

彼らは何れも獨創性に乏しく、アメリカ浪漫時代の餘波の中に、甘い詩の美と詩らしい技巧を樂んだやうな詩人であるが、それでも、ステッドマンは南北戰爭の烈しい現實に答へて、すぐれた戰爭詩の一巻をのこし（*Alice of Monmouth*, 1863）、またオルドリッチは殊にその晩年に於て、眞摯な思想と完全な技巧をもつた數篇のよき抒情詩を書いてゐる。（*A Book of Songs and Sonnets*, 1906）

四、ラニアーとディキンソン

南北戰爭に直接接した詩人の中で最も傑れた本質と作品を遺した者の一人は、シドニィ・ラニアー（Sidney Lanier, 1842–1881）である。彼はジョージア州のメイコン（Macon）の生れでフランス新教徒とイギリス貴族の血筋であるが、一八六〇年オグルソープ（Oglethorpe）大學卒業、翌年（十九歳の時）南北戰爭

の勃發となり、南軍の志願兵として出征、最後に封鎖線破りの船中で捕へられ、一八六五年釋放されて、一管のフルートをたづさへ、徒歩で壞滅の故郷にたどりついた。しかしそのため生れつきの虛弱な健康が全く破壞されて、その後十五年間鬪病の生活をつゞけねばならぬこととなつた。彼ははじめ法律家となつて生活の道を立てようとしたが成功せず、天才的技倆をもつフルートによつて一八七三年ボルティモアの樂團に位置を得、以後詩作にも努力をそゝぐこととなつた。そして一八七九年にはジョンス・ホプキンス大學の講師に任ぜられ、その講義の一部として彼の主要な業績である *The Science of English Verse* (1880) を書いた。

彼は詩と音樂は一致すべきものだとする主張をもち、その研究はかつて前人が到らなかつたところにまで深く及んでゐるのであるが、彼自身天成の音樂家としてその理想を自己の作品において實現することに努力した。しかしその努力は時としてあまりに理論的な意識の強いために成功しなかつたことが多く、卽興的な短い詩に却つて傑れたものが見られる。それに彼はその虛弱な肉體の故もあつて、南北戰爭後の激しい世相に對しても充分に働きかけることができず、自己の文學と環境の離反を感じながら纖細な情感と技巧の世界に沈潜するやうな態度をとることとなつた。しかしその不幸な短い生涯に絕えず明るく平和な心をもちつゞけた彼の人格はそのやうな詩の中に純粹に印象深くひらめいてゐる。それは初期の作品 *Corn*

から、*The Symphony, The Psalm of the West, The Marshes of Glynn* 及び死の床で書いた *Sunrise* などである。彼はこの過渡期を、自己の天分と運命のまゝに最も誠實に生き拔いて行つた詩人といふことができよう。

さういふ意味の純粹さをもつ詩人として、吾々はエミリィ・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830–1886) の存在に又注意される。彼女はマサチューセッツ州のアマスト (Amherst) で生れ、父は法律家で國會の議員にもなつたことがあり、町でも尊敬された紳士であつた。彼女は幸福で快活な少女として成長したが、二十四歳の春フィラデルフィアに友人を尋ねた時、偶然に或る男（牧師だといふ）と戀に陷ち、その男は妻子さへある身だと知つて、その戀を斷念して彼女は逃げるやうに自宅に歸つて來た。そしてその時以後死に至るまで三十餘年間門外へ一歩も出ず、文字通り修道女の生活をおくつた。しかもその間に彼女は斷片的な詩の如きものを絶えず書き記して行つたが、その詩は生前に四篇だけ彼女の同意を經ないで發表されたのみで、遺言にも詩稿はことごとく燒き捨てるやうに命じてゐたといふ。しかし幸にそれは一つの詩集の形となつて、一八九〇年はじめて世上におくられ、一九二四年に至りその詩の全集と傳記及び書簡が出るとともに、彼女の名は俄然詩壇の注目を惹くやうになつた。

彼女の詩は形式としてはきはめて短かく、斷片的又格言的である。文法や音韻の約束は全く無視され、

純粹な精神とそれに伴ふ自由な形式をどこまでも押し拔かうとする。そしてその緊張した集中性とそこから來る暗示、鋭い觀察や新鮮な比喩、さういふものに彼女が新らしい時代の詩人としてもつ感動力があり、例へばそれは後日のイマジストたちの詩に甚だ近く接近する。彼女の詩人としての評價は、彼女の生涯の神祕と同じく、なほ謎のやうなものを殘してゐるが、彼女が詩人として獨自の天分をもつてゐたことは明らかである。かういふ彼女の異常な生涯と藝術がニュー・イングランド清教徒の嚴肅な空氣の中から生れ出て來たこと、そしてそれが鍍金時代のアメリカの片隅でひそかにその存在をつゞけたといふ事實は、いつまでも吾々の興味にのこるだらう。（たとへば現代の女流劇作家スーザン・グラスペルは彼女の死後の家族を題材に *Alison's House* (1930) を書いた。）

五、ヘンリィ・アダムズ

この鍍金時代においては新らしいアメリカの必然な不可抗な成長とともに、人々はその階級や教養に從ひ、それぞれに何らかの意味の過渡期を經驗してゐるわけである。その中で殊に目立つ一つの存在がヘンリィ・アダムズ (Henry Adams, 1838–1918) である。彼の家系は生粹のニュー・イングランドの名門であ

つて、曾祖父 (John Adams) と祖父 (John Quincy Adams) は大統領となり、父 (Charles Francis Adams) は南北戰爭中駐英大使として活動した。彼は父祖の地 Quincy の田園に育ち、二十歳でハーヴァードを卒業したのち、そこで滿たされなかつた知識慾を滿たすべくドイツに行つてベルリン大學の教室に入つたが、そのむしろ非文化的な空氣に失望し却つてイタリア旅行によつて人類や世界史に對する深い反省を促されるやうなことになつた。一八六〇年には父の秘書官としてロンドンに勤め、當時困難な北部側の立場としてイギリス外交界と接衝しつゝ、政治外交の內面を知り、同時にダーウィンやマルクスの學說に接して、文化史の檢討に意を向けるやうになつた。一八七〇年母校に招かれて歷史の助教授となり中世史を講じ、同時に *North American Review* の主筆となつたが、一八七七年兩者をともに辭任した。そしてその後は時代を離れた非活動的な生活に引き籠りながら、歷史の研究に專心し、そこから文明の本質の研究に進み、人類の運命を動かす力は何か、又人類は進步するか、といふ問題に沈潛するに至つた。

彼のさういふ研究は書齋の中だけでなく、世界各地の旅行や美術の探訪によつて導かれて行つたのであるが、彼は結局一一五〇年から百年間の時期、すなはちゴシック寺院やトマス・アクィナスの神學を代表とするその一世紀こそは人類の進步の一つの頂點だと考へるやうになつた。そしてそれに比較して鍍金時代の現在アメリカが全く統一をもたぬ矛盾と雜駁の中にゐることを痛感した。すなはち彼は自分が生れた

ニュー・イングランドの嚴格な傳統が資本主義社會の潮流に押し流されて行く姿を見守り、實際において自己もそこに働きかける（社會的或は政治的な）役割を與へられず、不滿と焦躁の中に人類の運命を考へざるを得なかつた。そして當然過去の中にその理想の國を描き出しながら、また不確かな希望を（例へば發電機に示される）科學的な力の將來にかけながら、一つのペシミスト、或ひはニヒリストとして一生を終つた。その放浪の旅も、さういふ迷へる魂の眞理探究の旅であるとともに、異境の刺戟や好む美術の陶醉の中に自己を忘れようとする努力であつたともいへる。（彼は明治十九年畫家ラ・ファルジュ〔John La Farge, 1835–1910〕とともに日本にまで來た。）彼の主著としてはフランスの中世寺院の研究を中心として當時の生活及び思想を論述した *Mont-Saint-Michel and Chartres, a Study of Thirteenth-Century Unity* (1904) と、彼が少年期からその特殊な環境の中に如何に自己を教育して來たかの記錄 *The Education of Henry Adams, a Study of Twentieth Century Multiplicity* (1906) の二冊がある。殊に後者は當時のアメリカ生活の生きた記錄として、又一つの眞面目な「人間の書」（ヒューマン・ドキュメント）として、アメリカ文學史上でも必讀の名著とされてゐる。なほ彼にはアメリカ史の大著 *History of the United States during the Administrations of Jefferson and Madison* (1889-91) 傳記、歷史論集等がある。

更に彼の終生の親友としてジョン・ヘイ (John Hay, 1838-1905) があることをこゝに記したい。彼は一

八九七年には駐英大使、一八九九年には國務長官となり外交上に重要な活動をしたが、（米國極東政策の「門戸開放」といふ標語は彼が使つたもの）、さういふ彼が數卷の詩集をのこし、一八八四年には匿名で小說 *The Breadwinner* を書いた。中でも詩集 *Pike County Ballads* (1871) はパイクの地方色の文學として、ブレット・ハートの作品と共に先驅をなすものであり、彼の方が自身パイクとしての經歷があるだけ、一層の眞實味をもつと考へられてゐる。彼はインディアナ州の生れで、十三歲から數年をイリノイ州のパイク・カウンティで暮したのであつた。

六、ヘンリィ・ジェイムズ

ヘンリィ・アダムズに示されたやうな新らしきアメリカに對するニュー・イングランド精神の反動は、又同じく小說家のヘンリィ・ジェイムズ (Henry James, 1843–1916) の中にあらはれてゐる。そしてそこには同樣にヨーロッパの古き傳統に對する尊敬乃至あこがれがあり、物質と機械のアメリカ文化に對する拒否がある。彼はニュー・ヨークの富んだ家に生れ、父のヘンリィ・ジェイムズはスェーデンボルグの哲學を好み、エマソンらとも交際した特色ある人物であつた。長兄ウイリアム (1840–1910) は、心理學者・プラ

グマティスト (Pragmatist) としてアメリカの哲學に大きな展開をもたらした。わがヘンリィは父の教育意見によつて幼時からヨーロッパの文化に親しみ、十二歲から十七歲までヨーロッパの學校に學んだが、一八六二年ハーヴァードに入つて法律を修め、一八六七年再びヨーロッパに遊び、七五年にはパリーを永住の地と定めながら、翌年ロンドンに移りその後四十年の生涯をイギリスに暮すこととなつた。そして最後には世界大戰に遭遇して一九一五年イギリスに歸化するに至つた。

かういふ彼は當然自由な世界主義者（コスモポリタン）であり、國際主義者（インターナショナリスト）であるが、同時に彼がその眞髓においてピューリタン精神を失つてゐないアメリカ人であることが注意せられねばならぬ。かくして彼がその小說においてはじめて示した特色は、單純粗野なアメリカ人をヨーロッパの傳統社會の中に置いた場合に生じて來る現象を分析して見ようとするいはゆる國際的關聯（インターナショナル・シチュエイション）の主題であつた。そしてその場合アメリカ人は輕蔑すべく或は憐むべき人間として扱はれてゐる。*Roderick Hudson* (1875), *The American* (1877), *The Europeans* (1878), *Daisy Miller* (1878) の如きそれであるが、中で『デイジ・ミラー』はアメリカの田舍町の富裕な娘が、スウィスの湖畔やローマの古蹟の中に遊び、イタリア人と一見放縱な然し無邪氣な交際をしつゝ突然異鄕の熱病に倒れる可憐な物語でジェイムズの人氣を高めた作品である。つぎに、彼は多く短篇を書き、一八九〇年頃から約五年は戲曲の製作を試みたが、劇壇にもうけ入れられず、再び小說に歸つた。

そしてその主題はしばらく、彼が周圍に見るイギリス人の中に移つたが、〔*The Spoils of Poynton* (1897), *What Maisie Knew* (1897), *The Turn of the Screw* (1898), *The Awkward Age* (1899)〕今世紀のはじめの頃から再び「國際的關聯」の世界に歸つた。*The Wings of the Dove* (1902), *The Ambassadors* (1903), *The Golden Bowl* (1904) 等はこの期間の作品であり、彼の最高の水準を示すものである。

彼がこれら後半期の作品の中に完成していつた獨自な特色は、その對象の微細な觀察或ひは分析であり、且つそれを描寫表現するに纎細巧妙な文字と構成を用ふる。それは最後には心理的或ひは病理的な性格まで帶びるに至つたが、その對象である人物や境遇も日常社會の現實を離れた特殊なものが多かつた。（あまりに生活苦を知らぬ人々、異常に例外的な性格才能など。）かうして彼は戲曲の場合と同じく次第に一般讀者の評判から遠ざかり、その單調な獨身生活の中でこつこつと難解複雜な作品を巨大な分量にまで書き上げて行つた。そして科學的にまで冷やかな、また倦くことを知らぬ分析は、結局作者自身の自己解剖の姿となつて行つた。このやうなジェイムズの徑路は、その反動性から來る當然の結果であるといへるが、同時に彼のさういふ態度には、舊文化の崩壞と新文化の模索の間に苦惱する近代人の惱みが誠實にあらはれてゐる點を見のがすことはできない。さういふ意味で彼は現代文學の先驅をなすものといへるのであり、又彼の心理的な纎細な手法は、現代文學の同じ傾向いはゆる「意識の流れ」の手法に影響を與へて

ゐることが認められるのである。

ジェイムズは又傑れた文藝批評家であり、その小說論は、彼が全集の各巻につけた序文を集めた *The Art of the Novel* (1934) に精細に說かれてゐる。又彼には批評或ひは隨筆集として *Partial Portraits* (1888), *Notes on Novelists, with Some Other Notes* (1914) 等があり、又評傳 *Hawthorne* (1879) は彼でなければ書けない銳い又聰明な觀察を含んでゐる。彼はパリーの文學修業時代にツルゲェネフやフローベルに交はる機會をもつたが、彼の隨筆や書簡集の中でさういふヨーロッパの一流文人の面影をさぐることも、アメリカの文學と世界文學との接觸を知る上に興味があらう。ともかくも彼は、アメリカ文壇からしばしば出るいはゆる國籍抛棄者 (expatriate) の最大なものといへるのである。

七、リアリズムの擡頭

上に見て來たやうな鍍金時代の中に過渡的な存在を營んで來た人々の間にも、吾々は勿論新らしい現實に對する觀察と批評が動きかゝつてゐることを認めるのであるが、それが一つの鮮明な特色——リアリズムの文學として認められるまでには更に他の人々の努力をまたねばならなかつた。

鍍金時代の社會批判の思想としては、國有主義（ナショナリズム）の主張の上に理想國（ユートピア）の物語を描いたエドワード・ベラミイ (Edward Bellamy, 1850–1898) の *Looking Backward* (1888) 又單一課稅（シングル・タックス）によつて土地買占めの弊害を根絶することを主張したヘンリイ・ジョージ (Henry George, 1839–1897) の評論 *Progress and Poverty* (1879) が擧げられる。又週刊雜誌 *The Nation* (1865) の創設者であるエドウィン・ロレンス・ゴドキン (Edwin Lawrence Godkin, 1831–1902) も鍍金時代の有力な批判者であつた。このやうなアメリカ社會の現實の緊迫とそれに加はつた科學乃至科學的世界觀の影響と、又ヨーロッパのリアリズム作家の感化により、アメリカの文學は徐々と確實にリアリズムの方向に成長するやうになつた。

その傾向の先驅をなすものはエドワード・エグルストン (Edward Eggleston, 1837–1902) である。彼はインディアナに生れたが、メソディストの巡回傳道師として同州東南部、オハイオ河畔の開拓者たちの生活に親しく接觸することとなり、その結果 *The Hoosier Schoolmaster* (1871), *The Circuit Rider* (1874), 以下七篇の西部小說を書いた。それはブレット・ハート式な西部文學のロマンティックな傾向を、リアリズムのコースに一轉せしめた重要なものであり、彼自身自分の小說の特色は個人を「社會研究の部分」として取扱ふにあるといつてゐる。そして「藝術家はその題材を自己の知れる生活より選ぶべきだ」といつてゐる。かういふ彼は庶民の現實の生活に主眼を置いた歷史 *History of Life in the United States* を未完

成ながら書きのこして、新しい歷史の行き方を示した。上記『ザ・フージア・スクールマスター』(オハイオの學校教師) は少年のハムリン・ガーランド (後出) に大きな感動を與へたものである。

次にジョゼフ・カークランド (Joseph Kirkland, 1830–1891) はニュー・ヨークの生れで、南北戰爭後はイリノイに居住した。彼の作品の舞臺はミシシッピの河谷であり、*Zury: the Meanest Man in Spring County* (1887) によつて同地方の農園生活を力強く現實的に描寫した。

インディアナ生れのエド・ハウ (Ed Howe, [Edgar Watson], 1853–　) は、十二の年から新聞の仕事に入つたといはれるが一八八三年 *Story of a Country Town* を自ら活字を組んで出版した。これも從來ロマンティックな粉飾を施されて來たフロンティア生活の殺伐な實相を假借なく描寫したもので、殊にその登場人物の生き生きした再現の上に作者の把握力が示されてゐる。更にこの作品は三十年後の「村落の戰」の風潮と結び合ふところに重要な意味をもつてゐる。

アメリカン・リアリズムの擡頭を力づけた大きな指導的な存在はウイリアム・ディーン・ハウェルズ (William Dean Howells, 1837–1920) である。彼もオハイオ州 (Martins Ferry) の開拓者の家に生れ、十四歲の時父の新聞の植字工となり、印刷工場を (彼の言葉によれば)「小學校とし大學として」文學修業につとめた。そして十九歲で地方の新聞の記者生活に入り、時折に詩を書いたが、一八六〇年リンカーン大統

領選擧の宣傳用傳記を書いた報酬として、翌年イタリアのヴェニスの領事に任命され、滯伊四年の間に近代イタリアの諸作家の作品に親しみ、殊にその寫實的傾向に學ぶところがあつた。アメリカに歸ると *The Nation* の記者となり、一八六六年には *The Atlantic Monthly* の副主筆となり、一八七二年主筆となつて一八八一年まで繼續、又一八八六年以後は主として *Harper's Monthly* に據り時評や小說を書いた。かくて西部生れの彼は東部の教養社會の間にその活動を營むこととなるのであるが、彼が初期の詩やスケッチ風のロマンティックな文學から寫實小說の時期に移つた時、その對象はニュー・イングランドの人間と生活であつた。そして *Their Wedding Journey* (1872) を第一作として、*A Modern Instance* (1882), *The Rise of Silas Lapham* (1885) にその寫實主義を完成して行つた。次に彼は第三期の展開をなすのであり、科學的倫理的な態度を特色とするが、その時期は *A Hazard of New Fortunes* (1889) をもつてはじまると考へることができる。この展開にはトルストイの影響が大きく働いたのであつて、彼はそのリアリズムを一層忠實なものにするとともに、貧富の問題や社會對個人の問題などを眞劍に解決しようとする態度を示すやうになつた。*The Quality of Mercy* (1892), *The Traveller from Altruria* (1894) などはその最終期のハウェルズを示す代表作である。

ハウェルズには二つの面が結び合つてゐる。すなはち彼はアメリカの傳統文化に執着する保守性をもつ

ものであり、そのリアリズムも調つた緻密な表現を目的とする十八世紀のクラシシズムの風に近いものである。かういふ彼はその對象についても、醜惡なもの深刻なものは避けようとし、そのニュー・イングランド的な環境の中から誰しも愛讀するやうな風俗小說をつくり上げようとする。このやうな保守的な面に對して、彼に進歩的な革新の面があることも否定できない。すなはち彼は不徹底ながらも新らしいリアリズムの建設者の一人として重要な活動をしたものであり、その作品のみならず、批評と又雜誌編輯者としての活動によつて反ロマンティシズムの指導者となり、ハウ、クレーン、ガーランド等若き作家を引き上げることにつくした。さうして文壇の大御所的存在となり、社會的にも尊敬を得ながら長い生涯をとぢた。彼の死んだ一九二〇年には、アメリカン・リアリズムは旣に確固たる地盤の上に立つてゐたのである。

八、隨筆家など

吾々はこゝに、これら各種の性格色彩をもつ散文作家の出現に注意するとともに、當時における隨筆家(エッセイスト)について一考したい。その主なものには Donald Grant Mitchell (1822–1908), George William Curtis (1824–92) をはじめとし、Charles Eliot Norton (1827–1908), Charles Dudley Warner (1829–1900), Hamilton Wright

Mabie (1845–1916) 等があり、女性では *Battle-Hymn of the Republic* の宗教的な詩を愛誦されてゐるJulia Ward Howe (1819–1910), *Uncle Tom's Cabin* の作者 Harriet Beecher Stowe (1812–96) が共によきエッセイなるものしてゐることを見のがすことはできない。

上記のうちカーティスは、ニュー・イングランドの嚴肅な傳統を人道主義的な軟らかな感情を以て包んでゐる所に特色があり、貧者の幸福を說いた *Prue and I* (1856) が最も愛讀されてゐるが、彼は又長く *Harper's Magazine* の Easy Chair 欄を占め、その好隨筆は同欄を國民的なものたらしめた。

カーティスの死後同欄を繼いだものがウォーナーである。彼は前述の如くマーク・トウェーンと *The Gilded Age* を共作した作家であるが、その本領はエッセイストであり、殊に自然や旅行を題材とし又文學や教養を語り社會問題にも觸れようとする。その穩かな識見とユーモアをもつた文體は多くの愛讀者と又模倣者をもつこととなつた。その主な隨筆集には *My Summer in a Garden* (1870), *Saunterings* (1872), *Backlog Studies* (1872) など、最後に *Fashions in Literature and Other Essays* (1902) がある。

次に當時の散文作家の中で吾々として注意しておきたいものにラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850–1904) がある。彼はアメリカ文學者とはいへないが一八八九年日本に來るまではアメリカにゐたのである。アイルランド系のイギリスの軍醫とギリシャ婦人との間に生れた彼は、アイルランド、フランス、

イギリスを轉々し、一八六九年にはアメリカにまで渡つて來た。そしてオハイオ州のシンシナティでジャーナリストの生活に入つたが、一八七七年には健康を損ねてニュー・オーリアンズに南下し、また一八八七年からは西インド諸島で二年間を過ごし、その間翻譯やスケッチの類をニュー・ヨークの新聞雜誌におくつて生活を支へた。當時を記念すべき作品として *Chita; a Memory of Last Island* (1889), *Two Years in the French West Indies* (1890), *Youma; the Story of a West Indian Slave* (1890) があり、既に彼の想像と色彩に富んだ文學が示されてゐる。

こゝに同じく特異な生涯と文學をもつた存在にアンブローズ・ビヤース (Ambrose Bierce, 1842–1914) がある。彼は短篇作家であり、その特色はポーに近く、好んで怪奇や恐怖を主題とし、心理解剖や想像力の鋭さ深さ、又その表現の巧さにおいて、ポーと違つた持ち味があり、或る場合にはポーを凌がうとさへしてゐる。そしていつもその蔭には人生に對する暗い絕望と虛無的な皮肉が籠つてゐる。

彼は祖先はニュー・イングランド系であるが、オハイオ州の農家に生れ、正式の教育をうけず、南北戰爭に從軍したのち、一八六六年カリフォーニアに移つて新聞記者となり、一八七二年ロンドンに行つたが、七六年には再びカリフォーニアに歸つて新聞記者となり、辛辣な筆をふるつた。そしてその間に短篇集をいくつか世におくり出すことができたが、特別な反響もなく、家庭にも不幸が重なり、絕望的な氣持から

一九一三年メキシコ革命に身を投じ、翌年には裏切り的な行爲のために革命軍の手に殺されたと傳へられたまゝ行方不明となつた。このやうに彼の生涯もその文學と同じやうな一つの神祕（ミステリー）であつたのである。彼の重要な短篇集としては *Tales of Soldiers and Civilians* (1891)——後 *In the Midst of Life* と改題——及び *Can Such Things Be?* (1894) などをあぐべきであらう。

第四章　世紀末より現在まで（一八九〇——一九四〇）

——リアリズム確立時代（機械時代）

(A) 第一次大戦以前（一八九〇——一九一四）

一、リアリズムの成長——自然主義への方向

鍍金時代の中から芽生えて來たアメリカン・リアリズムは、その初期にはなほ藝術的な穩やかな寫實、技巧的な表現に興味をもつやうなものであつたが、それが次第に嚴格な觀察、冷靜な手法、明確な觀念をもつリアリズムに成長して行つた。そこにはヨーロッパの自然主義作家（ゾラやハーディ）の影響があり、又彼ら作家の思想の背景をなす科學的な人間觀世界觀の影響が考へられるとともに、何よりもアメリカ自體にそのやうな文學を必然に成長させる地盤が生れたことに原因があるのであり、又そこから自然主義としてもアメリカ獨特の性格をもつて成長するやうになつた。

自然主義は根本において非個人主義であり、人間をその環境の一分子として冷靜に觀察するものであるが、アメリカにおいてもロマンティックな個人主義の時代は、鍍金時代につゞく必然な機械時代の進出とともに消滅する。フロンティアにおける自由土地の消滅、産業資本の進出は農業自身をも機械化させ、工場

の發達と人口の都市集中は資本家勞働者の機械的な關係を明暸にして行つた。かうして個人の獨立、意志自由の自覺は葬られる。人間を支配するものは生物學的な力か（ダーウィン）、經濟的な力であり（マルクス）、その何れも一つの陰鬱な決定論を生む。ピューリタニズムの信仰・道德も、フロンティアの樂天觀も無視されなければならぬ。こゝに從來の文學と全く性格を異にする自然主義が發生する。それは對象の分解再現に於てできる限りの冷靜な客觀的態度を持すると共に、その中心の主觀には一つの哲學（殊にペシミズムの哲學）をもつものである。そしてさういふ思想と手法を貫いてゐるものは、分析と實證に立つ近代科學の精神に外ならぬのであり、科學はかくて（かつての植民地時代のカルヴィニズム神學の如く）機械時代のアメリカを支配する。

自然主義はこのやうなアメリカの環境と精神の上に必然な成長を見せるやうになり、九〇年代から新世紀に入り、ピューリタニズムやフロンティアの精神或は慣習から、當然烈しい反擊を受けながら、大戰後に至つて（ドライサーの『アメリカの悲劇』の成功に示されるやうな）勝利の確固たる地盤に立つことができた。それは殆んど半世紀に近い鬪爭であつたのだが、その間にもそれはおのづからアメリカ文壇の主流となつて、一面には社會批判の文學を派生し、他面には反動としてロマンスの勃興を促し、更に小說の世界のみならず、詩歌や戲曲の世界にまで自然主義的色調を滲潤させるやうになつた。

けれども一層に注意すべきは、このやうな自然主義自體の變化發展の動向である。たとへばその否定的なペシミズムも、その內面に於て一層緻密で微妙な分解を見せはじめると共に、或はきびしい現實に沿うて新しい肯定的態度への展開を示さうとする。自然主義はかうして、機械時代そのものの成長と共に一層積極的な文學へと伸展して行く。そしてこの機械時代のアメリカの科學・產業・政治・社會の特異性によつて、全く獨特なアメリカン・リアリズムなるものを完成しようとするのである。

二、ガーランド——クレーン——ノリス

ハムリン・ガーランド（Hamlin Garland, 1860–1940）はリアリズムの先達ハウやカークランドやハウェルズの影響を直接にうけてゐる。そして彼はさういふ影響の中に自己の文學をつくりあげ、アメリカン・リアリズムの上に一つの重要な位置をもつこととなつた。彼はウィスコンシンの農家に生れ、中部のフロンティアを父とともに轉々したのであるが、アイオワの學校で幾分の教育をうけ、のちボストンに出てハウェルズに接し、またその圖書館に立て籠つてフランスの新らしい文學などを耽讀した。一八八七年彼は久しぶりにダコタの父の農園に歸つたが、途中シカゴにカークランドを訪問し、自己の熟知する題材を

忠實に描寫せよといふ貴重な忠告をうけた。かくて彼は再び故鄕の荒凉たる開拓地を眼前に見ながら、自分が十代の少年時代から骨身にしむほど味はされた單調と困苦の生活を眞劍にまた誠實に描寫した。かうして一八八九年までに書きためられた短篇が *Main-Traveled Roads* (1891) となつたのであり、それは西部農園の再現としてこれまでにない完成した文學だといふことができる。その後ガーランドは既にそのリアリズムの中に見えるやうな熱情のために、次第に農村救濟運動に入つて行き、ヘンリィ・ジョージの單一課稅の運動に加はり、又ポピュリズムの運動にも活動した。そしてさういふ生活のために彼の文學は次第に粗雜なものとなつてしまつたが その自傳 *A son of the Middle Border* (1917) は、彼の年少の苦闘と文學修業のよき物語であると共に、鍍金時代における中西部フロンティアの農民社會の實相を傳へる貴重な文獻である。

スティーヴン・クレーン (Stephen Crane, 1871-1900) は九十年代の彗星的出現であり、又その如く消えて行つた。しかも現在のアメリカ小說はこの奇才によつて眞實にはじまつたともいへるのである。彼はメソディスト牧師の第十四子としてニュー・ジァージイに生れ、大學を中途退學し、十六歲で新聞のリポーターとなつた。そしてその間にニュー・ヨークの貧民窟の實相を知るやうになり、そこから得た材料から一人の少女の沒落を主題とする *Maggie: A Girl of the Streets* なる小說を書いた。それは冷嚴に現實を觀

察し、それを貧民のスラングをも交へて如實に表現したもので、一八九二年自費出版したが、その結果は全くの失敗であつたに拘らず、彼はこの一冊によつてガーランドとハウエルズに知られることとなつた。そして一八九六年には *The Red Badge of Courage, an Episode of the American Civil War* を書店の手によつて出版することができた。これは南北戰爭における一青年兵士を中心として、深刻な戰線の體驗を全く想像によりながら、きはめて冷靜にしかも印象的な獨自のスタイルをもつて書いたもので、その現實的な性格において從來の戰爭文學のロマンティックな通念を覆すものであり、後の文學に影響する所すくなくないのである。

クレーンはのち、スペインと戰ふキューバに特派員として行き、乘船沈沒の厄にあつてそれを *The Open Boat* (1898) なる好短篇に書いた。そののちヨーロッパへの特派員として派遣され、一九〇〇年痼疾がおもり、ドイツに保養の旅をしてゐる間に、二十九歲の若さで客死した。彼には又詩の試みがあり、それは自由詩の形式をもつたもので屢ゝ格言風の短詩となり、エミリィ・ディキンソンの詩やイマジストの詩に共通するものをもつてゐるが、彼はハウエルズの招宴でディキンソンの詩の朗讀をはじめて聞き激しい感動をうけたことがあるのである。彼の詩の特色は *The Black Riders* (1895), *War Is Kind* (1899) の二卷につくされてゐる。

次にフランク・ノリス (Frank Norris, 1870–1902) はシカゴに生れたが、十五歳の時サン・フランシスコに移り、三年間パリーで繪畫の修業をし、その間にフランスの自然主義殊にゾラの文學に心醉し、歸米してカリフォーニア大學とハーヴァードに學び、繪を捨てゝ文筆を志すやうになつた。一八九五年卒業するやサン・フランシスコで新聞記者となり、ボアー戰爭で南アフリカに通信員として派遣された時、風土病の熱病にかゝり、ついに回復することができず、六年後三十二歳でサン・フランシスコで世を去つた。

彼の最初の作品は *McTeague* (1899) であり、一人の野性的な齒科醫を主人公として、彼が苛酷な環境の壓迫のうちに狂はしい行動をつゞけながら次第に破滅する徑路を描いてゐる。そこにはゾラの影響が著しい。それと同じ傾向の第二作に *Vandover and the Brute* (1914發行) がある。しかし彼はこのやうな生存競爭における個人の努力を重視する自然主義の立場から、一層ひろい人類的な理想をもつ社會的抗議の文學に展開して行つた。そしてそこに生み出したものが *The Octopus, a Story of California* (1901) 及び *The Pit, a Story of Chicago* (1903) である。

この二作は三部作「小麥の敍事詩」("Epic of the Wheat") として計畫されたもので、第一部は小麥栽培者と鐵道トラスト (すなはち貪慾の手をのばす章魚(オクトパス)) との鬪爭を取扱ひ、第二作はシカゴの小麥取引場(ピット)の投機商人の亂鬪、それが小麥の生産配給に如何に影響するかを主題とし、そして未着手の第三部 *The Wolf, a Story of Europe* ではヨーロッパ大陸の饑饉救濟とアメリカの小麥生産との關聯を描かうとするものであつた。これらの作品は作者の人道的な熱情のために宣傳的な色彩が粗雜にあらはれてゐる部分もあるが、大きな規模と深刻さに於いて、まことに「敍事詩」的ともいへるのであり、資本主義進出の惹きおこした社會惡の文學としてのちのアメリカの社會的文學に對しても重要な意味をもつものである。ノリスにはなほこのほかに數編の小說・短篇・エッセイがある。

三、ロマンスの流れ

南北戰爭以後のアメリカ文學がリアリズムの線に沿つて次第に成熟して來た徑路は上に見る如くであるが、それに對してその自然主義をあまりに單調荒涼であるとして却つて現實の粉飾を求め、或ひは過去に想像を走らすやうなロマンスの要求が高まつて來た。それにはウォルター・スコットやR・L・スティーヴンソンなどの影響があつたのであるが、アメリカ自身においてその歷史と現社會の中から特殊のアメリカ的な題材を提供する强みがあつたことも見逃せない。(例へば成功せる實業家の讚美を主旨とした「實業小說(ロマンス・オブ・ビジネス)」と稱すべきタイプのものが生れた。)かうして一八九〇年から一九〇五年に至る期間にアメリ

カ文壇には一つの盛んなロマンスの開花が見られるに至つたのであるが、この期間にキューバ問題つゞいて米西戰爭がおこり、國民的愛國的感情の昂揚を感じたことが、ロマンティックな空想を一層に煽り立てたと考へられる。そしてこのロマンスの隆盛はこの後幾年もたゝぬうちに急激な衰退を見せるのである。

ウィンストン・チャーチル (Winston Churchill, 1871-　) はこのロマンス作家中の最も大きな名である。彼は西部のセント・ルイスに生れ、東部で教育をうけ一八九四年海軍兵學校を卒業したが、すぐ退役して文筆の道に入つた。彼の代表作は三部作 *Richard Carvel* (1899), *The Crisis* (1901), *The Crossing* (1904) である。第一部はメリーランドを舞臺として獨立戰爭における愛國派のヒーローの純情と勝利を描けるもの、第二作は南北戰爭に移り、南部の貴族精神を代表する女性と北部の清教精神を代表する男性との對照を扱ひ、リンカーン、グラントなどの人物も登場する。第三作は西部フロンティアへの移民の進出を題材とし、インディアンとの鬪爭やさまざまな冒險が記錄される。

これらのロマンス（殊に第一作）は米西戰爭の國民的興奮とそれに引きつゞく國民的な誇りの高まりに際會して非常な歡迎をうけたが、一九〇五年からのロマンス熱の衰退はチャーチルをして他の世界——社會的小說の傾向へ向はしめることとなつた。そして地方政界のボスを扱つた *Coniston* (1906), 鐵道企業の內面を描いた *Mr. Crewe's Career* (1908) 以下、暴露的な作品を次々に發表した。

チャーチルと異つて時代と風潮に動かされずロマンス作家としての仕事をつゞけたものはメリー・ジョンストン (Mary Johnston, 1870-1936) である。彼女はヴァージニアの南部政府の官吏の家に生れ、身體が弱くて家庭教育で育てられたが、父の死後自活の道として作家の仕事についた。彼女の舞臺は主として傳統のヴァージニアいはゆるオールド・ドミニオンであり、その多數の作品のうち最も有名なものは *To Have and to Hold* (1900) である。それは植民時代の初期イギリス宮廷の女官が好色の貴族の手を逃れてヴァージニアに渡來し、頑健な移住民の結婚で厄を免かれる物語であり、非常な賣行きを得たものである。又 *The Long Roll* (1911), *Cease Firing* (1912) などは南北戰爭に取材したもので、彼女のヴァージニア人としての感情が滲透して、この歷史上の悲劇を一層印象深いものにしてゐる。

このロマンスの流れを觀察するについて時代は少し遡るけれどもフランシス・マリオン・クロフォード (Francis Marion Crawford, 1854-1909) の存在に注意したい。彼はイタリアで生れ、生涯の大部分をその地で過したが、彼の取材も思想も著しくコスモポリタン的な傾向を帶びてゐる。その出世作はペルシアの寶石商人を主人公とする *Mr. Isaacs* (1882) であり、作の範圍は世界の各國又各時代に擴つてゐるが、中でも重要なものはローマとその附近を舞臺とする十五篇の小說であり、殊に *Saracinesca* (1887), *Sant' Ilario* (1889), *Don Orsino* (1892), *Corleone* (1896) 等が傑出してゐる。彼の作品はいづれも多樣な場面人物と巧妙

な脚色と熟練な筆力によつて、小說は娛樂なりとする彼の主張を生かせたもので、かういふ彼は小說のジャーナリズムへの接近を促す一つの動力であつたともいへるのである。

四、社會批判の文學

今世紀に入つて幾干もなくロマンスの流れが衰退して行つたことは、社會批判の文學の勃興に關聯する。すなはち一九〇三年頃から世界大戰の末に至るまで後者はアメリカ文壇の大きな勢力として持續した。リアリズムの文學が一面純正寫實の自然主義として成長するとともに、對象の缺點や醜惡を問題とし、それを暴露し改革しようとする態度に出ることは自然な展開であつて、それはまた一般讀者にとつてロマンスにも劣らない煽情的な效果をもち得るのである。かうして吾々はむしろ大衆文學としての社會文學が發生する傾向を見る。いはゆる問題小說はその一つのタイプであり、南北戰爭後のアメリカ文學でその先驅をなしたものはマーク・トウェーンとウォーナー合作のかの『鍍金時代』である。またエドワード・ベラミィの *Looking Backward, 2000–1887* も問題小說の一種と考へられるのであり、勞資の階級鬪爭の問題が一つの産業革命の夢想の中に解答せられてゐる。この作品が發行後二年間に三十五萬部以上の賣行きを

示したことも、このやうな文學の大衆性を證するものである。

このやうな鍍金時代から引きつゞくアメリカ文學の社會的關心は一九〇〇年に入つてシオドア・ルーズヴェルト (Theodore Roosevelt, 大統領 1901–9) の時代となり、政治と經濟の各方面にわたつて民主主義的な改革が實行せられる時期になると、一層濃厚な大衆性をもつて發展するに至つた。そして資本家と政黨の結托やトラストの橫暴やさういふものに向つて文學の鋒先が向つて行つた。この傾向の文學をルーズヴェルト自身の用語を轉用して「下肥掻き」(muck-raker) の文學と呼ぶ。

この傾向の主導者となつたものはマックルア (S.S. McClure) で、彼は十五種の雜誌を經營し、腕利きの記者を各地に派遣してその暴露的な報道を掲載して、讀者の非常な歡迎をうけた。かくてマック・レーカーとして活躍する多くの文學者があらはれるやうになつたが、その中で中心的な存在として最も長く活動をつゞけ、今日なほ文壇に存在を保つてゐるものはアプトン・シンクレア (Upton Sinclair, 1878–　) である。

シンクレアはメリイランド州のボルティモアで生れたが、十歳の時ニュー・ヨークに移住した。コロンビア大學で法律を學んだのち生活のために十セント小說の作者となつたが、次第に社會主義の傾向をおびるやうになり、一九〇六年シカゴ屠殺場の調査團に加つた時の材料によつて、その事業の不正な非人道的

な内面を暴露した作品 *The Jungle* (1906) を發表した。それが大衆に與へたショックは非常なものがあり、大統領は調査委員を任命し、その結果純良食品法案が議會で可決せられた。そして『ジャングル』は國内の盛んな賣行きのみならず、數年のうちに世界各國の言葉に飜譯されるに至つた。そのセンセイションはマック・レーキング運動の頂點を示したものと考へることができる。シンクレアは單純明確な社會理想と熱意とをもち、しかもきはめて巧妙で大衆の興味を捉へる技巧をもつて、その作品の材料を集め、これを劇的な脚色にまで構成する。かうして彼はアメリカ社會の各方面にわたつてその作品の舞臺を擴げ、たとへば *The Money-Changer* (1908) では金融の中心ウォール・ストリートの眞相、*King Coal* (1917) ではコロラド炭鑛の爭議、*Jimmie Higgins* (1919) と *100%* (1920) では世界大戰當時のアメリカ社會の狂熱ぶりを描き、更に *Boston* (1928) ではかの有名なサッコ・ヴァンゼッチ (Sacco-Vanzetti) 死刑事件を主題に深刻な作品をつくりあげてゐる。なほ社會評論と見るべきものに資本主義と既成宗教の握手を指摘した *The Profits of Religion* (1918) 又資本主義と新聞事業の關係をあばいた *The Brass Check* (1919) などがある。

シンクレアはかういふ作家的活動の間に、ハドソン河畔にインテリ階級の新らしき村 (Hericon Hall) を建設したり、各種の社會的團體の指導者となり、選擧に立候補したりした。そして彼の活動は今日なほつゞき、作品としては最近第一次大戰を舞臺とする *World's End* (1940) 次に續篇 *Between Two World's* (1941) を發表した。たゞこれらには昔日の社會批判はなく、むしろジャーナリスティックな興味の濃いロマンスである。

次にそのやうな露骨な問題小說の立場でなく、今少し精神的な思想的な社會批判乃至傳統批判の文學を吾々はもつ。その一例はロバート・ヘリック (Robert Herrick, 1868-1938) であり、彼の生地はマサチューセツのケンブリッヂで、ピューリタンの家筋であつたが、一八九〇年ハーヴァードを卒業、一八九三年新設のシカゴ大學に英文科の敎授として招かれ、一九二三年まで在任することとなつた。當時「世紀末」のシカゴは、世界大博覽會（一八九三）とプルマン汽車會社同盟罷業（一八九四）に象徵されるやうな繁榮と不安の新都であつた。ヘリックはそこから受ける印象をピューリタン的な良心と科學的知性をもつて解剖しつゝ、ヨーロッパ文學から學んだリアリズムの手法をもつて文學的作品に構成した。殊にシカゴ的な實業家の成功慾と人格價値との衝突、又粗雜な西部社會における女性の立場、新しい女性の自覺――そのやうな問題を彼は取上げた。第一の問題には *The Memoirs of an American Citizen* (1905) があり、第二の問題には *Together* (1908) がある。

吾々は次にこの時代の社會批判の傾向が當時の大衆作家として最も目覺しい存在であつたジャック・ロンドン (Jack London [John Griffith London], 1876-1916) と結びついてゐることに注意しなければなら

ぬ。彼は西部フロンティアの漂泊的な移住民の末としてサン・フランシスコに生れたが、家貧しく十六歳の時には漁場荒しの牡蠣盗人の首領におされた。その後水夫・勞働者・浮浪人・クロンダイクの金鑛探しなど變化きはまりない生活をおくり、その間に短期ながらカリフォーニア大學にも在學した。彼が生活の行詰りから試みた文藝作品のうち第六番目の *The Call of the Wild* (1903) は彼の代表作であり、彼の地歩を確立したものである。それはアラスカの氷原に橇引きをしてゐる犬が、突然野性に目覺めて狼群の首領になるといふ物語であるが、そこには迫眞の力強い描寫と新鮮な詩情があり、ロマンティックの味ひとともに、環境と生存本能の關係を主題として捕へた所に自然主義文學としての意義をもつてゐる。その後の彼は讀書界の流行兒となり、小說十九短篇百五十二を書きのこした。それには勿論多くの粗雜な作品が含まれてゐるが、中で *White Fang* (1907) は犬と狼との雜種の野獸が飼犬になる徑路を扱つたもので『野性の呼び聲』と同型の佳作であり、又 *The Sea Wolf* (1904) はニイチェ風な超人的意志的な船長を主人公とする強烈な作品である。彼はニイチェ、マルクス、ダーウィンを讀み、また自己の體驗からして無產者への直接な共感をもつものであり、現代の社會惡に對する批判や革命の主張を小說 *The War of the Classes* (1905), *The Iron Heel* (1908), *The Revolution* (1910) に書きあらはした。又その自傳的小說 *Martin Eden* (1909), *John Barleycorn* (1913) の强烈な現實性も注目すべきである。彼はあまりに熱情的非知性的であつ

たといへるが、自然主義作家或はプロレタリア作家としてなほ伸ぶべき素質をもちながら、多作の誘惑に精力を消費して早く逝つたのは遺憾としなければならぬ。

アメリカの金錢本位の社會に對する批判攻擊の文學はなほ多くの有能な作家をもつてゐるが、ウィリアム・アレン・ホワイト (William Allen White, 1868–　) はその一人で、*A Certain Young Man* (1909), *The Heart of a Fool* (1918) によつて個人と社會、都市と村落等の問題に觸れつゝ堅實な社會批判を試みてゐる。彼は長くカンサス州の *Emporia Gazette* の主筆として活動し、一流のジャーナリスト乃至公人として尊敬されてゐる。

更にこれらの作家のうち殊に注目すべきものは *The Harbor* (1915) の作者としてのアーネスト・プール (Ernest Poole, 1880–　) であらう。それは當時の讀書界の異常な歡迎をうけたのであるが、彼は將來建設さるべきニュー・ヨークの港の一種の理想國物語をこゝに書き、勞働者・技術家・資本家の協力によつて人類の眞實に幸福な社會が生るべきことを主張してゐる。彼はシカゴに生れ、プリンストン卒業後ニュー・ヨークの大學セツルメントに住込んでその社會狀態を調査し、一九〇六年にはシンクレアの小說 *Jungle* の材料を集めることに助力した。ヨーロッパ大戰では戰時通信員として活動したのち革命後のロシアに住んでその社會的經濟的改革の進行を熟視する機會をもつことができた。彼は次の作 *His Family*

(1917) によつてピューリッツァ賞をうけた。大戰後はニューヨークに住み、一九三〇年代に入つても數篇の小説及び隨筆を發表してゐる。しかし彼の文學的功績は『港』の一巻につきたといふべきであらう。

五、大衆文學

吾々はこゝに大體前世紀末から世界大戰までの散文文學の動向を見終つたのであるが、その動向には三つの流れが併行する。第一はいはゆるベスト・セラーズの文學で商業的な利益を目的とするもの、第二はいはゆる問題小説の類、第三はノリス、クレーンの傳統をうけて成長するリアリズムの一派である。そしてそれらの流れは、當然のことながらしばしば交錯するのであつて、それはアメリカの國民性や社會生活の上から一層當然な現象となるのである。

ブース・ターキントン (Booth Tarkington, 1869–1946) はベスト・セラーズの作家であるが、又リアリズムの動向に對しても鋭い關心をもつてゐる。彼はインディアナ州のインディアナポリスに生れ、近くに住む詩人ライリィの感化をうけ、プリンストン大學に學んだのち、故郷の町に定住した。彼は西部人ながら父は富裕な辯護士であり、その思想や作風も西部の文學者とは甚だ異つてゐる。彼の出世作は

The Gentleman from Indiana (1899) であるが、インディアナ出の青年が新聞事業に入つて奮鬪成功する物語で、その背景にはインディアナの美しい田園情緒があり、インディアナの先輩作家エグルストンの影響が感ぜられる。次の作はイギリスの十八世紀に時代をとつたロマンス *Monsieur Beaucaire* (1900) で非常な評判となり、のちに戲曲化された。その後引きつゞき通俗物語に健筆をふるつたが、一九一三年の *The Flirt* に至つて著しい轉向を示した。それは當時一層活潑になつて來たリアリズムの流れに歩調を合はさんとしたものであり、更にその傾向は一九一五年の *The Turmoil* をもつて一層明瞭となる。すなはち彼はそこに産業革新と社會不安の混亂の作家として立ち、二十年代の中頃までその態度をつゞけ、二十年代の末期から三十年代にかけてロマンス勃興の氣勢を見ては再びロマンス作家の立場に歸らうとする態度を示した。そして三十年代に入つても長篇・短篇・戲曲等を次々に發表して來てゐるが、彼は結局において大衆うけの作家であり、その社會觀や文化批判にも常識的な觀念がつきまとつてゐる。その中で注目すべき作品としては前記のほか *Penrod* (1914), *Alice Adams* (1921) 等がある。

次に吾々はなほ一人鮮明な大衆作家であり、しかもほかのどのアメリカ作家とも結びつけることに苦しむ特異な作家をもつ。それはオー・ヘンリィ (O. Henry, 本名 William Sydney Porter, 1862–1910) にほかならない。彼はノース・カロライナに生れ、諸方を放浪してテキサスにゐた時銀行の金を費ひ込んで南ア

メリカに逃亡し、妻の重病を聞いて歸郷、投獄せられ（一八九八年）、その獄中生活三年三ケ月の間にはじめて短篇小説を書いた。そして一九〇二年以後はニユー・ヨークに出て、その特殊な文學によつて讀者を掴みながら *World* 紙をはじめ新聞雜誌の依頼のまゝに多忙きはまる文筆生活をおくつた。そして濫作と飲酒のうちに次第に健康を失ひ、文人としてはなほ全盛のうちに四十八歳で急死した。

彼の作品は主として短篇小説であり、總數六百篇以上と算へられるが、その背景は西部地方・南アメリカ及びニユー・ヨーク市に大別される。はじめはブレット・ハート、のちにはモーパッサンの影響をうけたやうである。その作品の特色は笑劇的なユーモアと讀者をあつと驚かす鋭い機智にあり、又それをもつて讀者の興味を捉へるきびきびした筆力にある。かういふ彼にあつては人物はすべて戯畫（カリカテユア）であり、彼の文學は從來のアメリカ短篇小説を一つの著しく偏つた方向に發達させたといへる。さうしてその影響は彼の死後においても著しく、短篇の題材よりもその取扱ひの手法に苦心し、そこに尖鋭な效果をあげようとする傾向が目立つてきた。彼の作品集は *Cabbages and Kings* (1904) 以後 *Sixes and Sevens* (1911), *Rolling Stones* (1913) まで十三篇に上つてゐる。

六、ドライサー

アメリカン・リアリズムの成長において、その最も大きな礎石となつたものはシオドア・ドライサー（Theodore Dreiser, 1871–1945）である。彼はクレーンやノリスが若い年で世を去つて行つた頃既にその自然主義の完成のために着實な努力をしてゐたのである。

彼はインディアナ州の Terre Haute といふ町で生れたが、父はドイツから流れて來た織物工で、その貧しい家庭の十三人の子の末子として生れた彼は、幼少から饑えと寒さのどん底の經驗をしなければならなかつた。それでも恩師の好意でしばらくインディアナ大學に學ぶことができ、その後は新聞記者となつてシカゴ・セントルイス・ピッツバーグ、最後にはニユー・ヨークに出たが、この四年間の記者稼業のうちに、彼は人生を見る眼とリポーター的な文體を養ひ、ピッツバークの圖書館ではゾラやバルザックの寫實文學を知るやうになつた。又スペンサーやハクスリィを熟讀して、その不可知論進化論に感銘し、人生を弱肉强食の戰場と見、世界を動かすものはたゞ機械的な物理化學的な力だと信ずるやうになつた。そしてそのやうな決定論とペシミズムに立つて、アメリカ社會の現實をリポートしようとするところに、彼の自

然主義は成長した。その第一作は *Sister Carrie* で一九〇〇年發表されたが、それはシカゴからニューヨークの都市生活を背景に一人の田舍生れの女性とそれに配する男性の沒落と彼女の幸福な運命を取扱つたものであるが、有夫姦を題材にしてゐるといふ理由で販賣を中止され、第二作 *Jennie Gerhardt* を出版するまで十年の雌伏をしなければならなかつた。この可憐な女性を中心とする物語も保守社會の批難から免れなかつたが、しかも彼は更に作の世界を廣め、*The Financier* (1912), *The Titan* (1914) を公にした。それは實在の實業家をモデルとした連作で、南北戰爭後の混亂期に富と權力を追求する人間の野心と盛衰を描いたものである。更に一九一五年には尨大な長編 *The "Genius"* を發表し、畫家である主人公の一生の波瀾を世紀末から二十世紀初のアメリカ文明社會の斷面の上に描き出したが、これは風俗壞亂の廉で惡風禁止協會の激しい攻擊をうけた。批評家H・L・メンケンが極力彼の辯護につとめたのはこの時期のことであるが、しかもこのやうな作家としての精進と鬪爭の間にドライサーの存在は次第に大きくなつて行つた。そして大戰後一九二五年に至り *The American Tragedy* を發表して、讀書界と批評界を完全に征服することとなつた。これはカンサス・シティの嚴格な傳道者に生れた教養の乏しい青年が、シカゴの工場で一人の女工と親しみ、他方富豪の令孃と結婚の望みができて來たために、旣に懷妊してゐる女工を殺す。この悲劇にはアメリカの生活殊に大戰後の好況時代において、どのやうに物質の魅惑が作用してゐたか、

又アメリカの一部の家庭で宗教的な偏執と經濟的困難がどのやうに人間的な感情或ひは教養を歪めてゐるか、さういふ問題について生き生きした照明を與へるものであり、ドライサーの代表作であるとともに、アメリカ文學史の上にも大きく記さるべき作品であらう。

ドライサーには前記のほかに短篇集 *Free and Other Stories* (1918), *Twelve Men* (1919), *A Gallery of Women* (1929)、エッセイ集 *Hey Rub-A-Dub-Dub* (1920)、戲曲集 *Plays of the Natural and Supernatural* (1918) 等がある。又自傳として *A Book about Myself* (1922) 及び *Dawn* (1931) も甚だ重要である。彼は一九二七年ソヴェート・ロシヤに招かれ、同國の社會狀態を視察し、翌年歸米後 *Dreiser Looks at Russia* を發表したが、一九二九年の大恐慌に引きつゞくアメリカの社會不安の中に、彼の思想が次第に左翼的となつて來たことは注意すべき事實である。一九三一年にはケンタッキー州の炭鑛爭議の實地調査團を指揮し、また同年、社會批判を述べた *Tragic America* なる評論を出版した。たゞ彼の純粹な文學的活動はこのやうな社會的關心の增大とともに却つて衰退し、三十年代に入つては殆んど文學的作品として記錄すべきものを發表してゐない。かうして彼ののちに來る作家たちが自然主義的な靜觀の文學から革新の思想と行動に裏づけられたリアリズムの文學に進展して來た環境の中にあつて、彼は旣に過去の文學形式の大家として殘存する形となつた。たゞ彼は不器用で鈍重ともいふべき性格を、その文體にまでもあらはしてゐるが、

それだけに重々しい巨匠の印象があり、最近のアメリカ文學を代表する一番大きな人物として、又アメリカン・リアリズムを堅固な形にまで成長させた功績者として記録さるべきであらう。彼は第二次世界大戰が終つた一九四六年の十二月二十九日、この記念すべき年の暮れに心臓病で逝去した。そして遺作として長篇 *The Bulwark* をのこした。

七、詩壇——一八九〇—一九一二の過渡期

南北戰爭以後のアメリカ詩壇は甘い感情と細かい表現をつかつたいはゆる「詩的」な作品が大勢を支配してゐた。ホイットマンやディキンソンの影響も目立つほどの革新を引きおこさなかつた。讀者は小說の世界では現實的な或ひは社會的な問題の取扱ひに興味を見せながら、詩にあつては專ら慰安的な或ひは平凡な道德的な詩を喜んだ。このやうな時期にあつて少數ながら眞實の詩への努力を示したものには次のやうな數人がある。

リチャード・ハーヴィ (Richard Hovey, 1864–1900) はイリノイ州に生れたが、東部に移つてダートマス・カレッヂに學び、のち神學校に入り修道院風な祭司の生活をしたが、やがてヨーロッパに遊んでメーテ

ルリンクの夢幻的な文學に興味をもち、それを飜譯してアメリカに紹介した。その後の彼は俳優・飜譯業者・戲曲家・講演者・詩人と變化きはまりない生活をおくり、たまたまカナダ生れの抒情詩人ブリッス・カーメン (Bliss Carman, 1861–1929) と知り、共著で三卷の詩集 *Songs from Vagabondia* (1894, 1896, 1900) を出版した。彼らの詩はともに新鮮で自由で快樂的であるが、ハーヴィの作で有名なものは *Spring* と題する青春の悅びをたゝへた抒情詩である。また *The Sea-Gipsy* の如きは彼の放浪性を最も效果的に現してゐる。しかもそのやうな彼でありながら、米西戰爭には愛國的な信念をもつた *Unmanifest Destiny* といふ熱烈な詩を公にし、また彼が母校のためにつくつた *Men of Dartmouth* はアメリカの校歌のうち最も傑れたものと稱せられてゐる。彼にはなほ一層嚴肅な努力の作品としてアーサー傳說を主題とする劇詩の連作 *Launcelot and Guenevere* があり、そのうち三部を書いただけで三十六歲で早世した。

ウイリアム・ヴォーン・ムーディ (William Vaughn Moody, 1869–1910) もインディアナ州の生れであるが、苦學しながらハーヴァードを一八九三年に卒業、その間にヨーロッパに遊び、一八九五年にはシカゴ大學英文科の助敎授として招かれ、一九〇二年まで在任、その後は文筆に專心した。

彼の詩人として最も大きな努力は、神を主題とするミルトン風の三部作の詩劇 *The Fire-Bringer* (1904), *The Masque of Judgment* (1900), *The Death of Eve* であり、最後の篇は未完成に終つた。又彼はアリゾナ

地方や西部地方を廣く遊歷したが、その結果として戲曲 *The Great Divide*（大分水嶺）を書き、一九〇六年ニュー・ヨークで上演されて成功を博した。これはニュー・イングランドの傳統に育つた少女とアリゾナの野性的な開拓者との偶然な結婚事件を主題とし、ピューリタニズムとフロンティア精神との對照・接觸を描いたものである。彼にはなほ *The Faith Healer* (1909) なる好戲曲がある。

けれどもムーディの傑れた文學はその抒情詩にあることは疑はれないところであつて、彼はその表現に古典的な嚴格な苦心を注ぐとともに、新らしい時代の動きや國家社會の問題に對して誠實に熱情をもやし、自己の意見をはゞからず吐露する若々しさがあつた。かくて彼は *The Quarry* では支那を分割せんとする列國の野心を責め、逆に *On a Soldier Fallen in the Philippines* では米西戰爭におけるアメリカの態度に警告を發した。又 *Gloucester Moors* では資本家と勞働者の奴隷關係を荒野の背景の土に象徵し、*Menageries* や *The Brute* では人間の進化の將來や、機械と人間の交渉を主題とした。彼には人間の無智や墮落を憂ふるピューリタン的な嚴肅さがあるとともに、その進歩と努力を期待する熱情があつた。彼はこの過渡期のアメリカ詩壇の指導者的な存在であつたが、その力量を出しきることができず、四十一歳で逝去した。

エドウィン・マーカム（Edwin Markham, 1852–1936）はオレゴンの開拓者の家に生れ、早く父と別れ母とともに中部カリフォーニアに移り、農牧の生活のうちに成人した。そして北部カリフォーニアの田舍

町で小學教師をつとめてゐるうちに、たまたまミレーの有名な『鍬をもつ男』の繪を見て深い感動をうけ、*The Man with the Hoe* と題する詩を書き一八九九年完成、翌年一月十五日サン・フランシスコの *Examiner* 紙に發表された。それはフランスの農民の姿をすべての勞働者の姿と見、働くものの貧苦と社會の不正を慨したものであり、たちまち世間の大きな反響を呼ぶこととなつた。これが彼を記念する唯一最上の詩であり、たゞこれに近いものとしてのちに *Lincoln, the Man of the People* なる佳作がある。彼は一九〇一年東部に移り詩作と講演を業とし、ついにはニュー・ヨーク州のスタテン・アイランド（Staten Island）に家を構へ、老齡に至るまで元氣な活動をつゞけた。

(B) 第一次大戰以後（一九一四——一九四〇）

(イ) 小説の世界

(I) 二〇年代（一九一四——一九三〇）

一、リアリズムの變質

今世紀のはじめから世界大戰勃發の頃にかけて、社會的抗議の文學の盛んであつたことは上に見た如くであるが、その傾向は大戰をくぐることによつて大きな變化を見せることとなつた。すなはちアメリカの參戰は必然的に愛國主義的な國内統制を必要とするやうになり、すべての自由な批判や主張を壓迫するやうになつたこと。又戰爭の深刻な體驗は一種の虛無的な幻滅の氣分をおこして、文學者に積極的な社會關心を失はしめたこと。次に戰後におけるアメリカの經濟界の狀態は、一九二一年の小恐慌をのぞくほかいはゆる「繁榮（プロスペリティ）」の連續で、富と生產の躍進はあらゆる社會層をうるほし、勞資の對立意識を緩和し、農村にまで滿足な氣分を擴がしめたこと——すべてこのやうな現象は過激な社會批判の思想および文學をむしろ時代おくれのものとしてしまつた。そして結局アメリカの小說界にその主流として持續されたものはドライサーによつて確立された自然主義の傾向であつて、ドライサーの中期の代表作 *The "Genius"* が壓迫をうけたのは一九一五年であり、同年は又プールの *The Harbor* の出版、又のちに說くマスターズの *Spoon River Anthology* がセンセイションをおこした年でもある。すなはちこの一九一五年あたりを境界線として、アメリカ文學にはリアリズムの動向が支配的なものになつて來たと見ることができる。

そしてこの傾向は戰後のあらゆる複雜な現象の取扱ひにまで延長されてくるのだが、たゞそこで文學が對象として注目したものは、外面的な人間の生活や社會現象でなく、その內面的な方向である。すなはちその關心は政治や經濟でなく、一層本質的な文化と精神生活の問題にある。そして、物理的な自然主義の立場から心理的或ひは病理的な新らしいリアリズムへ移つて行く。このリアリズムは戰後の富の增進に伴ふ道德の頹廢や快樂主義の橫行の中にあつて、個人の生活と社會組織の動搖を觀察解剖するのに最も適切な立場をあたへるものであつた。

このやうな檢討の對象となるものは、結局に於てアメリカの傳統であり、ピューリタニズムに規定されるいはゆる「上品な傳統（ジェンティール・トラディション）」の如きは最も嚴しい批判をうけるものとなつた。そして東部に對する「西部の叛逆」としてその動きが現はれてきた。しかも西部自身はまた、西部に傳はるフロンティア精神とそこに

もまた混在するピューリタン精神の遺産を、自ら反省し檢討する態度をとつた。かうして、大戰後のアメリカ文學の中心は、ボストン、ニュー・ヨークからシカゴへ移動することとなる。少くともこの中西部にアメリカの戰後の自己檢討の最も烈しい渦巻がある。ミシガン湖畔の平原に忽然ともりあがり刻々に成熟膨脹して行く冗雜活潑な新都こそ、新しいアメリカのリアリズムの性格を象徴するといへるのである。

けれどもかういふリアリズムの主流とともに非現實的なロマンスの文學が存續したことは勿論であつて、殊に一九二七年あたりから著しい流行となり、三十年代にまで發展して行く。同時に又社會的抗議の文學も全然消滅する筈はなく、戰後の狂躁的な社會の中に局部的潛行的に存在をつゞけてゐたのであつて、一九二九年の大恐慌以後はその傾向がリアリズムの本流とまざり合ひながら、三十年代の文壇を支配するやうになるのである。たゞこゝに戰後のアメリカ文學として最も重大なことは、それが自己を充分に獨立なものとして自覺するに至つたことである。この大戰を最後の解決に導いたものはアメリカの力だともいへるのであり、その上に戰後のアメリカへの富の集中、政治的經濟的ヘゲモニィがイギリスからアメリカへ移つたことは、アメリカ人をしてその國家的隆盛と獨立の立場を充分に自覺せしめたのであるが、文學の世界にあつてもアメリカ人乃至アメリカに流れ込んだ外國人は、ヨーロッパ人から獨立してものを考へ、ものをいふことができるといふ自信をもつやうになつた。その上にアメリカ國内における富の普及は讀者層

を全國に擴げ、アメリカに出版された文學書が、國内の需要だけで充分な利益をあげ得るやうになり、そこに知性的にも經濟的にも自給自足の態勢をとることができるやうになつた。かうしてアメリカ文學は從來のヨーロッパ文學への模倣或ひは服從の態度を棄て、長い間の植民地的な自卑感を脱して、自由にそして健康に自己の本質を伸ばすこととなつた。實際眞實のアメリカ文學の自立は世界大戰によつてはじまつたといつても過言でないのである。

二、ルイス

シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis, 1885–　) はミネソタ州の小村ソーク・センター (Sauk Center) に生れたが、父はニュー・イングランド血統の醫師であつた。同地のハイ・スクールを出て一九〇三年イェール大學に入り、一九〇五年には學業に倦いてアプトン・シンクレアのつくつた新らしき村ヘリコン・ホールに住込みなぞしながら、一九〇八年やうやくイェールを卒業した。その後は雜多な文筆の仕事をしながら合衆國の各地に放浪したが、一九一四年第一作 *Our Mr. Wrenn* を出版、一九二〇年に至り *Main Street* を出し俄然大きな評判を得、こゝにルイスの生涯もその文學の性格も決定されることとなつた。

『本町通り』は Carol Milford といふ高等教育をうけた新らしい型の女性を主人公とするが、彼女は醫師

と結婚しミネソタの田舍町の本町通りに住み、田舍町特有の無趣味低級な風習や氣風を自己の理想にまで高めようと努力するが、結局失敗してその因襲的な空氣の中に妥協することとなる。次にルイスは *Babbitt* (1922) なる小說でバビットといふ名をもつ實業家が中西部の小都會で一度は青年のやうな社會改革の理想によつて行動しようとしながら、ついにはやはり周圍の迫害に恐れて平凡な生活にかへつて行く徑路を書いてゐる。この作は前作に勝るほどの反響を呼び、「バビット」なる名前は一九〇〇年代におけるそのやうな中產階級のタイプを示す名稱として一般に行はれるに至つた。これらの作品に示されたルイスの主題はロマンティックな夢を抱く個人が社會の現實に征服されるといふことであるが、それはまた單なる社會でなくアメリカ中部の田舍町であり、そこにフロンティア時代から停滯してゐる傳統・風習・制度に對し大戰後の新らしいアメリカの知性人が反省檢討を試みる必要を感ずるやうになつた、さういふ風潮を捉へてルイスは最も尖鋭にそれを文學の形に表現した。そこに彼のこれらの作品のまきおこした反響の大きな原因があるのである。

彼の次の作 *Arrowsmith* (1925) は細菌學者の科學的熱情を取り上げて、それが金錢萬能のアメリカ社會においてどのやうな苦難を經驗するかを描いてゐる。そしてこの主人公はついに自己の理想を貫いて、周圍の束縛を振り切りながら實驗室にこもることになるのであるが、その經過には學者や政治家や實業家や

或は社交的婦人の內面を解剖し、アメリカの文化に對する諷刺と鋭い批判が展開されてゐる。

ルイスの作品はその後ほとんど毎年に發表されてゐるが、中で *Elmer Gantry* (1927) は職業的牧師の僞善を暴露した痛烈な作品であり、また *Dodsworth* (1929) はバビットよりも積極的な現代的タイプの實業家を主人公とし、成功失敗再起、その激しい動搖の中における不貞な妻との交渉、さういふ事業と愛(人間的生活)の混亂のうちにやはり現代のアメリカの重要な一斷面を示してゐる。又三十年代の作品の中では *Ann Vickers* (1933) は社會改良家たる女主人公の公の生活と家庭生活の矛盾を問題としてゐるが、そこにはやはりアメリカの社會事業の暴露がある。又 *The Prodigal Parents* (1938) に至つてはルイスはむしろかつて彼の攻擊したバビットの側に立つて極左の青年層を諷刺してゐる。

ルイスの特色は人道的社會主義的な理想をもち、いつも活潑に反射する熱情をもち、しかもその表現において嚴密に深いリアリズムをもつところにあらう。彼はそのために作家の體驗を重んじ、又一つの作品のために充分な手數と時間をもつて材料を調査蒐集する。そしてさういふ材料の上に獨創的な想像と構成力を驅使する。かくて彼はアメリカの獨特な男女と社會の實相を描き出して、殊に一九二〇年代においてて多くの優秀な作家の中で代表的な地位を占めるに至つた。そして一九三〇年にはノーベル文學賞が與へられ、アメリカ人として最初の受賞者である名譽をになふこととなつた。

三、アンダーソンなど——近代的な仲間

シャーウド・アンダーソン (Sherwood Anderson, 1876–1941) はルイスと同じく中西部の出身である。すなはち彼はオハイオ州のカムデン (Camden) に生れ、スコッチ・アイリッシュの血統であるが、父は馬具の職人で、のちにはペンキ屋になつたが、放浪癖があつてオハイオの各地に轉々と住所をかへた。彼はパブリック・スクールの教育をうけただけで新聞賣子や農園の仕事などをし、十七歳の時シカゴに出て工場勞働者となつたが、その生活の單調さに倦いて米西戰爭に從軍、歸還して廣告業に入つた。やがて雜誌 *Dial* や *Little Review* に寄稿するやうになり、ドライサー、ベン・ヘクト、デル、サンドバーグなどいはゆる「シカゴの群」と知り、その援助をうけた。彼の作品のはじめて世に出たものは一九一五年の短篇 *Sister* であるが、その後長篇には *Windy McPherson's Son* (1916), *Marching Men* (1917), *Poor White* (1920) *Many Marriages* (1923), *Dark Laughter* (1925), *Beyond Desire* (1932) を出し、短篇集として *Winesburg, Ohio* (1919), *The Triumph of the Egg* (1921), *Horses and Men* (1923)、自傳的なものに *A Story-Teller's Story* (1924), *Tar, a Midwest Childhood* (1926) がある。

これらの內『ウインディ・マクファーソンの息子』といふのは、そのサムといふ息子が父の賤しい身分

に奮起し、故鄕を出て或る程度の成功を收めるが、やがて妻を棄て事業をも棄てゝ放浪の旅に出る。彼はついにさまざまな經驗ののち家鄕にかへつてくるのであるが、この作品にあらはれてゐるやうな立志成功の努力と幻滅・何かの夢想のまゝに轉々と放浪する西部人のいはゆる hobo spirit の動きといふのはアンダーソンの他の作品にも通ずる特色といつてよい。又旣にこの作品にもあらはれてゐるやうに、アンダーソンは機械の進出によつて職工が手の技術を奪はれ、その生活が均一に機械化されることに反抗を感ずるものであり、しかも結論としてはそれが不可抗な大勢であることを認識する。彼のそのやうな關心は『前進する人々』の如きに最も明瞭にあらはれてゐるが、三十年代に書いた『愛慾の彼方』の中でも勞働社會に對するインテリ青年の共鳴に觸れながら、その青年が愛慾の苦惱の末、無意味に落命するところに、やはり彼らしい虛無的な感傷性を見せてゐる。しかも彼は二九年恐慌後のこの失業時代において、左翼的動向に共鳴し、ドライサーとともにその方面の運動に助力したほどなのである。

このやうにアンダーソンの作品は現實のアメリカの文化や政治の問題に觸れてゐるが、その問題の扱ひ方にしばしば詩的な空想や情熱が入り込み、又表面的なものからむしろ內面へ銳い解剖を試みようとする。この解剖にあたつて彼の刀となつたものは、フロイド (Sigmund Freud) の精神分拆學に外ならない。(フロイドの說がアメリカに紹介されたのは、一九〇六年と考へられるが、一九〇九年九月にはフロイド自身

渡米して連續講演をした。）アンダーソンは彼の說に深く動かされ、性的な潜在意識の作用をもつて、作中の男女の行動や心理を說明しようとした。性の强調は旣にドライサーにあらはれ、「お上品な傳統」の激しい非難を招いたものであつたが、アンダーソンに至つて更に深刻に新らしい斷面をもつて露出されるに至つたのである。彼の作品では例へばニグロの健康な本能に對比して白人の歪んだ愛慾を扱つた評判作『黑い笑ひ』の如く、性の興味が中心をなしてゐるものがある。

彼の作品中最も注意すべきものは『オハイオのワインズバーク』で、これは短篇の連作をもつて中西部の一田舍町の各種の男女を取扱ひ、その沈滯した空氣や無知や因襲や、さういふものの中にうごめいてゐる生活の低劣さを描いてゐる。そしてこゝでもその主調をなしてゐるものは歪曲した「性」の本能である。彼はアメリカのリアリズムに一つの深刻な展開をあたへた作家として重視さるべきであり、彼のそのやうな特色はスタイン女史（Gertrude Stein, 1874–1946）から學んだ特殊な內面的な文章の手法とともに、彼よりのちに來る作家（ヘミングウェイやフォークナー）に著しい影響を見せるのである。

スタイン女史はペンシルヴァニアの富めるドイツ系ユダヤ人の家に生れ、一九〇三年以來パリーに一つのサロンをつくり、畫家ピカソやマティスと親しく交つたが、一九〇九年處女作として三人の女性を扱つた短篇集 *Three Lives* を發表、ついで一四年の *Tender Buttons, Objects, Food, Rooms* あたりから、獨特の實驗的な作風を示し始めた。彼女の文體の原理は、話す如く書かうとするにあり、そこに日常語の全く自由な再現が試みられる。そしてこのやうな文體の內質をなすものは、人間の主觀的な觀察——即ち自然主義や客觀的リアリズムの到底いたり得ない心理の解剖にある。この表現と內容における試みは、それぞれアメリカの新しい作家達の求めるものを示し、彼らに强い影響を與へることとなつた。

上記「シカゴの群」のうち、ベン・ヘクト（Ben Hecht, 1894–　）はニューヨークに生れ、十代の時ヴァイオリンを提げてシカゴに出てきたもので、いはゆる尖端的な刺戟本位の文學をものし、小說 *Erik Dorn* (1921) で評判と物議をひき起し、戲曲 *The Front Page* (1928) はニューヨークの長興行（ロング・ラン）となり、そこから彼は曾てなしといはれる高給のシナリオ・ライターとなつた。（作の一例「生活の設計（デザイン・フォア・リヴィング）」）。大戰後のアメリカ、ジャズとコクテールのアメリカには、またそれなりの近代（モダーン）的な文學が生れる。ヘクトと共にスコット・フィッツゼラルド（F. Scott Fitzgerald, Minesota, 1896–　）やカール・ヴァン・ヴェクテン（Carl Van Vechten. Iowa, 1880–　）の如きが同型としてあげられよう。彼らは舊來の道德の破壞とその中に生きる人々の歡樂や倦怠を遊戲的なまた冷嘲（シニカル）な態度で描きだす。

つぎにフロイド・デル（Floyd Dell, 1887–　）はイリノイ州に生れ、貧困のためハイ・スクールも中途で退學、工場や新聞社で働き、エンゲルスやマルクスを讀み、シカゴには一九〇八年に出てきて、*Evening*

Post の記者となつた。そして一三年にはニュー・ヨークに移つて、左翼の *Masses* や *Liberator* の編輯者となつた。その後彼の立場は自由主義の方へ移つて行つたが、元來彼にはロマンティックな夢想があり、それは自傳的な連作小說 *Moon-Calf* (1920), *The Briary-Bush* (1921) にも現はれ、機械時代の現代で、戀愛がいかに貧困に勝つかといふ主題が扱はれてゐる。それもやはり大戰後のアメリカの民衆が求める何らか打開的な新しい氣分の反映といふことができよう。彼には又そのやうな新時代への提言として *Intellectual Vagabondage* (1926), *Love in the Machine Age* (1930) などの論文がある。

四、女流作家たち

吾々はこゝにルイスとアンダーソンの文學を見て、一つの注目すべき問題があることに氣付く。それは地方の小さな町或ひは村落に外ならない。彼ら二人の作家は、中西部の田舍の出身として、いづれも田舍町を解剖し暴露することを主要な仕事とした。田舍町に沈澱してゐる傳統の束縛と無知は大戰後の活潑な青年の知性や趣味には耐へ切れないものであり、それはピューリタニズムとフロンティア精神の殘滓を檢討する意味で、全アメリカの自己檢討でもあるわけである。

かうして吾々は「村落の戰ひ」ともいふべき爭ひが文學の中に生じてゐる現象を見るのであるが、村の

側に立つてこれを擁護するものには先に述べたターキントンの如きもその有力な一人であり、その出世作『インディアナ出の紳士』では小さな村落が公共心に富む美しい人々（ビューティフル・ピープル）の幸福な一大家族として描かれてゐる。けれどもこゝに特に記したいのは女流作家のゾナ・ゲール (Zona Gale, 1874–1938) である。彼女は短篇集 *Friendship Village* (1908) によつて田園の人々の美しい宗教的な性質と勤勞と親和の生活を描いてゐる。たゞ彼女は時勢に對して甚だ敏感であつて、『本町通り』と同年にあらはれた *Miss Lulu Bett* (1920) では、村落の醜さに對してきはめて激しい暴露の筆をふるつてゐる。（この作は作者自身で戲曲化し、一九二〇年ニュー・ヨークにて上演、一九二一年度のピューリッツァ戲曲賞をうけた。）そしてその後は *Preface to a Life* (1926)、短篇集 *Yellow Gentians and Blue* (1927) 等によつてその文壇的地位を一層强固にしたが、そこには辛辣なリアリズムの傾向がます〳〵强く現はれてゐる。彼女はウィスコンシン州の生れで、ウィスコンシン大學卒業（一八九五年）の後ニュー・ヨークで新聞記者をし、また故鄕に歸り、作家として認められるまで前後十年近く苦心せねばならなかつた。彼女もその生地から見て、西部地方からあげられた一つの叛逆（リヴォルト）の聲といへるのである。しかも結局彼女は故鄕の田舍町の愛好者であつた。

次にドロシィ・キャンフィールド (Dorothy Canfield〔Fisher〕, 1879–) には *The Bent Twig* (1915), *The Brimming Cup* (1921), *Rough-Hewn* (1922), *Her Son's Wife* (1926) 等の作があるが、彼女はこの幻滅の

時代、暴露と嘲笑の時代にあつて、健全なもの平凡なものの美を認めようとし、それを近代産業や都市文化の中よりも、昔ながらの村落の世界に求めようとした。そして質素で教養ある家庭、女性の愛と知慧の力を尊重する。彼女はカンサス州の生れで、コロンビヤ大學で哲學博士の學位をとつたのち、パリーのソルボンヌ大學で學び、ヨーロッパ各國語に通じ、比較文學を專攻とする。彼女には上述の諸作のほか數篇の長篇・短篇・エッセイ・學術論文・飜譯（殊にパピーニの『キリスト傳』一九二三）等多數の著作があるが、彼女の大きな特色は世界人的な廣い見識をアメリカ獨特の題材に結合したところにあり、それによつてイギリスや大陸にまで愛讀者をもつてゐる。最近の長篇には *Seasoned Timber* (1939) がある。

次にルース・サコー (Ruth Suckow, 1892-　) はキャンフィールドより一段若い世代に屬するが、彼女はアイオワ州の生れで、大學卒業（一九一七年）ののちその生涯をほとんどアイオワ州の內で暮してゐる。父は組合派の牧師で、村人の生活の一つの中心をなす靜かな牧師館から、彼女は彼らの日々の生活を觀察し、彼らの心の動きにまで馴染んで行くことができた。彼女の作品は *Country People* (1924) にはじまり、*The Bonney Family* (1928), *Cora* (1929), *The Kramer Girls* (1930), *The Folks* (1934) 短篇集には *Iowa Interiors* (1926) があるが、彼女がそこで扱つてゐるものはことごとくアイオワの農園や村落の人々の生活である。そしてそこにはアメリカ人とともにドイツ人もある。彼女はその人たちの平凡な退屈な又殺風景な生活を描くのに、どこまでも感情の興奮を避けて誠實に平靜な態度を守らうとしてゐる。いはゞ彼女は村落の戰ひで中立の立場を取らうとするものであり、自分の熟知してゐる題材を忠實にあらはさうといふところから、平凡ながら一種の好ましい味はひがその作品から滲み出てゐる。

五、キャザーなど

この時代の女流作家のうちで最も高い評價を與へらるべきものはウィラ・キャザー (Willa Cather, 1876-　) であらう。彼女の作品の主な舞臺は田舍であり、村落の問題も當然そこに祕められてゐるわけであるが、彼女はそれを現在の社會問題としてよりもむしろ永久的な或ひは普遍的な問題として考へる。彼女は西部の開拓者たちを尊敬する。そして彼らの獨立の精神や勤勉な習慣が都市的な文化によつて破れて行くことを嘆く。しかし彼女がそこに求めてゐるものは一般的な人間の價値或ひは傳統の正しい維持である。彼女は人間が田舍のどのやうな惡い環境の中にあつてもそれに壓倒されないで、そこに何らか淸く純な精神の閃きを見せることを求める。

彼女はヴァージニア州 Winchester に近い農園の生れで、イギリスとアイルランドとアルザスの血統がまじつてゐる。八歲か九歲の時ネブラスカに移り、少女時代をフロンティアの環境の中で過した。そこ

にはボヘミヤ人やスカンディナヴィア人やドイツ人や各種の移民が居り、風雪や旱魃やあらゆる困難に耐へて土を耕す生活にいそしんでゐた。彼女は學校にも行かず家庭でよみかきを學んだのであるが、町の方に移轉するとともに州の大學に入り、一八九五年にはそこを卒業することが出來た。その間に彼女は移民を題材に小説を書くことをはじめ、ヘンリィ・ジェイムズの作品を愛讀してその感化をうけた。それから新聞の仕事に入つたりハイ・スクールの教師をしたりしたが、その間に又フランスを旅行し、小説や詩を書いた。それらの小説がかの敏腕な編輯者マックルアの目にとまり、一九〇六年彼のすゝめに従つてニューヨークに出て *McClure's Magazine* の幹部に加はつた。この後數年間ヨーロッパやアメリカ西南部地方を廣く旅行したが、一九一一年『マックルア雜誌』の地位を辭して創作に專心することとなつた。

かくて彼女は自己の直接な經驗に取材したネブラスカの物語 *O Pioneer!* (1913), *The Song of the Lark* (1915), *My Antonia* (1918) の連作を發表し、メンケンはじめ文壇諸家の推讃をうけることとなり、次いで戰爭小説 *One of Ours* (1922) でピュリッツァ賞を授けられ、その後 *A Lost Lady* (1923), *The Professor's House* (1925), *My Mortal Enemy* (1926), *Death Comes for the Archbishop* (1927) と次々に力作を發表し、三十年代に入つては *Shadows on the Rock* (1931), *Lucy Gayheart* (1935), *Sapphira and the Slave Girl* (1940) を加へた。そのうち『大司教に死きたる』は西南部地方のキアソリック教會建設の歴史に材をとり、二人

の傳道師の苦闘の生涯を描く。又『巖の上の影』は十七世紀のカナダのケベックの町に孤獨な生活を營む一團のフランス移民の團結と信仰の姿を描く。すべてそのやうに彼女の作品には人間の美しい靈や感情の尊重があり、そして人間の歴史や生涯を流れてゐる運命或ひは神の攝理に對する靜かな觀想が見られる。そしてそれを表現するに細やかな文體と愼重な脚色をもつてする。そこにヘンリィ・ジェイムズの影響もあらはれてゐるわけであるが、すべてこのやうな特色は彼女の作品を現在のアメリカ文學の中にあつてきはめて異色ある、又貴重なものとしてゐる。なほ彼女がその作品をさまざまの變つた地方の歴史や風土の上につくつてゐることは、現在アメリカ文學の大きな特色の一つである地方主義（Regionalism）を示す代表的な例とも見られるのである。

イディス・ホォートン（Edith Wharton, 1862–1937）はキァザーより先輩であつて、彼女の初期の文學修業にヘンリィ・ジェイムズとともに影響を與へた。しかもホォートン自身ジェイムズとは直接親しい交はりがあり、題材にも手法にもその影響をうけたのであつた。彼女はニューヨーク市の富家の生れで、早くからヨーロッパに連れ行かれて教育を受け、その後もヨーロッパに滯在することが多かつたのであつて、そのやうな點もジェイムズに甚だよく似てゐる。

彼女の主題とするものは、第一にはニューヨークにその初期以來住んでゐる保守的社會が鍍金時代の

成金者流のために侵入され、破壊されること、第二には社會の傳統といふものが老のやうに形式的な無意味なものであつても、その傳統にそむくものは必ず重い刑罰をうけるといふことである。第一の主題に屬するものには、*The House of Mirth* (1905), *The Age of Innocence* (1920)〔ピュリッツァ受賞〕があり、第二の主題に屬するものには評判の *Ethan Frome* (1911) や、後年の *Hudson River Bracketed* (1929) などがある。又ジェイムズの如くヨーロッパにおけるアメリカ人を題材とした作品には *Madame de Treymes* (1907), *The Reef* (1912), *The Glimpses of the Moon* (1922) が擧げられる。そして彼女も又表現を重んずる作家であり、言葉を選ぶこと、そして明晰であるといふことを大切な關心とした。

ガーツルド・アサートン (Gertrude Atherton, 1857-　) はサン・フランシスコの生れで諸國を旅行したが、一九〇二年 *The Conqueror* によつて當時のロマンス流行の風潮に乗じ評判を博し、大戰後には *Black Oxen* (1923) によつてルイスの『バビット』にとつてかはりベスト・セラーズの首位を獲得した。これは當時社會の話題となつてゐた内臓手術による若返り法を題材としたものである。

次にアンヌ・ダグラス・セヂック (Anne Douglas Sedgwick, 1873–1935) はニュー・ジャージー州に生れ、幼時からイギリスに行き一九〇八年イギリス人と結婚しイギリスで死んだ。彼女にもその作風にヘンリィ・ジェイムズの影響が見えるのであるが、イギリス生活を描いた *Franklin Winslow Kane* (1910), *Tante*

(1911) など七篇の小説を著はし、戰後には大戰期間中の英佛兩國民の性質の相異を描いた *The Little Girl* (1924) を著はして國際的な名聲を博した。

つぎにエレン・グラスゴー (Ellen Glasgow, 1874–1945) は世紀のはじめのロマンス時代には南北戰爭前後のヴァージニアに取材した努力の作品 *The Voice of the People* (1900), *The Battle-Ground* (1902), *The Romance of a Plain Man* (1909) の連作三篇を發表したが、一九二五年 *Barren Ground* を發表するに及び彼女が全く大戰後の新らしい文學に歩調を合すに至つたことを示した。すなはちその後 *The Romantic Comedian* (1926), *They Stooped to Folly* (1929), *The Sheltered Life* (1932) で彼女の描いたものは以前の彼女のロマンスとは全く似もつかない南部地方の醜惡た現實の暴露であつた。彼女は鋭い諷刺と憤りを込めて僞善的な南部の紳士や娼婦や家庭の女性の内面生活を描き出す。それは古來のヴァージニアの傳統を重んじ、家筋を重んじ、體面とロマンティックな上品さを大切に守りかゝへてゐる南部の社會に對する思ひ切つた反逆であつた。彼女の生れはヴァージニアのリッチモンドで父は富裕な鐵工所の支配人であつたが、彼女は虚弱なためほとんど獨學、スコットの小説によつて言葉の綴りや讀み方を覺えた。彼女も表現手法を重んずる方で、そのため殊にイギリスの女流作家ヴァージニア・ウルフを尊敬してゐた。

最後に、イーヴリン・スコット (Evelyn Scott, 1893-　) も、南北戰爭に取材し、その波濤のやうな

破壞力を *The Wave* (1929) によく描きだしてゐる。また精神分析的な興味をもち、ある神經病的な家族の錯雜した關係を取扱つた連作 *The Narrow House* (1921), *Narcissus* (1922) を書いた。彼女はテネシィで生れたが、二十歳の時愛人と三年間ブラジルに逃避行し、その幸福と苦難を注意すべき自傳文學 *Escapade* (1923) に記錄した。彼女は當代の女流作家の中でも、最も知性的に銳く活潑な作家といふことができるだらう。

六、新しきロマンス

ドライサー以來大戰後アメリカ文學を支配して來たものはさまざまな形のリアリズムであるといふことができるが、この風潮に背く作家もなくはなかつた。むしろ大戰後の物質的繁榮の中にあつて、民衆の一部は非現實的な空想の文學を、しかも一層近代的で都會的な種類のロマンスを求めてゐたとも考へられる。ジェイムズ・ブランチ・キャベル（James Branch Cabell, 1879—）は最も巧みにそのやうな要求に答へた作家であつた。

彼はヴァージニア州のリッチモンドの舊家に生れ、語學教師や記者の仕事をし、大戰直前までウェストヴァージニアの炭坑に勤め、一方地質學と歷史の研究に努めた。その間にも彼は *The Eagle's Shadow*

(1904) 以下數篇のロマンス的な小說を書いたが、*The Cream of the Jest* (1917) に至つて、從來のロマンスの型を破つて、歷史的現實的な要素から全く離れた空想の世界へ移つて行つた。そしてそれは *Jurgen* (1919) 以下十八篇の伯爵マヌエル（Manuel）の傳記と總稱される物語群によつて、その全貌をあらはすこととなつた。その世界は地中海沿岸にあると考へられるプワテム（Poictesm）と呼ぶ王國であるが、その國主は下賤から身を起したドン・マヌエルであり、彼から子孫の枝葉が伸びこの惡魔や妖女や怪獸や神仙の住む國に傳說と夢幻の生活を展開する。時代は中世紀から十八世紀に延び、或ひはヴァージニアの空想的な一都市にまで連絡する。上記『ジャーゲン』は元來質商である主人公がその夢想國を尋ねてさまざまな名譽や快樂を恣にしたのち平凡な日常生活に憧れて自分の店に歸つてくる物語である。このやうに彼がこのロマンスであらはさうとしてゐることは單なる空想でなく、過去と夢の世界の中に現代の世界を銳く諷刺しようとするのである。すなはち彼のロマンスは或る意味でやはり戰後のアメリカのリアリズム文學の一形態だともいふことができる。彼のロマンスが世間に迎へられた二つの原因もやはりそこにあるのであり、その上に彼はやはりこの時代のアメリカ文學の特性としての「性」の興味をそのロマンスに盛り、巧妙な比喩や隱語をもつて實は露骨な官能描寫を行つてゐる。さういふところに彼のロマンスの新らしい性格と又成功があると考へられるのである。（『ジャーゲン』は風俗壞亂の理由ではじめは發禁になつた。）

彼にはなほ數篇の小説と同様の特色をもつ短篇集があり、更に彼の特殊な人生觀と文學觀をうかゞふものとして *Beyond Life* (1919) 以下 *Special Delivery* (1933) に至る論集も重視しなければならぬ。彼は人生をはかない旅路と考へるのであり、このやうな人生に生き甲斐を與へるものはたゞ空想或は空想による美と考へる。かうして彼はアメリカの粗野な現實社會を離れるとともにそのピューリタニズムの因襲にも反撥し、そこに新らしいロマンスの世界をつくつたのである。

新らしきロマンスの作家として、キャベルに次いで考へらるべきものはジョゼフ・ハーゲスハイマー (Joseph Hergesheimer, 1880–　) である。彼はペンシルヴァニアのドイツ系の家庭に生れ、幼少から虚弱で小説の類を讀み耽り、やがてコンラドやツルゲーネフを知るやうになつたが、ペンシルヴァニア美術學校に入つて繪の修業をし、二十一歳の時少しの遺産をもらつてイタリアに行つたが、歸來文學に志すやうになり、十四年間の修業ののち、はじめて第一作 *The Lay Anthony* (1914) を發表した。彼のその後の作品は現在を舞臺とするものと、過去を舞臺とするものに大別することができるが、前者には *The Lay Anthony*, *Linda Condon* (1919), *Cytherea* (1922), *The Party Dress* (1930) 後者には *The Three Black Pennys* (1917), *Java Head* (1919), *Balisand* (1924), *The Foolscap Rose* (1934) 等がある。彼にはなほ短篇集・旅行記・回想錄等がある。

前記小説のうち『ジャヴァ岬』は彼の代表作と見られるものであるが、その中心人物はセイレムの港町に連れてこられた中國の名家の娘であり、彼女はこの異國の人々の間で異教徒と見られることを苦にしながら、しかも夫は他の女に心を移さうとし、やくざ者は執拗にいひ寄つてくる、さういふ苦惱の中に自殺してすべての解決を果すのである。ハーゲスハイマーはかつて繪を學んだ上に、古代の家具や陶器やガラスを愛好蒐集してゐるが、さういふ彼はその文學においても視覺的裝飾的な美の效果を豐富にあらはさうとするところに大きな特色をもつこととなつた。

ルイス・ブロムフィールド (Louis Bromfield, 1898–　) もロマンス作家としてこゝに考へるを便宜とするであらう。彼はオハイオ州に生れコロンビヤ大學在學中大戰に參加し、一九一七年から一九年までフランス陸軍付のアメリカ衞生隊に勤務した。*The Green Bay Tree* (1924) は製鋼業の町のロマンス的美化と見られるが、同主題の作品 *Early Autumn* (1926) はピュリッツア賞をうけ、のちそれらは四部作となつた。彼はそれらの作品に於て、當時流行の中西部的題材を取扱ひながらも陰鬱な現實主義的態度に反抗し、またアメリカ文化の粗雜さに對照されるヨーロッパ文化への憧れを示してゐる。彼はまた同様の立場から、*The Farm* (1933) においては故郷オハイオの田園の昔ながらの平和を取扱つてゐる。彼は殊に大戰後のアメリカ文學者の間から出たいはゆる國籍抛棄者の一人であつて、フランスを第二の故郷と呼び、しかも都

會や別莊地を避けて田園フランスの生活にひたつたが、同じ傾向は近年彼をインドに結び、毎年同地に渡つてその人間や文化に大きな親しみをもつやうになつた。かうして彼から異境的な香りと色彩の濃い *The Rains Came* (1937), *Night in Bombay* (1940) の如き作品が生れることとなり、ロマンス作家としての彼の存在をいよいよはつきりさせることとなつた。

さらにロマンス作家のつながりにおいて附け加ふべき一つの名がある。それはソーントン・ワイルダー (Thornton Wilder, 1897–　) である。彼はウィスコンシン州に生れたが、兩親はニュー・イングランドの傳統的血統に屬する。一九〇六年父が香港の領事となつたために、彼は香港に三年、上海に五年を過し、一九一四年アメリカに歸り、大戰後その大學教育を仕上げた。彼の第一作 *The Cabala* (1926) はローマを舞臺とし、神祕な一團の男女を描いた異國情緒の濃いものであるが、次の作 *The Bridge of San Luis Rey* (1927) では十八世紀のはじめペルーで最も美しい橋が墜落し五人の男女が犧牲となつたことから、彼らの生涯をたどつて、そこに神の攝理のあらはれをうかゞはうとする。ワイルダーの名はこの作品によつて一躍輝しいものとなつた。彼はその後三十年代に入つても小説を書き、戲曲集も *The Angel That Troubled the Waters and Other Plays* (1928) 以後數冊に上つてゐるが、一九三五年には小説を棄てゝ戲曲に専念する旨を宣言した。そして一九三八年には三幕物 *Our Town* を發表、ブロードウェイの上演に

好評を博した。これはニュー・イングランドの靜かな田舍町で營まれてゐる平凡な家族たちの愛と死の人生を寫して、人間の運命と嚴粛な神意をほのめかしたものである。ワイルダーの作品には彼の血統にあるピューリタンの宗教的色彩がつねに滲み出てゐる。そしてほのぐらい過去の世界に對する濃い愛着がある。それは偉大な或ひは深刻な文學ではないけれども、現代アメリカ文壇における一つの異彩であることは疑ひない。

七、左翼的文學

社會的抗議の文學——殊に現實の問題を捉へ、改革の意圖・理論を示した文學の動きが大戰後のアメリカにおいては一時勢を失つたことは上にもいつた如くである。そして休戰から一九二九年十月の大恐慌に至るまでの時期はアメリカ文學の主流は消極的否定的な批判或ひは暴露の態度に一致してゐた。しかしさういふ間にあつて建設的な革新の文學が全く消え去つたわけではない。むしろ大戰によつて世界的に擴がつた社會の根本的な動搖と思想の變革は必然にアメリカの文學界にも影響をもたらし、殊に若い世代はその戰線の體驗によつて、一つの幻滅の氣分の中で現代文化殊に資本主義の本質に對して反省の眼を向けることとなつた。そして二九年の大恐慌後の社會不安は一層にこの動向を深刻化し、その作家が理論的にど